て、コツペーハーゲンを攻めて之れを擊ち破り、遂に丁抹王をして降參して和約を申し込ましめました。それから直ぐに（此の時演者地圖を指して）此の道を通つて露西亞の方にやつて來られた、ペテロ大帝は大兵を準備して、瑞典王の軍と千七百年にナルバと云ふ所で軍さをしましたが其の戰に於いて非常に敗北しました。此の一事は大帝には頗る不面目でありましたが彼れの軍制が甚だ不完全であると云ことが此の敗戰によりて證明せられ彼れをして軍制組織の大改良を斷行せしむるに至りました。

カロロ十二世は勝に乘じて直ぐに此の道を通つてポーランドに這入つてポーランドでも非常に勝利を得ました。是れより更に進んでサクソニアの地方に這入つて前後七年間を費やして頻りに此の地方の征服に從事されまして、全く露西亞の事には關係せられなかつた。其の關係せられなかつたと云ふのが瑞典王の爲めには大失敗の本であり、ペテロ大帝の爲めには非常に好都合でありました何となれば大帝は此の間を利用して第一に軍制改革を斷行し第二には（此の時演者地圖を指して）瑞典領に屬するネバ河口の地を相して千七百三年にペテルブルグの

新都を創立しました。此處は元來土地が低く濕氣が多い、都を拵へるに困難で且つ不適當でありましたが澤山材木を地の下に埋めて土台を堅め漸く其の上に町を拵へることが出來ました。次ぎに千七百四年にはナルバ地方を取つてバルト海東岸の主權を握り、萬般の準備を整へ竊かにカロロ十二世の來るのを待つて居ました。

斯かる準備ありとは露知らざりしカロロ十二世は、千七百九年漸く露境に侵入し今度は（此の時演者地圖を指して）此方より此の道を通つてモスクバを突く考でありましたが、其の時コザック兵の酋長マゼパが窃かにカロロ十二世を誘つて、自分も一緒になつて露西亞の兵を討ちませうと云ふことを申し込んだ。カロロはツイ其の言葉を信用してモスクバを突かないで、此の道を通つて南方に侵入し遂に千七百九年ボルタバ城を包圍攻擊しましたが、幾ばくもなくしてペテロ大帝の軍が來たり加勢しましたから非常にカロロ十二世が敗軍し、僅かに數人の從者を隨へて、辛うじて土耳其に逃がれ、土耳其帝の保護を得て一旦は露西亞と開戰しましたが、其の中に露西亞は土耳其と和約を結びたる爲めにカロロ十二世は土耳其の

國に居るをが出來なくなり已むを得ず本國に歸りました。歸つて見ると長い間不在でありましたから國内は非常に亂れて、彼方にも此方にも騷動があつた、其の騷動を鎭定するために王は東馳西奔して軍さをして居ります中に不幸にして千七百十八年ノルウエーに於て討死を致しました。

王妹ウルリヒ、レオノラ其の後を相續しましたが最早露西亞と軍さを繼續すべき勇氣がおりませぬから千七百二十一年にニウスタッドの條約を結びました。此の條約に依つて多年ペテロ大帝の希望して居つたバルト海沿岸の地方（此の時演者堙國を指して）即ちインゲルマンランド、エストランド、リウオニヤの全部及びカレリアの一部を割取ることを得ました。

繼つて極東に於ける露清兩國の關係を見るに、大帝は、千六百八十九年に清國とネルチンスクの條約を結んで居ります、此の條約の目的は申すまでもなく露清兩國の境界を規定するのでありまして、清朝の方からは内大臣の索額圖、露西亞の方からはゴローウインが使節となつてネルチンスクに會議を開きましたが、索額圖は一萬人ばかりの兵隊を率ゐて示威的運動をして、遂に露西亞の公使をして非常な

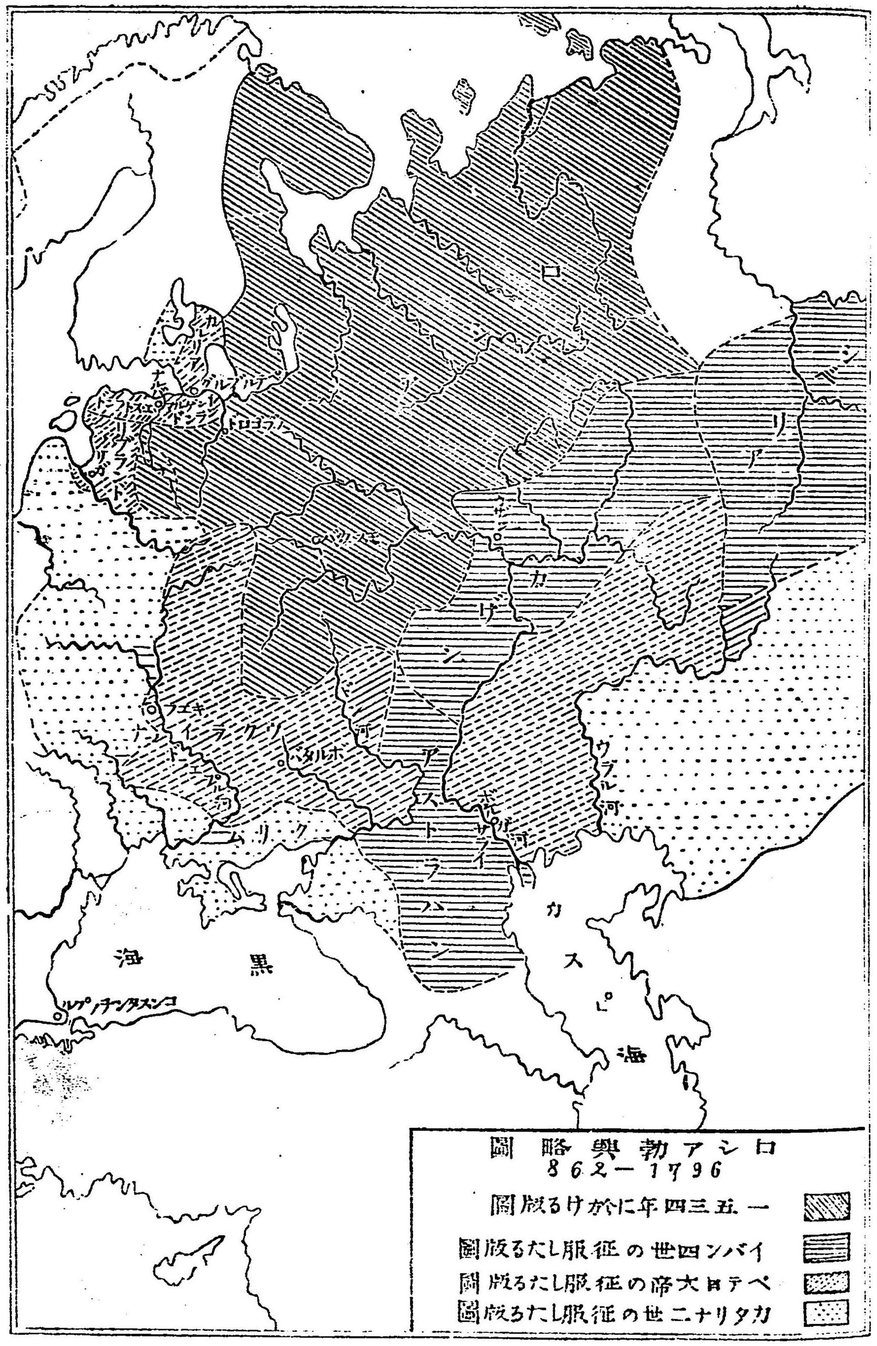
讓歩をなさしめ、ケルペチ河及び外興安嶺を以て其の境域と定めました。此のネルチンスクの條約は清朝が外國と結んだ條約中の最初のもので而かも最も名譽ある條約でありまして、此の以後の條約は皆何れも不利益なるものばかりであります。

兎に角斯くの如く内政の上に於いても、亦外國征伐の上に於いてもペテロ大帝は非常な事業を大成し、其の事業の結果として、今迄歐羅巴の諸國から殆んど知られない露西亞の國をして其の强國の中に仲間入りすることが出來るようになり、列國も露西亞が實際强國であると云ふことを承認することになりました。

ペテロ大帝が死くなられまして、其の妃のカタリナ一世が即位せられ、其の次ぎはペテロ二世、其の次ぎはアンナ、其の次ぎはエリサベタ、其の次ぎはペテロ三世、斯う云ふ順序になつて居りますが、ペテロ三世に至る三十七年間は頗る混亂の時代でありました。有名なるカタリナ二世（一七六二―九六）は即ちペテロ三世の王妃でありまして自分の夫に當たるペテロ三世を廢して、其の後を繼がれた位に大膽なる女帝であるから、其の事業に於いても頗る大膽にして且つ非道德的のものが多くあ

りました。併し露西亞の勃興と云ふ方面より見れば餘程の大事業大功績を樹てられて居る、それ故女帝の略歴は是非とも茲に略述じなければなりません。

女帝は第一にペテロ大帝の遺詔に從ひ何處迄もボーランドの地方に十分な勢力を得、第二に土耳其の方面に何處迄も勢力を伸張し、アゾフ海より黒海に、黒海より地中海に出る道を拓へようと思つて居りました。幸に此の時此の二大目的を達すべき好都合の事柄が起こつて居りました。即ち其の時のボーランドと云ふ國は餘程國内が亂れ政治が腐敗して居りました、其の腐敗して居る機會に乘じて女帝は頻りに兵力を以てボーランドの内政に干渉することをせられました。ボーランドに於いては其の干渉に耐へることが出來ませんで、遂に申し合はせて露西亞に向かつて反抗することになつた、其の時土耳其はカタリナ二世の目的は土耳其の征服であることが略ぼ分かつて居りましたからボーランドと一緒になつて露西亞に反抗することになり、遂に露西亞との間に軍さが起こりました。併しながらボーランドも土耳其も其の兵勢共に微弱くありましたから、露西亞の軍隊に當たることが出來ず、直ぐと負けてしまひました。此の有樣を傍觀して居つた普魯西、墺地利



の兩國は露西亞が土耳其の內地に非常に優勢を占むることに極力反抗し、遂に此の戰爭に干渉を試みまして、結局ボーランドを分けて取らうと云ふ相談が出來て、初めて千七百七十二年に第一回のボーランド分割を行ひ露西亞は白露西亞の地を取り、墺地利は赤露西亞の部分を取り、普魯西が西普魯西の大部及び南普魯西の一部を割取しました。（此の時演者地圖を指して）尋いで土耳其とは軍さを繼續致しましたが、到るところに土軍を擊破しまして、遂に千七百七十四年にクートチユック、カイナルデーの條約を結び、其の條約に於いて第一にクリムの獨立を認識し、第二に露西亞商船が自由に黑海から地中海に出ることを公許し、第三に露西亞の公使館をコンスタンチノプルに置くこと等の數條を規定しました。然しながら間もなく露西亞は此の條約の規定を反古にし、千七百八十三年には何等の理由もなくクリム半島をスッカリ取つてしまつて、さうして政府の命令で、是れから以後はクリム半島は露西亞に屬するものであると云ふことを布達しました。土耳其は其の布達に接し非常に驚き且つ憤慨して更に又露西亞に對して軍さを起こしましたが何分兵力が足らないものであるから復た敗北して千七百九十二年ヤシと云ふ所に條

約を結んで、クリム半島は以後露西亞の所領であると云ふことを承認しました。此の時ポーランドに於いては、前記三國の爲めに國土の一部を分けて取られたのでありますから、非常に殘念に思ひまして、それから今迄不完全であつた憲法を改正し、國内の制度をスッカリ改革を致すこととし、大分改革が出來ました。然るに露西亞の方では餘り改革して貰つては不利益でありますから、ポーランド内の露西亞黨と氣脈を通じ、擅に兵力を以て内政に干渉し、大いに改革案の實行を障碍しましたが、それが爲めに第二回目の戰爭が起こりました、けれどもポーランドは元氣非常に衰へて居る時であるから、迚も露西亞に敵することは出來ません、頻りに露國の軍に破られましたが、普魯西は其の時はフレデリッキ大王の時代にて、大王も野心勃々たる人であるから、露西亞と申し合はせて兵力を以て又ポーランドに這入つて普魯西と露西亞とが千七百九十三年に第二回目の分割を斷行しました。此の時埃地利は佛蘭西革命の爲めに佛蘭西の方に兵を出して居りましたから此の事に加はることが出來ませんでした。是故に第二回は普魯西と露西亞だけにて（此の時演者地圖を指して）露西亞はボトリア、ウオリニアの全部及びリトワニアの東

部を取り普魯西は南普魯西の全部及びダンチッヒ、トルン兩市を割取しました。斯くの如くして次第に其の領地を蠶食されたるポーランドは於いては、大いに隣邦強國の無情を怨み、頻りに其の勢力を恢復せむことを務めて居りましたが、何ぞ兵力が微弱で、其の事が出來ない、其の出來ない機會に乘じて露西亞は益〻慾望を逞しくして、更に次ぎの三つの非常に大膽なる要求を出しました。即ち第一に露西亞の軍隊は是れから以後は自由にポーランドの内に這入ることが出來る、第二には將來戰爭が起こつた場合は露西亞はポーランドの軍隊の指揮をする、第三には將來ポーランドが外國と何か條約を結ぶ場合には豫め露西亞の承諾を經なくてはならぬと云ふ三條件を提出いたしまして、強請的に之れを認識することを請求しました。ポーランドは此の要求に對しては如何に兵力が微弱であつても默つて居る譯に往きませぬ、だからしてコスチウスコー以下の勇士等は大いに憤慨して遂に是れが爲めに兵を出しました、けれども奈何せむ兵力が微弱で迚も敵ひませぬから、千七百九十五年に第三回の分割が斷行されるをになりました。（此の時演者地圖を指して）即ち露西亞はリトリニアの西部及びクールランドの地方を、埃地

露西亞勃興の概略

利は西ガリチアの地を、普魯西はワルシアワ附近及び新東プロシアの地を割取して、一時非常に盛んであつたポーランドを遂に千七百九十五年に滅ぼし其の領地は斯くの如く三國の爲めに分けて取られました。此の中で露西亞が何れ丈の面積を取つて居るかと申せば、全体合はせて十八萬一千方英里、人口六百萬、普魯西は五萬七千方英里、人口二百五十萬、墺地利は四萬五千英里、人口三百七十萬人許りであります、而して此の三國の中露西亞は全面積の三分の二以上取つて居ります。カタリナ二世は實に斯くの如き大膽な事を致しまして其の領土を擴めました、是れと同時に東洋の方に於いてはシベリアの拓殖事業にも十分意を用ゐ、更にカムチヤッカ半島から日本の千島の沿岸まで段々探險して、特に日本の漂流民を連れて歸つて、イルクーックに日本の語學校を設けて、日本語を教へて居ると云ふような事までもして居りました。それから國内の制度の上に於いても、西洋の文物を輸入し教育を奬勵し貿易事業の發達を企てて居りまして、兎に角内治外交の上から見ましてカタリナ二世は實に露西亞の國威を盛んにしたことに非常な効果がありました。

カタリナ二世が破落されましてからポール帝が千七百九十六年より千八百一年迄位に在り、其の次ぎが亞歷山一世、ニコラス一世、亞歷山二世、亞歷山三世、それから今の皇帝ニコラス二世であります。然しながらカタリナ二世以後、東歐に於ける土地上の侵略擴張は至つて微々たるもので、歷代の皇帝も主として國威を發揚することを務められたるが如く思はれます。彼の亞歷山一世（一八〇一―二五）が位に即かれました時は、丁度那翁一世が佛蘭西から起こつて、非常に歐羅巴諸國を蹂躙して居る時であつた、露西亞は初めに普魯西と一緒になりまして、此の那翁の軍に抗抵しましたが、其の時那翁は實に破竹の勢であります、メチャ〳〵に破られて、其の結果は千八百七年にチルシットの條約を結んで、遂に露西亞は那翁の命令を奉ずるようになつた。然るに其の後那翁は益〻跋扈して、千八百十二年にイスパニア、ポルチガルを征服して、更に露西亞征伐の軍を起こし、無慮五十餘万の大軍に將とし、九月七日にはボロヂノを占領し、行軍七日、九月十四日午後五時漸くモスクバに這入りました。然るに其の日から市内は大火事で十八日まで燒けつづきにて、其の爲めにモスクバの町は大概燒けました、那翁の軍隊が這入つても宿る家は

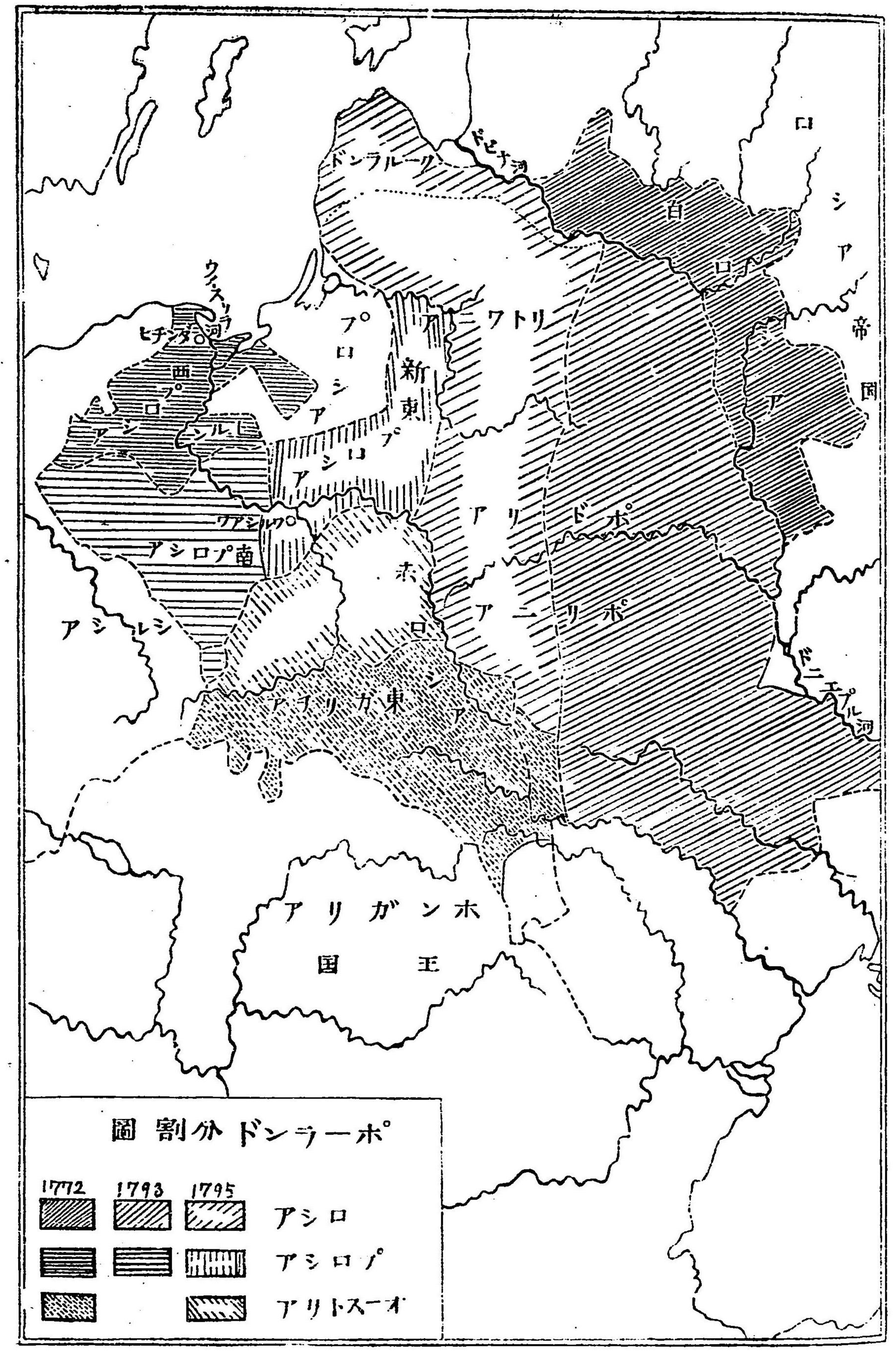
ない、糧食は缺乏して居ると云ふようなことで、段々と困難を感じて遂に三十五日間滯在して居ましたが、何とも仕方がないから、兵を引き上げることになつた。其の引上げる時は氣候は實に寒い、雪は降つて居る、且つ寒天を冒し防寒の用意もない、又非常に糧食も缺乏した、敗兵がボツ〳〵と本國の方に引き上げる、其の後ろからコザック兵が馬に乘つて長い槍を持つて追ひ縋けたから堪らない、澤山の兵士が其の爲めに無慘の最期を遂げ前例なき程の大敗北を招き、那翁一生の一大恥辱を遺したのであります。

奈翁亂後列強國は歐羅巴全國の事を極めるためにウイーンに於いて平和條約を結びましたが、此の時露西亞は何處迄もポーランドの全部を取らうと云ふ野心を貯へて居りましたが、他の強國の反抗にて其の事は失敗しましたが猶はワルシヤ ワ全國の大部分を領有することが出來ました。

平穩に復したから露帝亞歷山は主動者となつて神聖同盟を起しました。神聖同盟は耶蘇教の國の臣民を見ることは赤子を見る如く、耶蘇教の國民を見ることは一家族の如くしようと云ふような誠に表向きの趣意から見れば聞然する所のない主義を以て神聖同盟を組織しようと云ふことを申し出した。それには普魯西も墺地利も皆贊成でありました、又贊成しない譯に往かない、主義が善いことであるから……併し此の神聖同盟の内密の目的は、決してさう云ふ慈善の目的が主でなく、佛蘭西の革命に依つて發動された自由主義を何處迄も撲滅して、帝政の政治を何處までも維持しようと云ふ考であります。元來露西亞は君主專制の國であるからさう云ふ國の中に自由主義が這入ると堪りませぬから、自由主義を排斥しようと云ふ考でありましたが、幸に列國も漸次之れに贊成し、就中墺相メッテルニヒの如きは非常に贊成しまして、頻りに君主專制の主義を歐羅巴諸國に行はしめ一時保守專政の時代を形造りました。

亞歷山が死くなつて皇弟ニコラス一世（一八二五―一八五五）が位に即かれた。帝の時代には内政に就いては法典の編纂とか學校を拵へて教育を奬勵するとか、或は初めて

スタバとベテルブルクの間に鐵道を敷設したと云ふこともありますが、それ等は大した事でない、外交の方に於いて最も注意すべき事があります。當時希臘は土耳其に附屬して居りましたが、如何にも土耳其が專制をするので、到頭千八百二十年に希臘に叛旗を飜した。希臘が叛旗を飜したとは露西亞に取つては都合が好いことでありますから、陰に之れを助け後ち遂に開戰を宣告し、頻りに土軍を擊破し千八百二十九年アドリアノープルに這入つて非常に優勢でありましたから、遂に千八百二十九年アドリアノープルの條約が結ばれ、之れに依つて露西亞はドナウの河畔にある二三の地を取り、希臘の獨立を承認し、平時はボスポラス、ダルダネルスの兩海峽を各國の軍艦が自由に通行することを許し、モルダビヤ及びワラキアの二州は土帝の任命に係る耶蘇敎を奉ずる知事が治めると云ふような條約を結んで兎に角土耳其に於いて多少の土地を露西亞は取ることが出來た。次ぎにポーランドは千八百十五年のウイーンの會議に於いて露西亞が管轄をすることになつたけれどもポーランドの方には特殊の憲法を置いて、幾らか自治の政治を許して居つた所が此の時にポーランド一部の人民が謀反を起こして、露西亞に對して獨



立しようとしたものでありますから、それに干渉して、急に兵を出して到頭千八百三十二年には今迄與へた憲法も廢し、さうしてポーランドの部分を全く露西亞の純然たる屬地にし、且つポーランドに居つた人民は其の財産を沒收してシベリアの方に放逐してシベリアの拓殖に從事させることに致しました、それから其の後又土耳其の內政に干渉し遂に有名なる彼のクリム戰爭が起こりました。當時イエルサレム地方の耶蘇敎徒に希臘カトリック敎と羅馬カドリック敎と二つありまして、其の兩敎の間に軋轢を來たし、露西亞は希臘カドリック敎を助け、佛蘭西は羅馬カドリック敎を助けて、其の間の衝突になり、其の衝突と土耳其內政の紊亂と相俟つて露土戰爭となりましたが英吉利と佛蘭西が此事に干渉して遂にクリム戰爭が起こるをになりました。初め英吉利の一艦隊はバルト海に航し、タロンスタットの砲臺を襲擊しましたが、ナカ〳〵其の要害が堅固で之れを陷れることが出來ないと云ふことが分かりましたから、其の方向を變へまして、今度は黑海の方からクリム半島のセバストポールの砲臺を先づ擊破することになりまして、愈〻英吉利と佛蘭西との艦隊が黑海から此のセバストポールの砲臺を攻めた。其の時にス

ルデニア王も一万五千有餘の兵を派遣して之れを援助したから爾後サルデニア英吉利佛蘭西三國の聯合軍はセバストポールを包圍攻撃すること三百五十餘日に及びました。其の間聯合軍は種々の辛酸を嘗め、殊に越年の際には氣候酷寒であり本國より送り來たれる防寒具は運送船が暴風雨の爲めに沈没した爲めに到着しないので非常に困難を感じました。併しセバストポールの砲臺の中に籠城せる露西亞の兵士將卒の困難は尚ほ一層烈しく、其の慘狀實に言ふに忍びざる程であります。皇帝ニコラス一世も此の戰爭の爲めに非常に露西亞が失敗したのを心配されて、其の結果憂憤病を得て途に一八五五年に崩御になりました。亞歷山二世（一八五五―八七）其の後を繼承せられましたが戰爭が局を結ばぬ時でありましたから、位に即かれますと直ぐと戰爭の方に非常に忙しくありましたが何分セバストポールの城砦は長い間圍まれて糧食は缺乏する、又武器彈藥は不足を告ぐると云ふことになり遂に維持することが出來ないので千八百五十五年九月九日に陷落し、翌千八百五十六年に巴里の條約にて其の結末を見ることになりました。此の巴里の條約によりて第一黒海が中立と云ふことになり、各國の商船は自由に

之れを通行することが出來る、但し土耳其、露西亞も黒海の沿岸には決して軍港或は鎭守府の如きものを置くことが出來ないと云ふことになりました。今迄土耳其は歐羅巴の國際上の伍班に列することになりました第二土耳其より除外せられたる有樣でありましたが此の時より歐羅巴の他の諸國の間に仲間入りをすることが出來て歐羅巴の列國が土耳其の獨立を助けると云ふことになり、第三にドナウ河の自由航行を許し、第四、土耳其國内の耶蘇敎徒は回敎徒と同じく、身体及び財産の安全を保證さるゝことになりました。

敗戰の結果斯かる不利益なる條約を見るに至りたるは、實に已むを得ざることでありますが、露帝は常に之れを遺憾とし其の條項の一部を破棄すべき機會の到來を俟つて居りました。偶千八百七十年より七十一年に亘り佛蘭西の那翁三世が普魯西と軍さをして、有名な普佛戰爭が起こりました、其の結果は那翁が敗北して到頭皇帝の位を辭することになりました。此の大騷亂の機に乘じ露帝は先きに巴里の條約で極めた黒海の沿岸に鎭守府を置くことが出來ないと云ふ條約を除いてしまふことに非常に力を盡くして遂に英吉利の倫敦會議に於いて、此の條文

を削除することになりまして復た元の通りクリムのセバストポールに立派な砲臺を拵へるをになつて、露西亞の艦隊の根據地になりました。斯くの如くして段々と露西亞が慾望を逞くしましたが、其の後間もなく土耳其と軍さが起こつなのが有名なる露土戰爭であります。此の時露西亞の軍隊は一は小亞細亞の方面より黒海を廻つて進み、一軍はドナウ河の方からバルガン山を越えて、アドリアノープルの方面に侵入しましたが、兩軍共に大勝を博しましたから、此の先き軍さが繼續すれば、土耳其は將に滅亡せむとする有樣でありました、所が英吉利が其の前から頻りに其の戰爭を傍觀して居ましたが如何にも露西亞の勢が盛んであります從から露西亞に向つて干渉しようといたしました。露西亞も早く和睦しないと英吉利の干渉を受けるであらうと思ひ、急に土耳其とサンステファノの條約を結びました。然しながら此の條約には露西亞にとりて實に都合の好いことが極めてありましたから英吉利がナカ〳〵聞かない、非常に强硬の態度を以て之れに干渉して遂にサンステファノの條約を取り消して伯林に於いて條約を結ぶことになりました、之れが有名なる千八百八十七年の伯林條約であります。此の伯林の會

議に於いては最も獨逸の宰相ビスマルクが斡旋して露西亞のゴルヂャコフ英吉利のビーコンスフヰールド等と討論審議して協定したので其の主要なる條項を申しますれば第一モンテヂグロ、セルビア、ルーマニアの獨立を認識し、第二ブルガリアの領域を制限し其の一部を自治州となし、他の一部を東ルーマニアと稱し耶蘇敎を奉ずる知事が之を治めることとなし、第三に土耳其はエピラス及びテサリアの一部を希臘に讓與し、第四露西亞はドナウの河の附近に少しの土地を貰ひ第五、土耳其はボスニア及びヘルツェゴヴヰナを墺地利に讓りました。斯う云ふような土地に關する條約は詳しく地圖に就いて御話すると宜しいのですが時間があ りませぬから總べて省いて置きます。兎に角伯林條約は露西亞の爲めに非常に不利益であつた。ビスマルクは此の條約を結ぶ時に非常に露西亞の方に對して冷淡であつて、英吉利に同情を表した。ゴルチャコフは甚だビスマルクの冷淡なる態度に腹を立てて、爾後露西亞と獨逸との仲が非常に惡くなつた、彼の三國同盟に對して露佛二國が聯合を作るをになりしは抑も茲に基して居るのであります。露西亞皇帝亞歷山二世は折角露土戰爭に於いて非常に勝利を得て、而も其の結果

は伯林條約で不利益であつたものであるから、皇帝に對する露西亞國人の不平は實に甚だしくおりました。此の時露西亞には虚無黨と云ふ非常な極端黨であります、亞歴山三世、ニコラス二世兩帝の事績は極東の問題に關係して非常に注意すべきことが多うございますから、是れから概略此の極東の問題に就いて御話をすることに致しませう。露西亞のシベリア及び極東の方面に於ける侵略の事につきましてはモウ暇がありませぬから只だ其の梗概の筋道を御話致します。ベラロ大帝以來の拓殖侵略の事業は其の後歴代の皇帝が引きつづき繼紹して、頻りに極東

に意を用ゐて居ります。併し其の極東の方面に於ける侵略が最も功を奏するようになりましたのは、ムラヴキエフと云ふ人が千八百四十七年東部西比利亞の知事になつてから以後の事であります。ムラヴキエフは黒龍江の地方から日本海の沿岸に至る迄頻りに詳しい探見をして、其の方面の侵略を斷行して居りました。併し丁度此のムラヴキエフが其の事業を行はうとして計畫した時に、前申しましたクリム戰爭が歐羅巴大陸に起こつたものでありますから、一時其の爲めに英吉利や佛蘭西の艦隊が極東の方に來てムラヴキエフの計畫した部分を大分威嚇攻略に這入つたことがあります、さうしてムラヴキエフの計畫した部分を大分威嚇攻略しました。然るに間もなくクリム戰爭が局を結びまして、平和になりましたから又ムラヴキエフは東方計畫を遂行いたしまして遂に千八百五十七年には清國と愛琿條約を結び黒龍江の流れと烏蘇里江（此の時演者地圖を指して）とを以て露西亞と清國の境域を區劃いたし此のウスリー江と日本海の間の此の部分は露西亞と清國との共有と云ふをにいたしました。此の時露西亞のイグナチーフと云ふ人が英吉利と佛蘭西との聯合軍が北京を陷れて、非常に清朝が困難をして居る其の

機會に乘じて兩國の間の調停を致しまして、其の御禮として千八百六十年に北京條約を結んで今迄共有となつた地方即ち面積にすると九十万三千方英里の土地を悉く露西亞が貰ふことになりました。

露帝は又中央亞細亞に於いてはペルシヤの方からアフガニスタン、ハミールの地方に向かつて頻りに侵略主義を取つて、段々其の勢力を伸ばして居ります、現帝ニコラス二世の時代には彼の日清の戰爭が起こりまして、其の結果遼東半島を日本が取ることになりましたが、それに對して露帝は佛獨と聯合して干渉し遂に清國へ遼東半島を還さなければならぬことになりました。所が露西亞は頻りに清國と密約を結んで益々滿洲の經營に力を用ゐ、續いて旅順港、大連灣の地方を二十五ヶ年も租借をして、其處に軍港を拵へて艦隊の根據地を作ると云ふことになりました。それから此のシベリア全体の地方を治める手段として千八百九十一年以後シベリア鐵道の工事に從事し、其の前に千八百八十年に既に裏海を横斷して居る鐵道が出來て居ります。斯くの如く着々と東洋の方に向かつて露西亞が勢力を占めるようになりまして、遂に其の全体の面積は八百六十六萬方英里ばかりになることになりました、單にシベリアばかりでも其の面積略〻六百五十萬方英里即ち亞細亞の三分の一を占めて居る、斯くの如く廣大なる土地を領有せる露西亞は尚ほそれを以て飽足らずして、北清事件がありました後、滿洲を取つて撤兵の時期が來ても撤兵せぬと云ふ、實に大膽不敵の行をして居ります。愈〻其の問題に對して談判不調となりたる結果日露開戰と云ふことになりまして、頻りに我が軍の捷報が傳はると云ふことは、我々一同の非常に滿足して踴躍禁ずることが出來ない次第であります。抑〻日本が露西亞と軍さをして露西亞を撃ち破ると云ふことは單に日本の爲めばかりでない、此の東洋の平和を維持する上に於いても又世界の平和を維持する上に於ても最も必要な事であると思ひます。土耳其なり、ペルシヤなり、或はアフガニスタンなり、支那なり、朝鮮なり、何れも露西亞と境を接して居る國は皆國が微弱にして到底露西亞の大膽なる行動に對して之れを妨げる丈の實力がありませぬ、獨り我が日本が之れに對して十分なる抗抵力を有するのでありますから、日本國民の責任は、實に重いことであらうと思ふ。今後續々海戰なり陸戰の捷報が來りませうが、併し此の戰爭の局を結ぶことはまだ遼遠な事であらうと

思ふ。果たして然らば此の際に於つて日本臣民たるものは、上下協力一致して極めて愼重の態度を以て當たらなければならぬと思ふのであります。甚だ詰まらぬ事でありましたが時間が來ましたから是れだけに致して置きます。

（拍手大喝采）

現代思想界の缺點

文學博士　桑木嚴翼

只今瀬川博士の非常に有益な御演説がありまして時節柄諸君も大いに興味を感ぜられたことゝ思ひます。私は實は此處で演説をするようなことは少しも豫期して居りませなんだ事で、僅か四五日前に急に講演者の方に差支があつた爲めに是非と云ふ御頼みであり、止むことを得ず遂に出て參つた譯であります。何も新らしく考へたをもございませぬし、又先程の演説のような時節柄重要なことに就いて申す材料も持つて居りませぬから、極めて急拵への方ではんの思ひ付いたことを申さうと思ふ。演題未定として置きましたが「現代の思想界の缺點」と云ふような題にして置かうと思ひます。

今は御承知の通り日本は全く戰爭に從事して居る時代で、外の問題を研究するなどと云ふ餘地は殆んどないようでありますが、是れから私の申しますをは少しもさう云ふことに關係がないので、聊か閑事業のように考へられます。實は時節柄

何か適當なことをと考へましたが、最前申します通りさう云ふ點に就いて毫も智識を有して居りませぬ。併し考へて見ますと戰爭は國家の大事でありますから、無論吾々が非常に「インテレスト」を感ずることでありますが、併し其の問題たる他に幾らも論究する御方もありませうし、又現に今日などもありますから、始終同じような事にのみ氣を向けて遂に注意が鈍くなるを救ふ爲めに、丸で戰爭に關係ないをに心を轉ずるのも必要であらうと思ひます。又更に考へて見ると、此の戰爭に於きましては今迄の結果として無論我が國が勝利を得ることは我々の豫期して疑はぬ所でありますが、斯樣にして外部的に日本は大なる勢力を得ると同時に又内部的即ち思想界に於いても矢張大なる勢力を得なければならぬ、即ち自立しなければならぬ、時期に達するだらうと思ひます。其の爲めには吾々學問に從事するものは今から能く準備をして置かなければならぬ、即ち無論其の戰爭の爲めにも吾々は考を運らさなければなりませぬが、又同時に思想界の上に於いても今から能く心掛けて置かなければならぬだらう。さうでありますから今日此の問題を論究するのも強ち不急のことでなからうと實は思つて居るのであります。

近代に於ける日本一般の思想界の活動は實に目覺ましいものである、と云ふことは諸君も御承知であらうと思ふ。色々新しい學說が或は輸入され或は創唱せられたり、或は又新らしい書物がいろ〳〵飜譯され紹介され或は著述され其の他文學や美術などが前よりは餘程一般に普及して參つて居ります。さう云ふ譯で殆んど歐羅巴諸國に於いて何か新らしい事柄が起こりますれば直ちに吾々の社會に知られて來ぬものはないと云ふ有樣になつて居りまして、其の事は雜誌や新刊書などを見ると容易に知る事が出來ます。實に表面上に於いては今の思想界は大いに活動して居ると云つて宜からうと思ふ。併しながらそれは表面上の觀察であつてもう少し深く考へて見ると、其の活動と云ふものは或は單に表面に止まつて居るものではないか、即ち始終色々の新しい思想が這入つて來たり又幾分か創案せられたりする、併しながら一旦這入つた思想などが十分に同化され呑み込めない中に、他の新らしい思想が這入つて來る、又變はつた更に新らしいものが這入つて來る、と云ふような風に始終新らしいものが起こつて來て、前のものが少しも留まつ

て居らない。丁度廻り燈籠を見て居るような風な感じがあらはしないか。尚ほ一口に申しますれば此の活動は中々盛んであるけれども、其の活動は、輕佻なる者ではないかと云ふような疑ひを容れる餘地が十分あるように思はれる。まづ文學上の方から申しますれば、或はニーチェ主義であるとか「ロマンチシズム」であるとか其の外種々の新らしい主義や古い主義などが交互に日本の社會にも澤山唱へられて居る。さうしてそれが單に文學者藝術家と云ふ、さう云ふ特別な階級の人ばかりに限らず青年學生の間にも中々さう云ふ思想が這入つて來て居る。中學校の四五年級以上の時代の人にも隨分深くさう云ふ思想が這入つて來て居るように見えます。決して唯だ文學者とか學究とか云ふ一部分に行はれて居る者と云ふ事は出來ない。さう云ふ有樣でありますが併しながら前に申す通り其の新らしい思想と云ふものは本當に能く呑み込まれて這入つて居るがどうかと云ふことに就いて、大いに疑はしい。隨分まだ二十歳未滿所ではない、十五六歳の時分からして人生に關する大なる疑惑を有つて居る單に疑惑のみならず雜作なく之れに解釋を施して居る、即ち何々的人生觀であるとか、或は厭世主義であるとか、

或は懷疑主義であるとか何とか云つて一廉の悟りを開いて居るものが多い。或は文學藝術が人間に一番大事であつても學問だとか道德だとか云ふものは何も取るに足らぬ枝葉のものであると云ふ風に考へて學問を怠り放埒に流れるものなどゝ折々見受けられるようであります。そんな風に色々新らしい思想が這入つて居るし又依然として舊時からの思想を持つて之れに抵抗して居る者も一方にはある。それで中々活動して居るようであります。併しながら前申す通り其の活動たるやどうも唯だ根底のない表面皮相の活動ではないかと云ふ感じが始終起こるのであります。それでさう云ふことに就いて其の弊を救はうと云ふ方の考を持つて居る御方も澤山あるようには見えますが、私自身も常に其の點には注意を怠らず、如何なることが其の原因であらうと云ふことに就いて考へて見たいと思つて居るのであります。それで其の事に就いて先づ根本の原因は何であるかと云ふことを是から決めて往きませう。

其の原因は私の一寸思ひ付いた所では二ツあると思ふ。今先づ其の大體を申しますと第一には研究心の缺乏と云ふこと、第二には鑽賞心の缺乏と、此の二ツに

文學博士桑木嚴翼君

歸しはしないかと思ふのであります。一体思想界には他にもう一つ精神の傾向があると思ふ。即ち今述べた研究心と翫賞心の外に製作心であります。即ち或る思想を自分が造り出さうと云ふことそれが製作心でありますが其の製作心が或は今の思想界には充分あるか知らんけれども其の製作心の外に必要なものである研究心と翫賞心との二者が今の思想界に餘程缺けて居りはせぬか其の事が原因となつて思想界の活動が割合に盛んでありながら其の活動が空想になると云ふ傾きを持つて居るのでないかと思ふのであります。若し私の見方が間違はなかつたならば是れは確かに現今の一般思想界の缺點であつて殊に今後の大活動的思想界を背負つて立つべき青年學生などは其の點に於いて今から心しなければならぬかと思ふのであります。此の事に就いて順次に述べて參りませう。

研究心と云ふのは別に説明する迄もない色々の新らしい思想や種々の事物及び其の理由を探り或は其の事物に就いて種々の智識を得ようと云ふ其の心であります。簡單に云へば智識欲即ち是れであります。所が其の智識欲は單に青年などにはなくてならぬもののようではあるけれども、それが眞

たして澤山あるかどうかと云ふことに就いて我々は大いに疑つて居る。全く獨り青年許りでありませぬ、吾々一般に缺けて居ないかと云ふ疑ひがある。一体此の研究心と云ふものが盛んになる爲めには次ぎの如き基礎が要るだらうと思ひます。第一に進歩を好む心がなければ研究する心が起こらぬ。學生が學問を勉強しても自分の學問はどうなつても構はぬ、二年經つても三年經つても同じことで構はないと云ふのでありますれば、研究はしないで怠惰になつて仕舞ふ。進歩を好む心があるから是れでも足らぬ、まだ足らぬと云ふ風に次第々々に進んで參るのであります。即ち進歩を好む心がなければ研究心が起こらぬ。それから第二には、忍耐と云ふことが研究に必要であります。進歩を好むと云つても忍耐力がなく、非常に勞苦しても極僅かのことしか知り得ない時々は又勞苦した結果が全く無効になることもある。それで中々學問と云ふものは急には出來ぬものであります。從つて始終絶えず勉強を續ける心がなければ何事も出來ないのであります。第三には、忘我即ち自分と云ふことを忘れて仕舞ふ心がなければ研究は出來ない。學生が學問をするのでも此の學問をもつ

立身出世したいとか、或は試験に甘くやつてやらうとか、何とか唯だ我と云ふそと丈を考へて居りましたならば其の學問は殆んど一時を糊塗する學問になつて仕舞ふ。それで一般に我々が總べての研究をする時に我れを忘れて自分の一身を其の物に打ち込んで後始めて研究に從事し得る譯である、例へば實驗室に在つては自分は實驗の外に何もない、文學を研究するならば文學の中に全く自分を捧げて仕舞はなければならぬ。

今申しました此の三心狀がなければ研究心と云ふものは盛んに起こらないのであります。所が今の思想界に於いて此の三つの要件が十分に備はつて居るかどうかと云ふことに就いて我々は不幸にして否定的答辯を與へざるを得ないのであります。第一進歩を望む心が果たして今の人々の間に十分あるかどうか。勿論それは幾分かあるように見える、誰れも退歩停滯して宜いと云ふことを考へて居るものはない。併しながら其の進歩も度があります、大いに進歩を望むならば何處迄往つても盡きることはない進歩の極點は理想であつて到達することは出來ない何處迄往つても足れりとすることは出來ない筈である。然るに今日の思

想界には小成に安んずると云ふ精神が大分ある。もし此の位の事を考へて居るので滿足して仕舞ひますと研究心が起こらぬが、さう云ふ心が一方にありはしないか。進歩を望む心はありながら其の進歩を望む心が深くないと云ふことがありはしないか。それからして第二に忍耐であります。忍耐には餘程克己的の練習をしなければならぬ即ち自分の意を以て一時の情を抑制する習練が要る。所が今の思想界の人々は永く忍耐して永久の快樂を得ると云ふことは考へないで唯だ一時の快樂を目的として居るとはないか。若しさう云ふ心があつたならばそれでは研究は出來ない克己して勉強することは思ひも寄らぬ早手廻しに何かいゝ加減なことで滿足する方が宜いのである。慾りに我れを忘れる心があるかどうか是れも疑はしい。斯樣に進歩忍耐忘我と云ふ點が現今の思想界中に何れも缺けて居るような爲めに從つて研究心が缺乏して往くようなことはないかと思ふ、若しさうでありましたならば是れが確かに現今の思想界の缺點を造る原因の重なるものであらうと思ひます。

私の申しますことが果たして杞憂であるか當たつて居ることであるかと申しますに私の申すような研究心の缺乏があり始めたことを證明する事實が澤山ある。即ち研究心の缺乏から起こつて來る結果が隨分現はれて居るように見えます。第一に科學或は理學、即ち物理とか化學とか動植物學だとかが割合に輕んぜられて、文學と云ふものが割合に流行することであります。十九世紀の文明は物質的文明である、十九世紀に盛んになつた科學は皆物質科學である、即ち人間の物質的欲望を充たすに止まつて精神的の方面に益して居らぬと云ふことを唱へて、科學を輕んずる傾きが思想界の方に多い。之れに反して文學は人間の精神的進歩に於ける滿足を計るものであつて、即ち人間の感情を滿足せしむる者である、而して是れが根本的なる眞の精神的文明を造る源だと云ふ所から、文學に通じて居らぬのを恥ぢて、學校の課程たる物理學、數學などを研究して居るのは愚物であるように考へて居る學生などが隨分ある。無論私は文學と云ふものに對して非常な尊敬の念を持つて居るし、又好んで種々の文學書類を愛讀する方でありますから、一部の教育家のように文學と云ひ小說と云ふと身慄じして恐がるをは

甚だ不賛成であるが、併し乍ら現今多數の學生の唱へて居る文學の流行てふものは果たして良いか悪いか疑はしい。何故かならば學生其の他がさう云ふ風に科學を輕んじて文學を貴ぶようになつたのは其の重な原因は今の研究心の缺乏と云ふことがあるからである。御承知の通り化學とか物理學、數學と云ふものは分かり悪い、さうして一寸面白くない感じがする、それに反して文學となりますと誰れにも分かり易いようにと云ふ普遍性を一の要素として有つて居りますから、割合に入り易い、實際又面白いのである、ニュートンの法則などを諳記するよりは紅葉山人の小說でも讀んだ方が面白いのであります。それは明白なことで、どんな人でもどんな理學者でも、大抵の人はさう云ふのであります。それで文學の方はどうしても分かり易いから忍耐心がなくても這入り易い。さう云ふ所から兎角忍耐心或は進歩を望む心なしに唯だ一時の快を貪りたい、一時一寸甘くやりたい、小成に安んじたいと云ふ所から往きますと、どうしても科學より文學に傾くのが常である。無論文學がなくなつては困りますが、研究心の缺乏から生ずる文學に傾くのは弊のみの外見る事は出來ぬ。又今日青年の雜誌を見ても大抵文學的記事が多

い、眞面目な科學上の講演や、最新の理學上の知識などは青年學生其の他人々の毫も要求しない所で、たゞ平易簡短な歌文を作つたりして自ら得意がつて居る。是れ亦小さな我を立てるのに急なをの結果としか考へられぬ。斯様にして發達して來た文學は決して研究心の熾んなるを示すものと言ふ事は出來ぬ、換言すればかゝる文學の跋扈が研究心の缺乏を證明して居ると、思ふのであります。

第二は文學の中で殊にどう云ふ者が流行するかと云ふと、兎角感情想像に偏する文學が流行して理を究め組織を具へた方の文學は餘り流行らぬ。即ち論理的に説明する哲學説や、筋道の立つた複雑な文學などは排斥されて、之れに反して神秘主義や一時の感興を書いたものが一般に行はれて居るのであります。今便宜上次ぎには文學中理に富んで居る部分を例に取つて見ませうが、一体文學とか宗教とか美術とか云ふことに就きましても色々あつて單に感情一片のものではありませぬ。然るに今日一般の思想界を見ますと云ふと、所謂青年學生の中には何かなしに究理を輕んじて人間と云ふものは到底理窟では宇宙の根本を知り盡くすことは出來ない、それよりは理窟を捨てゝ仕舞つて感情に賴らう、信仰に賴らう、或

は坐禪でも組んで其の中に突然として大悟する、さう云ふ不思議な狀態がありさうなものだ果報は寢て待て、と云ふ調子で以て箕踞いて考へて居るものがある。是れは即ち神祕に偏する弊であります。

云ふのは淺墓なように見えるそれよりは信仰は力であるとか、或は感情は人間の奥底の聲であるとか云つて(それには無論眞理はあるのでありますが)それに偏して惡く解釋をして居るようなことが隨分多いように見受けるのであります。まだ果たして究理を十分にしたかどうかと云ふことは疑はしいに拘はらず、夫等の青年學生は、理屈は何も分からぬ物質科學が幾ら進んだ所で到底自然の奥底は分かるまい哲學者は幾ら骨折つても宇宙の本体を見ることは出來ぬ、唯だ悟るあるのみと云ふ風に考へて見るのであります。其の人が果たして哲學なり科學なり宗教なり何でも宜しいがさう云ふことを綿密に研究したかと云ふと、研究するのは六ヶ敷しくて中々忍耐を要し、進歩を望む熱情を有つて居らなければならぬし色々面倒でありますからさう云ふ風なことは寧ろ止めて仕舞つて、一方の神祕信仰等の方に走つて往くのでないかと考へられるのであります。要之研究心が乏

しいからいゝ加減な所で早く出來上がるようにとするのが感情的神秘的に走る所以であります。以上哲學的考察に就いて述べましたが他の文學にも同樣な解釋が出來ます。次ぎに第三に此の神祕或は想像や感情に走るをは假りに宜いとしまして、さう云ふ風な文學思想が大變行はれるとした所で、それを矢張研究的にしようとすれば隨分困難が出て來る。同じ神祕でも全く自己流のものあつて最も簡便であるが、多少古人や他國人の神祕の思想を比較參考してやつて往かうとなると中々學問が要るのである。然るに今日の所謂感情主義や神祕主義は多くは多年の考察の結果として生じたものではなく、たい全く一時の思ひ付きや偶然の傳聞から得たものである、而して斯樣な事に立ち至るのは矢張研究心の缺乏に歸着するのでないかと思ひます。從つてもし他の說を聞くにしても、たい流行の思想を追ふのみである。今ニーチエ主義が流行すると云ふとニーチエに限ると云ふをになり、文學美術が最も大切であると云ふと一も二もなく其の方に贊成して物質的文明は一向詰まらぬ者と考へ、廣く他と比較などしてやつて見るのでも何でもなく、決して研究心の盛んな結果として起こつたと見る事が出來ぬのである。

是等が確かに種々の新思想が起こり種々の活動があるに拘はらず、其の活動が案外輕佻に見える重なる原因でないかと思ふのであります。それが先づ一方の大原因でございますが、次ぎに鑑賞心の缺乏と云ふことを申します。

鑑賞心と云ふのは前に申した通り翫び味はふ心即ち面白いものを見て面白いと思ひ、美しい者を見て美しいと思ふ心でございます。是れが又思想、殊に理智の方にも現はれるので、例へば或一學說を見て如何にも理窟が正しく書いてありましたならば、成程是れは尤もと思ひ、數學の論でも物理の論でも甘く出來て居ると吾々が鑑賞して一種の滿足を感ずる。即ち鑑賞心は知力的感情であります。其の感情と云ふものが餘程思想の發達の上に必要なものでありますが、今日の思想界にそれが缺けて居らぬかと云ふのであります。一體學問の目的と云ふものは無論研究の結果上組織的知識を造ると云ふことにあるのでありますが、總べての思想界の研究も皆それに歸着すべきでありますが、從つて鑑賞心ばかりに走つてはいかぬをは明らかであります。もし餘り鑑賞ばかりすると知識は道樂になつて眞の自分自から研究して世界の知識に何等か貢獻しようと云ふ心がなくなつて來

ます。即ち物好きの知識になつて、英語で「ディレッタント」と云ふ所謂横好きの人になるですから、それ計りではいけません。吾々は前に述べた研究で飽くまで綿密に調べるのみならず又一方には製作心も持つて居つて自分の研究した結果を能く組織し或は仕上げる能力を備へて居らなければならぬ。併しながら吾々は種々の學問文藝を研究修得する時に、必ずしも自分の專門の方面のみやつて居るのではない專門の方に直接關係のないものもやるのであります。普通教育の眼目は即ち其處にあるのであります。さう云ふことは何の爲めにやつて居るのかと云へば、其の學問技藝で吾々が立派な人間にならうと云ふ爲めである。即ち一人前の人間にならう、言ひ換へれば、人格を得ようと云ふ爲めである。人間の平均狀態に到着しようと云ふ爲めである。此の點に於いて餘程鑑賞心が大切であります。鑑賞心がありませぬと、唯だ自分が早く自分の結果を纏めたい、早く説を立てたいと云ふ所に走つて居つて、十分他人の云ふことを聽き味はつて見ると云ふ閑がない。即ち餘裕がない、非常に狹隘な人間になつて仕舞ふ。鑑賞心と云ふものは確かに其の弊を拯ふものだらうと思ひます。例へば吾々の如きものが理學上の新らし

い發明を聞いて尤もと思ふ其の時吾々は鑑賞する外仕方がない。或は理學者が色々文學を味はふ其の時にも鑑賞する外道がない。是れが所謂鑑賞心なので、即ち自己の製作以外に自己を擴張する方法である。此の心がなかつたなら、殆んど人々の間に共通の點を見出だすことが出來なくなつて來る。然らば今日に於いては此の心が缺けては居りますまいか。

鑑賞心が起こる爲めには、第一には吾々は心が博くなければならぬ該博な精神を持つて居らなければならぬ、唯だ一ッや二ッの知識に甘んじて居らずに、自分の力の及ぶ限り多くのことに就いて知りたい或は學びたいと云ふ心がなければならぬと思ひます。次きには反省心がなければならぬ、唯だ見たばかりで心に殘らなければ何にもならぬ、單に該博でも鑑賞する閑がない、一度は意識の內に留まつて。それから面白いことなら面白いと思ひ詰まらぬことなら直ぐ忘れられて仕舞ふのであります。即ちそこに反省作用の入るべき部分があるのである。かく該博なる知識を持ち同時に反省をして其の上に第三には我を忘れることが必要であります。我を忘れることがなければ鑑賞する閑がない、美しい書を見て美しいも

のと思ふ其の時には書に全く心を奪はれて仕舞はなければならぬ、我を立てゝ居うては何時も面白味が分からぬ。人の說を聞くにも心を空しくすることが必要である、自分に何か考へて居ると人の云ふことが分からぬ。餘り見識自慢な人に限つて碌に書物が讀めませぬ、即ち我を忘れることが翫賞には必要であります。斯樣に該博、反省、忘我此の三ツの事柄がなければ翫賞心が起こりませぬが其の翫賞心の要件が今の思想界に缺乏して居る樣に思はれるのであります。其の證據に就いて次ぎに多少述べて參りませう。

第一に基礎となる研究が等閑にせられて居る。一体學問技藝にはそれ〴〵基礎となるものがある、例へば物理學研究には一通りの數學の知識を持つて居らなければならぬ、又物理學に關する一般の知識もなければならぬ、それからして初めて細かい事、例へば光、電氣等の攻究に進まなければならぬ。美術等の研究などでもやはり廣い所から狹い所に進んで行かねばならぬ。然るに現今はとかく基礎の方の研究は等閑にして居る。何ぜかと云ふと、其の基礎を研究するのは餘程閑が掛かつて割合に面白い結果が現はれて來ない、誰れも知らなければならぬものであるが、知つたからとて別にそれが手柄にもならぬのである。さう云ふ所から基礎的の研究は等閑にされて、一般知識を棄てゝ直ちに細かい所に走らうと云ふ傾きが多い。それは其の學問なり技藝なりを翫賞しようと云ふ心がない、「我」が一ツ何かやりたい、自分が何か學問上に新發明をして見たいと云ふ製作心ばかりがあるから、基礎的研究をする閑がない。かく翫賞と云ふ餘裕の心がないのは大なる缺點だらうと思ひます。それに伴つて人々とかく細かい問題に走り、小さな問題をのみ研究する。物理にしても廣く物理全体の知識を持つことは考へないで唯だ電氣の斯う云ふ風になつた場合はどうでするる。或は醫師にしても內科とか外科とか云ふ一般の知識をやらずに細かい部分の働きばかりを研究し、遂に大局に通ずることがない外の人のやることは少しも分からぬ。又歷史家に就いて能く見ることでありますが例へば自分は日本の歷史の中の而も奈良朝のことしか知らぬ、又他の人は戰國のことしか知らぬ、そこで戰國のことを知つて居る歷史家と奈良朝のことを知つて居る歷史家と兩人出會ふと、互に自分の知つて居ることしか話せないから、何時も外國人が二人會つた

ように言葉が通じない。又哲學にしても自分は心理學の研究をやる、心理學でも感覺を研究する、殊に眼の感覺だけ研究すると云へば、一方では自分は倫理學を研究すると云ふ、さうすると倫理學者の云ふことゝ心理學者の云ふことゝは一ッも分からぬ、同じ哲學と云ふ中に名前を有するに拘はらず丸切り分らぬ。無論專門は專門で分かれて往かなければなりませぬが、さう計りなつて來ると人は皆器械のようになつて來るので厭ふべきことと思ひます。山あると思ひます、獨り日本のみならず外國にも澤山あります。斯樣に研究が細別さるゝと共に人々皆新らしいをを思想界に貢獻するのは必要なことであります、併しながらまだ全體根本を知らずして唯た徒らに新らしいをを斗り考へたならば、決して思はしいをを得るをは出來ない、其の基礎が固くないからグラ〳〵弱くなるに相違ない。斯樣に皆我を立てゝ製作心ばかりに走るのは即ち皆翫賞心の缺乏に基づくのでないかと思ひます。斯樣な弊があるからして現在の思想界の活動が表面的に止まつて來て深い所へ這入つて來ないのではないか。文學を研究するにも例へば日本の文學を

研究するには『古事記』『萬葉』の時代から德川文學迄一通り知らねばならぬ、英文學を研究するには古い時分のチョーサー、スペンサー、シェーキスピーア等から段々現代のものに這入らねばならぬ。所がそんなををやつて居ると時勢に後れる、それで手取早く現今著名の作などを飛び讀みに讀んで直ぐ譯したり評論したり隨分大膽不敵なことをする者が澤山見えるのであります、がさう云ふ人は文學を味はつて居る閑がない、唯た自分が世に知られたい早く文學者の仲間に這入りたいと云ふ考が勝つて居るから、ちつとも面白くも樂しくもなからうと思ひます。固より唯だ昔のことや他人の事業計り翫賞して居るばかりではいけませぬけれども、今は確かに一方の方に走り過ぎて居りはしないかと思はれます。

研究心と翫賞心とがなくて製作心ばかりでは、何か自分がやりたいと云ふ心ばかり起こつて、大望心ばかり勝つて來る。少し學問すると直ぐ其の學問で名を擧げたいとなる、或國語を二三年學ぶと其の國語の飜譯をして見たいと云ふ考が起こる。所がさう容易にいかないだからやつて見ようと思ふと案外自分の腕が利かぬをがあつてそこで失望するのです。さうなつて來ると自暴自棄に陷つて仕舞

ひ所謂煩悶を生ずる。煩悶にも色々あるがさう云ふをから起こる煩悶も確かにある、自分が腕のある積もりでやつたら案外甘くいかぬ、一足飛びに豪い人にならうと思つて甘く出來ぬから非常に殘念がッて苦悶する、其の爲めに何も手が着かぬ、益々學業が劣つて來る、と云ふをが隨分あるが、其の他又、一寸割合に小才があつて成功する人がある、其等が跋扈する爲めに思想界が所謂輕佻に陷つて來るのであります。それで吾々思想界にある者は總べて其の點を考へ其の缺點を防かねばならぬと思ひます。それをするには我執を滅ぼし、小さな我を捨てゝ大きな我を立てる考がなければならぬ、自分が豪くなりたいと云ふ心を止めて、無論自分を捨てゝはいかぬが、大きな廣い我を立てると云ふ考がなければならぬと思ひます。即ち廣く基礎を造り、根を廣く張ると云ふ考がなければいかぬ、根が張つて居らぬ木は直ぐに大風で倒れて仕舞ふ、それで其の根を張るには所謂普通教育が重要であらうと云ふ考であります。今日はそこまで言はうかとも思ひましたが、思ひの外時間も經ちましたし、大体私の申さうと思ふ主眼點は研究心と翫賞心との缺乏と云ふことでありましたから、たゞに止めて置きます。（拍手大喝采）

戰時國際公法の話

法學博士　中村進午

戰時國際公法の話と云ふ題を掲げましたが、之れを極短い時間の間に悉く述べ了はると云ふ事は不可能の事でありますが、段々時が切迫して仕舞ひますが。極約めて申上げようと考へて居つたのであります。今度日本と露西亞と戰爭をしてから今日迄に起こつた國際法上の事件を三ッ四ッ掴まへて來まして、夫れに付いて學問上の解釋を下す、斯う云ふ事に變更します。第一戰爭と云ふものは國家と國家とが相互に兵力を以て爭ふと云ふ事であります。併しながら如何なる狀態が戰爭の狀態であるか或は戰爭の狀態でないかと云ふ、これは極めて大なる問題であります。譬へば今日の場合に付いて申し上げますれば此の戰爭と云ふ者は何時から始まつたのであるか、彼のローゼン公使に外務大臣が談判をして、もう國交を

絶つと言つた時が戰爭の狀態になつたのであるか、或は仁川で鐵砲の打合をした時から戰爭になつたのであるかと云ふ事は甚だ分からぬ。今催眠の狀態と云ふのを見ましたが、其の催眠の狀態に何時移つたのであるかと云ふ事は我々には分からない、（記者曰はく此の講話の前に催眠術の實驗ありたり、此の催眠術に關することあるはこれが爲めなり）夫れと同じ事で、戰爭の狀態に平和の狀態から何時移つたかと云ふ事は中々分からぬ。そこで、これは學者の間に常に爭ひがあつて大分解釋が違ふ。なぜ何時から戰爭であるかと云ふ事を確定しなければならぬかと云ふに、戰爭になつてからならば相手の國に對して亂暴な事をしても宜しい、即ち兵力を逞しうしても宜しいと云ふ事になるのでありますが、戰爭にならない內に或行爲をしたらば夫れは不當の行爲でありまして、國際法違反の行爲である。例へば敵國の船を捕まへて來ると云ふ事は、これは戰爭になつてから捕まへて來るならば適法であるけれども、戰爭になる前に捕まへるならば、多くの場合に於いて不適法であります。そこで之れに付いて今度第一に起こつた問題は日本が旅順を攻撃した事で、宣戰をせずして鐵砲を打つた、水雷を發射したから、これは日本のやり方が間違ひであると云ふ事を言つて居る。

之れを國際法の學理から解釋をするのであります、戰爭と云ふものは相手の國に向かつてアナタの國と戰爭をしますと云ふ事の申込をした上でなければ戰爭にはならぬか、斯う云ふ問題だ。喧嘩で言つて見れば、お前さんと喧嘩をするぞと言つてからでなければ撲つてはいかぬかと云ふ問題です。誰れでもさア撲るぞ宜いかと言へば、忽ち撲られないように用意をするから、愈々と云ふ時には撲ると言はなくつても撲つて構はない、夫れを不都合であると言ふのだ。昔の戰爭を見ると、日本で立派な人と立派な人とが愈々戰爭をする時分には、我れこそは何とか天皇の後裔何の何某の末孫何某である、我れと思はん者は……ちやアない何處の國でも相手にするようでいかぬから、露スケなるものは向つて來よと言つてからでなければ往かぬか、露西亞では日本が宣戰をせずして旅順を討つたから往かぬと言つて居るが、先ゴ外の國の事はさて措いて露西亞の學者は何と言つて居るかと云ふに、露西亞の國際法の學者で露西亞の人間が神樣の樣に思つて居つた人はカチエノフスキーと云ふ人で

ありまず近世に於いて露西亞の人間が國際法のオーソリチーとして尊んで居る人はマルテンスと云ふ人でありまず。此のマルテンスは其の著書の中に明らかに戰爭には相手の國へ對して宣言はいらぬと云ふ事を言つて居る、戰爭にはをしなくても宜いと言つて居る。これは佛蘭西語にも飜譯され獨逸文にもなつて居りまずが、私は今から七年ばかり前に之れを譯した事がありまず、爰に持つて來て居ります。一體戰爭に宣言がいるか、いらぬかと云ふ事は、歐羅巴で非常な問題になつて居つたので、今日は或少數の學者、極めて少數の學者が戰爭には宣言をしなければならぬと云ふ事を言つて居る。豫め言はなければならぬと云ふ其の學問上の理由はどうであるかと云ふと、夫れは豫め宣戰をしたのでないと何時戰爭の狀態になつたのかと云ふ事が分からぬ、夫れが分からぬと誰れが困るかと云ふに、相手の國も困れば自分の國も困る、第三國も困る。例へば日本と露西亞と戰爭をして居る、今は戰爭の時期であるならば、第三國は中立をすれば夫れだけの義務がある、即ち戰時禁制品を運べは押へられるとか何とか云ふ義務がある、さうすると宣戰をしないと今日本と露西亞と戰爭をして居るか、居らないか分からない

から、戰時禁制品を持つて往つて宜いのか悪いのか分からない、然るに今戰爭が始まつて居るからと言つて無闇に其の品を押へて仕舞ふと云ふ事になれば、第三國は非常に迷惑をする。又露西亞の兵隊がそこらを歩いて居ると、日本ではもう戰爭は開始されたと言つてドシ〳〵打殺して仕舞ふ、ずると知らなかつた奴は迷惑である。又國家が常に外國から戰爭をされると云ふ事の用心を、如何なる場合にも於いてもして居る、と云ふ者ではないから、或國家が不意打を食はして他の國家に極めて大なる危害を加へると云ふは甚だ危險である、若し國家が如何なる場合にも於いても戰々競々として何時敵國が襲うて來るかも分からぬと云ふとでわつたなら、殖産も出來なければ商業も何も出來はしない、始終石炭のようなものから鐵砲に至るまで武器を用意して居なければならぬとなつたら危險極まる話だと云ふのであります。所が夫れに對して御本尊たる露西亞のマルテンスは明らかに公言して居る、決してそんな事はないと言つて居る、なぜそんな事がないかと云ふに、今日は昔の樣な有樣とは違つて交通頻繁であるから、他の國が自分の國に向かつて敵意を挾んで居るかどうかと云ふことは直ぐ分かる、夫れだから今外國が自

分の國に對して戰爭をしそうであると見たら直ぐ其の防禦の用意をするから何でもない、決して不意打を食ふと云ふ事はないと云つて居ります。これは露西亞の非常に大なるオーソリチーなるマルテンスが言つて居る事である、故に露西亞が日本は宣戰をせずして水雷を發射したのは不當であると言ふのは即ち露西亞が自殺をして居るのであります。然らば第三國が迷惑を蒙むる事はないと云ふに、第三國が迷惑を蒙むる事は決してない、何となれば第三國に向かつては夫々通知をして、私の國は露西亞と戰爭を開きますからと云ふ事を日本は言つて居る、我が國に來て居る諸公使にも外務省から言うたでありませう、又諸外國に往つて居る日本の公使には日本の政府から訓電を發して日本と露西亞と戰爭をするからアナタの駐在して居る國の政府に向かつて其の通牒をせよと言うて居る即ち佛蘭西に居る日本の公使には佛蘭西の政府に其の通牒をさせ、英吉利に往つて居る日本の公使には英吉利政府に通牒をさせましたから、第三國が是れに依つて迷惑を蒙むることはありませぬ。既に第三國を危險ならしむる事なく又相手の國に對して亂暴な行爲と云ふのでもないのであるから、今日に於いて日

本が宣戰をせずして戰爭を始めたのは惡いとは決して言へない。獨り理屈の上に於いて然るのみならず近代に於ける多くの戰爭の歷史を繰り回して見れば宣戰をせずに戰爭を始めたのは枚擧に遑あらず、昔歐羅巴に於いて宣戰をしたと云ふ例があつた、夫れから羅馬法と云ふ者が頻りに儀式を重んじたから、是非宣戰は儀式上やらなければならぬと云ふのでありました。夫れから戰爭をする時に通知をせずにすると云ふは卑怯であると云ふ考からやるのでありました。所が今日のように日本と露西亞との關係が今から半年も一年も前から縺れて來て、何時戰爭狀態になるか分からないと云ふのに、露西亞は用心をして居らないして居つたけれども餘り日本を馬鹿にして居つた、日本はまさかこつちへやつて來やしまいと言つて芝居などを見て居たから不意打を食つた、若しこれが地を變へて日本の軍艦の艦長などが皆芝居を見に往つて居つて露西亞の方が勝を占めたら、彼れはどう言ふか、今日の國際法の學理として宣戰などをする必要はないと言つて色々學者の說を並べる、色々な實例を持つて來て是れだから宣戰をせずに相手を攻撃しても差支ないと言ふに相違ない。自分の方が不幸にして負けたものだから

日本は甚だ聞こえないと言ふ、實に我が儘の極である。一体露西亞はさう云ふ我が儘な國だ、此の點に付いてばかり攻撃する必要はない、總べてが皆我が儘なのである。

其の他にも色々な事件がある。例へば奈古浦丸を沈沒せしめたと云ふが如き、或は上海に居るマンジュール號が中々立ち退かぬと云ふが如き、或は日本の人が旅順から英吉利の船で歸らうとしたのを止めて置いたと云ふ如き事實がある。日本の方は露西亞と正反對で正義一方のををして居る、向かうの船を擊破してさうして其の船を沈沒させた、其の船から逃げて出た人間は佛蘭西の領事の所へ往つて庇護まはれて居る。其の中で負傷をした人間はどう云ふ事になつて居るかと云ふと、仁川の日本赤十字の病院へ送られたと云ふ事がある、或は又其の負傷者若しくは逃げた奴は以來戰爭には從事しないと云ふ誓を立てゝさうして上海へ送られると云ふ如きををして居る。

先づ奈古浦丸の砲擊の事であります。これは事實が明らかにならねば分からぬ事でありまするが、全勝丸の船長なる者の言で、新聞に出て居るだけの事實を學理

研究の材料として碎いて見れば、無論向かうが悪い、一体中立國の船に對しても敵國の船に對しても途中で遇つたらば、夫れは軍艦以外の船であつた場合で、敵の軍艦であつたら直ちに鐵砲を打つて宜いのであるが、さうでなく、平和的の船であつたら之れに向かつて先づ第一に「止まれ」と云ふ命令をしなければならぬ、其の止まれと云ふ事を命令するには或は旗を以てする場合もありませうし、旗の見えぬ時には鐵砲を打つて止まれと云ふ事を示す事もありませう。夫れはどつちでも勝手だ、又兩方やつても差支ない、最も鐵砲を打つと言つても夫は本當の實彈を打つのではなく、空彈を打つので、只だ鐵砲を打つて「止まれ」と云ふ意にするのです。然るに露西亞は全勝丸の船長の言ふ所に依ると一向「止まれ」と云ふ信號も何も掲げなかつた、さうして鐵砲を突然打つたと言ふのだから、これは誰れに聞かしても向かうが悪いと云ふ事は分かつて居る、併し向かうの方の側から言へば「止まれ」を言ふので大砲を打つたのだけれども止まらなかつた、或は旗を見せたけれども止まらなかつたとでも言ふでありませう、夫れは露西亞の事だから、夫れ位な事は言ふに相違ない。若しあの時に全勝丸が見て居らなかつたならば、若しくは不幸にし

て全勝丸も共に打ち沈められたならば、これは水掛論になつて仕舞ふか知れませぬが、一の證人が居る、これは將來に於いて此の事件が露西亞の不法であるか或は適法であるかと云ふ事を極めるに大なる材料となるのであります、此の事件は國際法上不當な事をやつたと云ふ一つのケースを國際法の歴史の上に殖やしたのであります、露西亞が一の亂暴をやつたと云ふ詰まり黒星を付けられた事になるのであります。當たり前ならば「止まれ」と言つて之れを止めて、さうして捕まへるのである、中立國の船なら臨檢をする、其の船へ士官をやつてさうして中を調べさせる、夫れから其の上で尚は疑ひがあつた時は捜索をする、捜索をした上で例へば戰時禁制品を積んで居ると云ふ事が分かつたら之れを捕まへて來て宜しい。夫れゆゑ先づ第一に「止まれ」と云ふ事を命令する事と、而して後に臨檢をすると云ふ事と、捜索をすると云ふ事と、夫れから捕まへて引摺つて來ると云ふ事と、捕まへて引摺つて來ると云ふ事と、檢所に掛けて裁判をする事に依つて、始めて適法の捕獲になる、沒收して宜しいと云ふ事になるのである。日本の奈古浦丸に對していきなり砲撃したと云ふのは露西亞の不法であります。夫れから碇山を砲撃するだらうと云ふ事は、これは相

場師か何かゝら出たので一時は砲撃したと云ふ電報も參つたのでありますが、これは幸にして嘘であつた、露西亞が之れをしなかつたのは無理もない事であります、又すると云ふ考は始めからなかつたのであります、只だ日本の沿岸を驅がして日本を困らしてやらうと云ふ考でやつたのであるか、或は日本の軍艦の力を怖いてやらうと云ふ考からやつたのでございませう。如何に露西亞が亂暴でも沿岸を砲撃するなんて、そんな事はしはすまい、獨り國際法違反の責を負ふからのみではない露は國際法違反の責を負ふ位は極めて平氣であらうが、鐵砲丸を損する、防禦も何もない所へ鐵砲玉を放つて普通の人間を打つたり普通の家を壞はしたからとて、露西亞は此の戰爭に對して何の效能があるか、何もないと言はねばならぬ、而して其の鐵砲丸を一發放つに何百圓何千圓と云ふ金が要る、これは馬鹿でもそんなことはしない。況んや露西亞は其の點に於いてはづるい國として有名な國であるから、賢明なる露西亞帝國の人間は決してそんな事はしやしない。一体今日の戰爭はどう云ふ事を目的とするものであるか少し話の順序が崩れますが、今日の戰爭は、其の戰爭をして居る所の國家、之れを名づけて交戰國と云ふ、其の交戰

國が相手方の國の戰鬪の力を殺ぐと云ふ事を目的とするものである。夫れ故に戰鬪の力を殺ぐと云ふより外の事は決してしないものである。普通の住民の家を壞したり、防禦のない所を打つたりした所で交戰國の交戰力を殺ぐ上に何の役にも立たない。昔は戰爭と云ふと相手の國を悉く亡ぼして仕舞ふのを目的として居つたものだ、而して相手の國のものなら私の財產であらうが公けの財產であらうが、又戰鬪に堪ふる人間であらうが、堪へない人間であらうが、女であらうが、子供であらうが、悉く殺し悉く取ると云ふのが目的であつた。併し乍ら今日の戰爭はさうではない。なぜ今日の戰爭がさう亂暴であつたかと云ふに、昔は事實上に於いて國民が皆兵であつた、女でも子供でも老人でも皆防禦力を持つて居つた。然るに其の後經濟上其の他の事から考へ出して來てから、の常備兵さへ酷い目に合はせなければ宜い、御一新前には武士と云ふものが戰爭を職掌として居た人間である。斯かる時代に於いては武士さへ酷い目に合はせれば宜しい、今日は常備、豫備、後備と、あるのでありますが、其の人間を殺し若しくは崩しさへすれば宜しい、即ち戰鬪力

を除いてさへ仕舞へば夫れで宜しいのである。戰爭がさう云ふように限られて來て居るから、戰爭の範圍も狹くなる、今日では歐羅巴諸國に於いても此の戰爭の範圍を狹めようとして居りますが事實さうなつて來て居る或は人に付いて狹められ、或は物に付いて狹められ、土地に付いても狹められる。例へば歐羅巴に於ける瑞西の如き、白耳義の如き、永久の局外中立國になつて居てどうしても戰爭する事は出來ないと云ふようになつて居る。日清戰爭の時でも上海は中立地であるから上海で戰爭をしてはならぬと云ふだけに狹められたのである。今日でも昔でも中立などと云ふ事はあるべきでないので昔は一体此の中立と云ふ考が間違つた考であつた、敵になるか味方になるかと云ふ考しかあるべき筈のものではない。例へば友達と交際するのに其の友達は敵であるか、味方であるか、此の二つの事しかないのに、味方もしない敵にもならないと云ふそんな曖昧な奴は甚だ要領を得ないと言はねばならん。併し乍ら實はさう云ふ奴のある方が結構なのであつて、今二人が喧嘩をするのに、片つ方は皆此の方の味方になる、片つ方はあつちの味方になると云ふ事であれば喧嘩が大騷ぎにな

る、夫れゆゑ外の奴はどつちにも味方をしないで只だ傍觀して居るとなれば誠に結構で喧嘩は早く濟むようになる、決して二人の力ではさう長くは續かない、昔は三十年戰爭などと云ふのがあつたけれども、今日は中々そんなに長い戰爭は出來べきものでないから、兩方の國の金力並びに武力に限りがあるから、さう長くは續かないどうしても戰爭を早く濟まして仕舞はなければならぬ、さうして一方の主張が通れば宜しい。今日の戰爭は敵國を亡ぼす事を目的としては居らないから、從つて今のような防禦力のない所を砲撃してはならぬと云ふ國際法まで出來て來て居るのであります。彼の俘虜を殺さないと云ふ事も又是れから出て來たのであります、日本が俘虜をしたと云ふ事はもう既に新聞にも見えて居ります。俘虜は一体敵兵であるのだからこれは殺して仕舞ふ方が宜かりそうだが之れを殺さないと云ふ理由は俘虜は戰闘力のない奴だ、故に俘虜を捕まへたらば其の武器を取つて……軍服位は着て居つても宜いが、其の武器をはいで戰闘力をなくなして仕舞ふ、さうすれば敵の武力が夫れだけ減るのだから、殺したも同樣の結果になる、殺すと云ふも餘り慘酷だから、殺す代はりに武器を剝いで仕舞つて戰の出來な

いようにすれば夫れで宜しい。俘虜の說明は極簡單で宜い、俘虜は苦しめる爲めに之れを俘虜にするのでもなければ殺す爲めにするのでもない、自分の國家を安全ならしめむが爲めに俘虜にするのである。一口に言へば國家の安全を計る爲めに俘虜にするのである、何となれば俘虜を捕まへて置けば敵國の交戰力が夫れだけ減るのであるからである。尙ほ此の俘虜を如何に待遇すべきかと云ふ事は「官報」に載つて居りますから夫れを參照されゝは十分に分かります。今日立派な萬國條約として海牙の條約で極まつて居るから、夫れを御覽になれば極めて明瞭に分かる。夫れから日本の赤十字社で仁川にある敵兵たる露西亞の負傷者を救うたと云ふ事があるが、これは一千八百六十四年に瑞西のジュネブで出來ました謂はゆる赤十字社條約、これに日本の赤十字社と云ふものは加盟して居るのであります、これには戰場に於いて病者負傷者は戰闘力のないものだからこれは救ふべきものである、斯う云ふものを救ふ爲めに立ち入る人間は中立であると云ふ事を定めてある。其の歷史は餘程長い事でありますが、彼の一千八百五十四年から六年に掛けて戰をやつて居つたクリミヤ戰爭の時に、英吉利の婦人のナイチン

グールが往つて負傷者の看病をした、さうして負傷者や病者が非常に苦しめられたのを見て、戰鬪力のないものは是非助けてやらなければならぬ、病人や負傷者を殺すは慘酷であると主張した。夫れから千八百五十九年の伊太利と墺太利との間の戰爭の時にも負傷した人間が非常に苦しんだ、これはどうかしなければならぬと云ふ事を瑞西のヘンリー、ジュナンと云ふ人が主張したり何かして、其の結果各國が合議を遂げ、千八百六十四年に赤十字條約てふものが出來た。日本が之れに加はりましたのは明治十九年であります。其の以前に日本には博愛社と云ふものがありまして、其の博愛社で以て矢張り戰場の病者負傷者と云ふものを救つて居つた。明治十年には未だ日本は赤十字社條約には加はらないが西南戰爭の時には博愛社で犬層負傷者を救うた、即ち日本には赤十字條約へ加盟以前に夫れと同じ性質のものが設けられて居つたのであります。そこで今度日本が露西亞の負傷者を救ふ目的はどう云ふ譯であるかと云ふ事は、今述べた事に依つて極めて明らかであらうと考へる、夫れから軍艦から逃げた人間は佛蘭西の領事が受け取つて保管した、保管したと云ふと物のようであるが預つたと云ふ事であります。

これは一体中立違反ではないかと云ふが、これは國際法を知らない人の言ふ事だ。露西亞の兵隊の逃げた奴を佛蘭西の領事が留めて置くと云ふ事は中立違反であらうと云ふ事を質問した人が隨分ありますが、之は全く國際法を知らない罪だ、其の逃げた奴は如何なる狀態にあるか、之は戰鬪力のない奴である、逃げた位な奴だから日本に抵抗する奴ではない、夫れゆゑ逃げて佛蘭西の領事館へ這入つたのだから、佛蘭西の領事館で夫れを捕まへて置けば宜しい、決して中立違反にも何にもならぬ、何となれば佛蘭西の領事が其の逃げた露兵が日本の軍隊に抵抗すると云ふのを助けたのではない、殺されるといかぬから、そこで領事の所へ逃げて往つたと云ふだけの話で、元より戰鬪力のない奴だから中立國たる佛蘭西の領事が預かつたのである。夫れなら其奴が又逃げて露西亞の方へ往つて戰爭をしたらとうするかと云ふ慮があるから爰に於いて中立國には一の義務が生ずる交戰國の逃げた人間が中立國の手に這入つたら中立國は其奴の武裝を殺いでさうして戰爭に加はらないように之れを預つて置かなければならぬと云ふ義務があるのだ。さうすれば最も戰爭に加はらないから仕樣がない詰まり捕虜になつ

た人間と同じ事だ、病氣になつた人間と同じ事で、もう戰爭に加はらないから宜しい。これが中立國の一の義務だ。尙は海上に於いて石炭を中立國が積み込ましてはいかぬと云ふ如き、或は海上に於いて中立國の港へ這入つたらば之れを二十四時間に立ち退かせなければならぬとか云ふ如き義務がある。これは佛蘭西も國際法の非常に發達した國であるから是れ位な事は承知である、無闇にさう云ふ事を以て國際法違反であると攻撃すると、却つて其の攻撃する人間が笑はれる。如何に露西亞に同情を寄せて居る國と雖も佛蘭西はさう無闇な事はしまいと思ふ。日本などは今日こそ國際法も隨分盛んになつて參りましたが、昔しは中々酷かつた。明治三年の普佛戰爭の時に日本は局外中立と云ふ事を宣言しましたが、其の實局外中立と云ふ事は何の事だか一向知らずに居つた、さつぱり分からなかつた、只だ其の戰爭の味方をしない事だ位に思つて居つたのだ、所が愈〻局外中立をやつて居る其の時に佛蘭西の軍艦が日本へ來たさうして水が欲しい、石炭が欲しいと云ふ者だから、夫れを皆やつたずると戰爭の濟み際になつてから、日本に來て居る獨逸の公使を經て獨逸政府から、あなたの國では中

立を守つて居ると言ひ乍ら佛蘭西の軍艦へ石炭をやつたと云ふ事であるが、そんな事をしても宜いのかと言つて一本突ッ込まれた。日本では非常に驚いてさういますから、外國から見れば馬鹿にされたも無理もない。露西亞が今日に於いて日本を馬鹿にして居るのもさう云ふ履歴があつたからだ。併し乍ら三日見ざれば元との阿蒙にあらずで、今日は是れ程に成長をして居るのである。彼の朝鮮などは未だ局外中立とは言つて居る、が少しも夫れだけの事をして居らぬ、日本の味方をして居る兵隊が往つても一向平氣だ、夫れから此の間何とか云ふ中佐か何かが朝鮮の皇帝陛下に謁見をした所がアナタの國の軍隊が幾ら這入つて來ても少つとも差支ない、私の國の獨立さへ維持か出來れば差支ないと言はれたと云ふをである。餘程これは面白い、どうも名言だらうと思ふ。アナタの國の兵隊などは幾ら這入つても宜しい、私の國の警察もアナタの國で扱つても差支ない、私の國の大藏省も皆アナタの方に御任せしまず私の國の獨立さへ維持されゝば夫れで宜しいとは面白いをである。そこで

朝鮮の局外中立と云ふ事に付いては妙な事がある、これは大三輪長兵衛と云ふ人に私がまのあたり聞いた話で、決して虚でない、夫れは朝鮮の皇帝陛下と言つた時分ではない、國王殿下と言はれた頃の事でありますが、大三輪長兵衛と云ふ人が遇つた。所が永久局外中立と云ふ話が出た、其の時に或大臣が永久局外中立とはどう云ふことであるか、夫れは何處の國からも攻められないと云ふ事だと、斯う云ふ定義を下した。そこで其の大臣が考へて成程其の道具は何時來ますと云つたと云ふをである。局外中立といふ機械があつて夫れを國境に置くと何處からも兵隊が這入れないのだと思つたのであります。これは虚のような話であるが事實だと言つて話をされました。局外中立をそんな事と心得て居る。

餘り話が横へ走つて本尊の國際法の話はなくなつて仕舞ひました、日本の人間を露西亞が歸さずに置くと云ふこれが又大いなる問題でありますが、これは別に悪い事でもない今日の國際法はまだ敵國の人間を自分の國に捕まへても置いて悪いと云ふことは認めて居らない、日本では内務省の訓令で何でも露西亞人がこちらに居て平和の業に従事す

るならば決して日本を去るには及ばないと云ふ事が出て居ります、其の代はり若し何か悪い事をしたり日本の秩序を紊すような事があらば何時追ひ出すかも分からぬ、國家が其の相手の國と戰爭をすると其の相手の國の人間を追ひ出すと云ふ權利は勿論ある、併し留めて置くと云ふ權利はあるかどうか、斯う云ふ問題になるのです。夫れは勿論ある例へば、日本が今日露西亞の人間が本國に歸りたいと云ふ時に之れを歸さぬと云ふ權利があるかと言へば、夫は勿論歸さぬと云ふ權利はあります、其の權利があるといふのは軍情が露西亞へ漏れると云ふ虞がある場合で、其の場合には留めて置いて宜しい。又露西亞の方の味方をして考へて見ると、今此の日本人が歸れば日本の國家に露西亞軍隊の動作などがはつきり分かるからいかぬ、斯う云ふ理由で留めるならば宜しい。けれども、露西亞では日本に旅順を砲撃される時に、んと理由さへあれば宜しい。

日本の軍隊が日本人を打つようにしようと云ふ考で留めて置いたらしい。併し幸にして亞米利加の公使であつたか領事であつたか、露西亞に向かつて抗議を申し出してさうして之れを歸さしたと云ふ事がありますから、夫れは事實にならず

に濟んだようでございます。これは日本の爲めに賀すべき事であるのみならず露西亞の爲めにも賀すべき事であります。尙ほ是れから後にも色々な問題が起つて來ようかと思ひます。夫れでありますから此の問題の起こつた時に一々之れを解釋するには、どうしても戰時國際公法てふものを始めから其の大體なりとも知つて居らなければならぬのであります。夫れでありますから、是れから只だ露西亞と云ふ國の……最も之れを悉く御話する事は出來ませぬ。夫れでありますが、どうも今日は之れは、もこれは瀨川さんが「露西亞勃興の概略」と云ふ題で既に御話になつた事かとも存じますが、兎に角露西亞は今日迄どう云ふ風にして是れ程盛んになつて來て居るのであるか、露西亞勃興の概略を一言述べて、夫れから露西亞が平和の假面を被つて居る事を一言述べようと思ふ。

露西亞が今日斯くの如く盛大になつて居る所以と云ふものは盛大と云ふは文明になつて居ると云ふ事ではない國が大きくなつて居ると云ふ意味だ。どういふ事でこんなに大きくなつたかと云ふに、先づ私の常に注目して居る所であります が、露西亞と云ふ國は外國の土地を取る時分に昔から決して離れては取らない、地

續きに取つて居る、これが餘程エライ所だ、英吉利などは離れて居つたから亞米利加合衆國などと云ふあんな大きなものに獨立した所があるか、芬蘭も取つた波蘭も取つた、其の他色々な所を取つて居るが一として獨立することは出來ない、夫れが露西亞のエライ所である。露西亞が實に明であると云ふのは即ち夫れだ、夫れからもう一つは露西亞は中々戰爭をしない國であります。これも事實上歷史上に徹すると大抵負ける、負けても何でも人の國の土地は取る。例へば、露西亞の今迄の歷史を繰り回して見ると佛蘭西と戰爭をした屢々負けて居る、瑞典と戰爭をして始終負けた、さうして終ひに一寸勝つた。丁度漢の高祖だ、屢々負けて終ひの戰の所で勝つたから、負けたのは四十回負けても五十回負けても最後の一勝で取り返して仕舞ふ、其の覆轍を皆外の國が踏んで居る。夫れは戰爭をしてから後の話であります が、中々戰爭を迂つかりしない、戰爭をするぞと云ふ樣子を見せて中々戰爭をされると畏いから、若し戰爭をしたらどの位取られるか分からないと云ふので、戰をせずに此

の位取られて御免を蒙ると云ふ氣になる。そこでどうか戰爭はせぬ樣に、是れだけ上げませう〳〵と言つて持つて來る。何時も戰爭をしないで大きな土地を取るようになつて居る。これは今日迄の歷史に徹して極めて明らかであらうと思ふ。夫れから露西亞は一種の才取のような國家であります、仲買人のような事をやつて居る、自分が資本を下してさうして利益を得るのではなくて、人に働かして置いて自分がうまい事をやつて居る、即ち人をダシに使つて居る。其の例を言つて見れば、遼東半島を日本が取り返されたと云ふ樣な時には、日本と支那との爭ひをダシに使つてさうして自分が跡で滿州を占領する、或は旅順、大連を二十五ヶ年の租借と云ふ名義で取つて居る、或は千八百六十四年の支那に對する、英佛同盟の時には、自分が仲裁をしてやつたからアナタの國が夫れ程酷い目に遇はなかつたなどと言つて少し土地、是れ程の御世話をして上げたのだから黒龍江の沿岸を呉れろを取つて居る、餘程夫れはうまい所であります。又歐羅巴の方面を見ますると普佛戰爭が始まつた時には、露西亞は黒海に軍艦を浮かべてはいかぬと云ふ條約があつたのだが、今獨逸と佛蘭西とが戰爭をして居ると、獨逸に向かつて露西亞は斯

う云ふ約束をした、アナタの國が若し露西亞が黒海へ艦隊を浮かべる事を認めるならば、所謂條約に違反する事を認めるならばアナタの背後は決して襲はないと言ふ事を約束した、即ち普佛戰爭の時に露西亞は普魯西に消極的の味方をしてうしてアナタの國の背後を襲はないからうた、これも即ち一種の才取だ、何時でもさう云ふ才取をやつて居るのだ。而してその働きたるや、露西亞は賢明であるから自分一人で決して責任を負はない、必ず其の責任を分かつて居る、自分一人が悪い事をすると外の國から色々言はれるから必ず自分の國と外の國と共同して悪るい事をする。三國の干渉即ち夫れだ、露西亞ばかり悪いのではない、佛蘭西も獨逸もやつたと云ふ事になる。波蘭を分割した時も露西亞のみが取つては居ない、獨逸も取つた、墺太利も取つて居る。何でも一人では決してしない、これが今日迄着々成功して居る。餘程エライ國だ、賢明なる露西亞帝國だ。今度の事なども詰まり其の賢明をやつたのであります。所が今度は其の賢明も化けの皮が現はれて來た、實は成る、たけ戰爭をせずに日本を酷い目に遇はせようと言つて戰爭をするような顏をして居つた、所が日本から戰爭を

しかけられてドン〳〵負ける、餘りこれは賢明に過ぎたのだ。此の賢明なる露西亞帝國は將來に於いても益々賢明であらうと考へるのであります、次ぎに露國の一の特色は今迄自分の國を人に取られた事がない、夫れで若し何處か一つ取られたら非常に激するに相違ないから、中々今度の戰爭も意地強くやるだらうと思ふ。日本は幸ひであるか、不幸であるか知らぬが、十分の武威を現はす事が出來るようにしなければならぬ。これが國家の急務であらうと思ふ。又此くの如き賢明なる露西亞帝國に武威を現はす事が出來るならば、日本は更に大なる賢明であるに相違ない。所で戰爭の經過に依らなければ分からぬでありますが、露西亞から果たして土地を割くことが出來るか出來ないか、これも考へなければならぬでありませう。或は日本國民の元氣が續くか續かないかと云ふ事も考へなければなりませぬし、又日本の財政が續くか續かないかと云ふ事も考へなければならぬと思ひます。これは日本國民の元氣は此の戰爭が三年續いても五年續いても衰へざる事は疑ひないのでありまます。先きの那珂さんの御話のように日本國民は敵の支配の下に立つと云ふ事になれば決して生きては居らぬ國民であると云ふ事だが、

全く其の通りの國民です。併し乍ら日本の歷史に於いて自分の國を取られたと云ふ歷史があるから困る、即ち樺太を露西亞の爲めに取られた。其の名は千島と交換ではあるが、其の實は取られて居る、日本は露西亞の地を占領したと云ふ事はない、露西亞は占領したと云ふ事實がある。これは飽くまで取り返すと云ふ決心がなければならぬのである、日本の國民の責任と云ふものは又國家の責任と云ふものは非常に大きなものである、而して速かに露西亞を亡ぼすべしだ。これは敵國だから亡ぼすと云ふ意味で言ふのではない、私の考では露西亞は万國の敵であると考へる。何となれば彼れは野蠻なる暴力を用ゐる國であり乍ら常に平和を主張して居る。彼の万國平和會議を開いたのも露西亞の主張だ、一千八百六十七年には四百グラム以下の彈丸を作つてはならない、さうすると極めて慘酷である、もう戰は止めなければならぬと云ふ事をアレキサンドル二世皇帝が唱へられた、千八百七十四年は白耳義のブルッセルで以て陸戰に關する法規を拵へる爲めに會議をした、夫れは實際條約にはならなかつたがこれも主張したのは露西亞であ

る。卽ち一方に於いて平和の假面を被つて居り乍ら他方に於いて惡い事ばかりする。鬼の面を被つて惡い事をする奴が憎いか、或は柔しい顏をして居つて惡い事をする奴が憎いか、それは勿論鬼の面を被つてさうして惡い事をする奴は万的惡事の出來ないものである、平和の假面を被つてさうして惡い事をする奴は万國の敵である。故に今日露西亞を日本が征服すると云ふことは、必ずしも取つて仕舞ふと云ふ意味でなくても宜い、兎に角討伐すると云ふ事は獨り國際法の保護者であるのみならず日本の仁義王道を世の中に廣めるに大切な事であらうと思ふ、今迄日本は支那や朝鮮を打ち懲らしたと云ふ事實はあるが、これは皆外國に餘り響かない。然るに今日若し露西亞を非常に酷く打ち懲らすことが出來るならば日本は開闢以來始めて毛色の變はつた大敵を打ち懲らし又討伐する事が出來るのであつて、これは日本に取つて極めて賀すべき現象であらうと思ふのであります。

又外國の新聞雜誌を見ますると、どうしても日本は戰爭をしようとは思ひませぬ、又戰爭をしたら負けると思つて居つた例へば外國で出來た新聞雜誌の二三のポ

ンチ畫を見ますると斯う云ふのがある、日本の女が小供を背負つて居つて、其の子供はコレア（朝鮮）と書いてある、さうするとこちらから露スケが來て其の子供を取つて介抱してヨシ〳〵と言つて居る。如何に外國が日本を見くびつて居るかと云ふ事は之れを見ても分かる、これは最近に來た雜誌です、今から一月半ばかり前に發行された雜誌です、夫れから又他のポンチ畫を見れば日本が朝鮮と云ふ穴の前で一人でブル〳〵ふるへて居る所へ、英吉利がこちらから來て私は後から往くからお前先きへ往けと云うて居るような事が書いてある。日本は中々一人では何もやれない、英吉利が背後からやつて呉れるから夫れで英吉利の御蔭でマアどうやら斯うやらやつて居るのである。と思つてそんなものではない、英吉利の御蔭を夫れ程に多くは蒙つては居ない、今日までも外債を募つては居らぬ、何處から一文も金を借りては居ない。斯くの如き幸福なる時代に我々が現存して居つたと云ふ事は非常な名譽であると思はなければならぬ。日本の或る人間例へば受負人などが兵卒にまづい飯を食はせる、これは以ての外の話だらうと思ふ、これは露探以上だと思ふ。そんな奴はどし〳〵罰

「してやらなければならぬ。さう云ふ悪い事をする奴を棄て置けば大切の日本の軍隊が働く事が出來ないと思ふ、さうしたら日本の國威を外に輝かす事は出來ない。幸に日本が今日露西亞を討伐し、さうして露西亞を歸服させたら、露西亞が日本に服する事は尙は支那が日本に信頼する如くになるであらう。さうなつたら獨逸も佛蘭西も亞米利加も伊太利も皆日本と云ふ國は、仁義王道の國家であるといつて、日本の王師の向かう所簞食壺漿して之れを迎へざるものはなからうと思ひます。さうすれば露西亞人が今國際法違反をしても日本人は日本人でやつて往けば催眠術も何もない、私は今催眠術の實驗を見て居つたが、どうかして露西亞の軍艦に催眠術を掛けて見たい、お前の方は少しも利かなくなつたと言へば夫れで向かうは利かなくなる、お前の方の軍艦はもう少つとも動けないぞと言ふと忽ち其の通りになる、夫れは言葉で言つたつて中々分からないから何か章を以て夫れを書いて遠い所からズット大きな旗か何かで「動けないぞ」とか「もう鐵砲は打てないぞ」とかいつて、さうして催眠術の力で露西亞を降服させようと一寸考へては見ましたけれども、其の催眠術よりはもつとエライものがある、即ち日本の仁義

正道、國際法、之れを眞向に振りかざして往けば、宜しいのであります。向かうが悪い事をしたと言つて日本がそんなに憤慨しなくても宜しい。國の大きい上から言へば向かうの方がエラそうに見えるか知らぬが、人間の大きい奴は必ずしもエライと限つては居ない、大男總身に智惠が廻り兼ねと云ふ事がある。足の方は足の方でやれと云ふのでアレキシイフにやれ、手の方はスタルクにやれ、頭の言ふ事は聞かずにマカロフなどが居るから忽ち負けて仕舞ふ、大男總身に智惠が廻り兼ねと云ふは即ち是れだ。種々雜多なものが一つ体になつて居る、國が餘り大きいから、人間のがかいが大きいから色々な事で故障が起こる、これは日本の爲めに大いに賀すべき現象であらうと考へるのであります。

臺灣土産

文學博士　那珂通世

昨日早稻田の中等教育會から今日青年會館で催す講話會で何か話をして呉れと云ふ頼みがありました。今日は夕刻より餘所の會に先約もあるから出來ないとも一應御斷り申したのですけれども、其の前で宜いから一寸出いと云ふことでありまして、辭することが出來ず、併し何の話をしたら宜からうと云つた所が、私が先月臺灣を見物して歸つたに就いて、臺灣の話でもして呉れと云ふことで、さうしませうと云ふことになつて、今日出て來ました所が、こゝに『臺灣土産』と貼り出してあります。

さて臺灣の土産と申しますと、先づ樟腦は一番名高い産物で、續いては砂糖、鹽、五穀、果物など隨分澤山ありますが、樟腦などは今盛んに製造して居ります。樟樹が山に澤山ありますから、毎日伐つて樟腦を製しても、四十年位は今ある樹を以て樟腦を製することが出來ると云ふ話であります。又臺南の方に往きますと、平原の廣

十年前の那珂博士

いことは、關東の平原即ち昔の武藏野の原の廣さに續いた廣い所で、それに一面砂糖黍が植ゑて居ります。少し小高い所から望むと、奈須野が原の茅が茂つて居る所を望むように見えますが其の間に這入つて見ますと、茅でありませぬ、皆砂糖黍が七八尺から一丈ばかりの高さになつて茂つて居ります。隨分自轉車と云ふものは早いものですけれども其の砂糖黍の間を何時迄走つてもつきず、十里二十里の間砂糖黍の間を走つて居ります。隨分退屈します。

鹽は餘り良いのが出來ないのです。一寸内地の鹽と違ひますのは、内地では鹽釜で鹽を煮詰めて鹽を製するのですが、臺灣は熱帶地でありますからして、火を焚く必要はありませぬ。鹽を汲んで置けば、天日で獨りでに蒸發が早うございますから鹽が出來る。尤も砂や埃の混つた鹽で粗末ではありますし、唐辛は木になつて居りまして、七八尺の高さの木で南瓜でも大きなのがありますから、長けの低い人には取れませぬ、階子を掛けて唐辛を取ることも有るそうです。併しそんな物は、一寸旅行した所で御土産になりませぬ。持つて參るとしますと、蜜柑、香蘭、パイナップル、芭蕉の實などであります。蜜柑には色々種類が

ありますが、其の中三通りばかりあります。雪柑と書きましたのは、一番水氣が多くて甘うございます。それから凸柑と云ふ蜜柑は、皮と中の實の間に隙間がありまして、先づ紀州蜜柑のような味でありますが、紅柑と云ふのは、此方の雲州蜜柑のように、中の袋と上の皮との間に隙間がありませぬ。これは大層甘くて、雲州蜜柑より甘うございます。それらは何れも大きさは此方の橙位の大きさでございまして、紀州のようなのも雲州のようなのも、大きさは此方の倍位ありますから、私考へるのに、紀州蜜柑や雲州蜜柑は何でも臺灣から渡つたか支那から渡つたか知りませぬが、凸柑などは日本の地に植ゑると、段々小さくなつて紀州蜜柑になるだらうと、紅柑は、日本に這入つては雲州になるだらうと思ふのでございます。香櫛一ッ手巾に包んで往きさは、人の頭位ございます。旅行して咽喉が乾いても、香櫛一ッ手巾に包んで往きますと、途中で水を飲む必要はありませぬ。臺灣は水の悪い所だから、水を飲んではいかぬと云ふを戒められて、自轉車で走つて水を飲まれぬでは困つた話だと思ひましたが、其の香櫛を一ッ持つて出掛けますと、半日位は咽喉が乾けばそれを引缺き〳〵たべて走られる。何しろそれらは皆年中あるのでございますから

旅行などしては面白い所と思ふ。旅行などは意地の汚いもので、咽喉を渇かしたり腹が減つたりすると、飲んでは歩き食べては歩きしますから、さう云ふ便利な食物があると、旅行は愉快です。さういふ土産ならは私も實は臺灣から蜜柑などを多少持つて來たのでありますが、大抵蒸氣船の中で食べて仕舞つたから、それを諸君の前に提出することも出來ませぬ。ですから向からから持參致した土産は一ツもございませぬ。今日何を提出すれば宜いかと思ふと、實は臺灣から持つて來たのではございませぬ、臺灣に往く前に此方で用意を致して居るものがありますがそれはどんな者かと云ふと、申す迄もない私の流義の歴史の話でございます。それを以て御土産の代はりに御話するより外仕方がない。

彼の臺灣と云ふ所は、日本では昔高砂と申した所でありまして、足利の末に日本の海賊が支那海日本海を横行して居つた時代かあります。其の時分隨分支那朝鮮をも惱ましたのでございますか、後には日本の内地の方に戰國と稱する戰爭流行の時代がありまして、内地の戰爭が盛んなものですから、海賊は外で戰爭をするよりは、内へ歸つて武勇の名ある諸大名の幕下に附いて働く方が愉快だと云ふので

海賊が段々減じました。それと同時に文明の方の海防即ち海の防禦も力を用ゐるようになりましたからして、支那の陸に打ち入ることは面倒でありますから、支那海の内の今の臺灣即ち高砂を足溜りに致しまして、日本人が大分彼處に住居したことがあるのです。彼の島に今の生蕃が移住したのは何年からか知りませぬが、生蕃の住居は歴史以前のことでありますから、臺灣の歴史の始まりは日本の海賊——海賊と云つても野武士——ではありませぬ、海武士とでも云ふべき浪人達が彼處に住んだのが始まりてございます。

其の後になつて、和蘭が支那へやつて來て、彼の澎湖島を占領しましたが、明の大將と掛合の上に澎湖島を追ひ出されたのです。其の時の條件に、臺灣を占領するが、それに對して故障を云ふまいと云ふことを約束してさうして澎湖島を明に明渡して臺灣に渡つて彼處を占領した。其の頃臺灣と云ふ所は、生蕃ばかり多く住んで居りましたが、中には多少日本人も住んで居り、支那人も少し居りました。和蘭人がそれを占領して、生蕃支那人並びに僅かの日本人を統治して居つた間は、僅か三十年ばかりの間です。さうして居りますと、清朝が北から起こつて、明の國は

ラ〳〵に敗れて仕舞つた。さうして其の明の爲めに力を盡くして居つた大將それは皆樣能く御存知の國姓爺、これは平戸の島の鄭大木と云ふ人でございます。鄭大木は純粹の支那人ではない、支那人と日本人と見た方が宜しい。何故なれば、父親の鄭芝龍は、支那人でありますが、海賊を業として居つて、平戸で日本の女を娶つて、鄭大木が生まれましたが、後になつて親は清朝に降參した卑劣漢なるにも拘はらず、息子が明の爲めに忠義を盡くした所を見ますと、父親の血筋を受けて居るよりは母親の血筋を能く繼いで居る人であらうと思はれる。それですから先づ鄭大木は日本七分支那三分位の人と思ふが宜しうございます。親の鄭芝龍は、海賊をしたり、敵の夷人に降參したりしたけれども、鄭大木は明の紹宗から朱成功と云ふ天子に仕へ、親からも清の世祖からも屢〻降參を勸めたけれとも、鄭大木は中々敵などに降りませぬ。それから明の紹宗から朱成功と云ふ姓名を賜はつた。其の朱成功が、臺灣の和蘭人を追ひ出しまして、臺灣に國を建てました。

彼の朱成功の鄭大木は、姓名を朱成功と賜はつたと云ふことは、誰れも御存知であ

海賊が段々減じました。それと同時に文明の方の海防即ち海の防禦も力を用ゐるようになりましたからして、支那の陸に打ち入ることは面倒でありますから、支那海の内の今の臺灣即ち高砂を足溜りに致して、日本人が大分彼處に住居したことがあるのです。彼の島に今の生蕃が移住したのは何年からか知りませぬが、生蕃の住居は歴史以前のことでありますから、臺灣の歴史の始まりは日本の海賊——海賊と云つても野武士——ではありませぬ、海武士とでも云ふべき浪人達が彼處に住んだのが始まりてございます。

其の後になつて、和蘭が支那へやつて來て、彼の澎湖島を占領しましたが、明の大將と掛合の上に澎湖島を追ひ出されたのです。其の時の條件に、臺灣を占領するが、それに對して故障を云ふまいと云ふことを約束して、さうして澎湖島を明に明渡して臺灣に渡つて彼處を占領した。其の頃臺灣と云ふ所は、生蕃ばかり多く住んで居りましたが、中には多少日本人も住んで居り、支那人も少し居りました。和蘭人がそれを占領して、生蕃支那人並びに僅かの日本人を統治して居つた間は、僅か三十年ばかりの間です。さうして居りますと、清朝が北から起こつて、明の國は

ラ〳〵に敗れて仕舞つた。さうして其の明の爲めに力を盡くして居つた大將それは皆樣能く御存知の國姓爺、これは平戸の島の鄭大木と云ふ人でございます。鄭大木は、純粹の支那人ではない、支那人と日本人との間の子でございますが、吾々は日本人と見た方が宜しい。何故なれば、父親の鄭芝龍は、支那人でありますが、海賊を業として居つて、平戸で日本の女を娶つて、鄭大木が生まれましたが後になつて親は清朝に降參した卑劣漢なるにも拘はらず、息子が明の爲めに忠義を盡くした所を見ますと、父親の血筋を受けて居るよりは母親の血筋を能く繼いで居る人であらうと思はれる。それですから先づ鄭大木は日本七分支那三分位の人と思ふが宜しうございます。親の鄭芝龍は、海賊をしたり、敵の夷人に降參したりしたけれども、鄭大木は明の紹宗と云ふ天子に仕へ、親からも清の世祖からも屢〻降參を勸めたけれとも、鄭大木は中々敵などに降りませぬ。それから明の紹宗から、朱成功と云ふ姓名を賜はつた。其の朱成功が、臺灣の和蘭人を追ひ出しまして、臺灣に國を建てました。

彼の朱成功の鄭大木は、姓名を朱成功と賜はつたと云ふことは、誰れも御存知であ

りませうけれども、知つて居りながら朱成功と云はんで鄭成功と云ふ人がございますが、鄭成功と云ふことは分からぬ話であります。もとの苗字は、鄭芝龍の子でございますから、苗字は鄭でありますけれども、其の時の名は森字は大木でありますが、明の天子から姓と名とを頂戴して朱成功になりましたから、其の拜領の名前の成功に拜領以前の姓の鄭を付けて鄭成功と云ふのは、變な云ひ方でございませんか。木下藤吉郎は、後に豊臣秀吉になりましたが、伊勢新九郎は、後に北條早雲になりました。長尾景虎は、後に上杉謙信となりました。それを木下秀吉と云つたらどうです。後の名と前の苗字とをクッ着けて、木下秀吉伊勢早雲、長尾謙信と云ひましたら、そんな云ひ方はないと云ひませうか。もとの姓名で鄭森と云ふか、後の姓名で朱成功と云ふか、何方かでなければいかねゝ。それを何故清國の人は朱成功と云はないで鄭成功と云ふかと云ひますと、清朝では明の天子の紹宗をば天子と見て居りませぬ、唯だ土匪のように取り扱つて、明の殘黨て南方で騒いで居る謀叛人として、敵國の天子とは見做さぬ。其の天子でない人から國姓を賜はつたと云つても、それを認めないから、清朝の歴史には、朱成功と書かないで、鄭成功と書いて

居る。それなら成功も明の天子から賜はつた名だから、用ゐなければ宜さそうなものだが成功は只だの名だから障りはないが、朱は明の天子の姓だから氣に入らぬと見えて、清では此の朱氏の事をいつ迄も鄭氏として、かつ僞鄭或は鄭逆などと書いて居る。支那ならば關羽、岳飛、日本ならば楠公にも比すべき古今無雙の大忠臣を指して、いかに敵なればとて僞鄭だの鄭逆だのと云ふは、實に暴慢だ無禮だ。

國姓爺と云ふのは、明の國姓を賜はつた爺さんと云ふをです。日本でばコクセンヤと云ひますが、本統はコクシンヤと云ふので、和蘭人、葡萄牙人は、コクシンガと訛り、其の名でばかり聞いて居つて、世界に轟いて居る稱號であります。即ち朱姓を賜はつたから國姓爺と云はれて居るのを、鄭成功と云つては國姓爺でなくなります。そこで清朝の人が鄭成功と云ふのは、本無理なので、其の無理なのをウッカリ日本人が何の氣もなく鄭成功と云ふ人があるから、私は聞く度毎に咎めますが、これを朱成功に聞がしたならば、折角國姓を賜はつたのを、舊姓を呼ばれては迷惑だと、御本人は云ふでありませう。

其の平戸の豪傑朱成功が臺灣に攻め入つて和蘭人を追ひ拂うて領しました。其

の時には既に支那人日本人が可なりに住居して居りましたが、此の朱氏に従つて、支那から移つた人達は、何れも清朝の命令に従ふことを欲しないさうして明を回復しようと云ふ志を抱いて居つた人達で皆朱成功に従つて臺灣に移つたのだから明の方の側から見ますと、臺灣に移住した支那人と云ふものは殊勝な忠臣義士と迄はいかずとも、オメ〳〵と滿洲の軍が來たからと云つて直ぐ降參した人に較べては、稍々氣概のあつた人達が臺灣に移つて來て、實に滿洲の夷狄共が北の方からやつて來て、明を打ち滅した時に、何でも清朝に降參すると云ふ以上は、頭の周圍を、グルリと剃つて辮髪にしなければ、大清の順民と認めない、毛を長くし蓬髪しないで居る奴は見付け次第に清朝の兵隊が其首を斬つた。清が明を滅ぼした時に明人を殺したことは、何百万人あることでございますか恐らく成吉思汗が亞細亞を暴らし廻つて殺した頭數よりも、今の清朝が明人を殺した數の方が多い。なぜ多いかと云ひますと、此の支那人と云ふものは、昔から度々革命がありまして、二十何度と云ふもの政府が轉覆して滅びると、次ぎの新らしい朝廷に服するのは當然になつて居りますから、政府が滅

びて新しい朝廷に從ふのは厭に感じませぬが、昔の唐虞三代から續いた國風を易へて、而も良い風なら宜しいが、變な風に剃つて堪まらない。蒙古から天子樣が來ようと何處から來ようと、其の方は餘り苦痛を感じないが、頭を辮髪にせよと云ふ命令には耐へられないから、それに抵抗して殺された數は何百万の數があるか分からぬ。彼の臺灣には生蕃と云ふ夷狄が居つて、時々首狩りと云つて村に出て首取つて往くのはヒドイと云ふが、生蕃よりも滿洲の方がヒドイ。生蕃は首狩りをしても、一度に百と取つて往つたことはない、偶に五ツか十取つて往くと大獵だと云つて喜ぶが、清朝の首狩りと云ふものは、一ツの都會で以て十萬二十萬の首狩りをしたことが何度もあります。敢て新らしく朝廷に服するのが厭だと云ふ大和魂の樣な立派なのではないが、頭の辮髪をするのをどうして免れようと一生懸命に考へたから、朱成功が臺灣に府を建てたら、續々集まつて來た。そこで今の臺灣に人の集まつたのは、さう云ふ譯からであります。

清朝では、臺灣と云ふ所に和蘭が居つても朱成功が居つてもじつとして居るなら

宜いけれども清朝に敵對する奴が巢窟を構へて時々支那の內地を攻擊されては何時迄も見遁すことは出來ぬと云ふので、康熙二十一年に大軍を遣はして到頭擊ち滅ぼした。其の時は朱成功の孫の代で、成功の子は朱經、朱經の子の朱克塽と云ふもので、お祖父さんに似合はぬ馬鹿者でした。敵の大軍がやつて來ました所が、力敵せぬ。敵しなければ戰死なり切腹なりするなら宜しい、日本人の孫ですもの。所が此の孫は意氣地がない奴で、頭を剃りましてさうして俄拵への辮髮を拵へ、付髮などをして長くぶらさげて、おめ〳〵と軍門に降る、其のザマは見られたものでありませぬ。こんな奴に明の國姓を附けて置くのは勿体ない、尤も克塽は降服の時には鄭克塽と名乘つて居ります。主人がこれでありますから、部下の兵は殘らず鐵砲を敵へ渡して、辮髮の俄拵への髦か何か付けて敵の軍門に降つた。折角朱成功に從つて、此の島に移つて、此の島の邊僻なるにも拘はらず、頭を辮髮にしないで生活して居るのが嬉しいと思つて隨從した家來共も、又其の前明の時代から居る臺灣の漢人の子孫でも、何れも辮髮に爲つてしまつた。それだから臺灣の人民は折角彼處に移住した目的を失つて仕舞つた譯です。

清朝では臺灣を征伐しましたのは、唯だ明の殘黨なる朱氏を滅ぼすのが目的で、臺灣の土地は素より支那の領地であります、置くと敵の巢窟だから打ち捨て置けぬと云ふので打ち滅ぼして後は人を無くして仕舞はうと思つて、臺灣の漢人を支那の內地に連れて往つて臺灣を空ツポにしようと思つた。彼の熱苦しい所を支配して開かうと云ふをは少しも考の中になかつたが、其の征伐の大將は施琅と云ふ人で、其の人が建白をして「臺灣はそんなに捨てた所でない、中々善い所であるから、臺灣を空ツポにすると云ふそんなことを云はんで、臺灣に郡縣を置いて、地方官を派出させて治めれば、中々海外の藩屏となる良い土地であると云ふことを建白して、それが採用されて、先づ彼處で臺灣府を置くことになつた。其臺灣府を置いても、まだ清朝では彼處を開かうと云ふ考はない、何の爲めに臺灣府を置いたかと云へば、臺灣人を殘らず內地に連れて往くことは出來ないから、又それを打ち捨て置くと海賊の巢窟になる恐れがあるから、地方官を派出して海賊にならないように唯だ取締りをすると云ふ目的で臺灣府を置いた。所が、政府は別に開拓に力を用ゐなければ、土地は良い所であ

故、其の中漢人が段々福建邊りから移つて往くものですから益々殖えて往く。さうすると、面白いぢやありませんか、支那政府の考は、さう臺灣に人が殖えて往くと、海賊の根據地が益々勢が宜くなつて、後には始末にいかなくなるから、移住を禁じようと云ふ。移住を禁じようと云つても、そんなをは迚も出來るものでない、港が澤山あるから、福建、廣東の海岸から支那の「ジャンク」で往きますから、何處へでも上陸は出來る。移住を禁じようと云つても出來やしませぬが、支那の役人は分からぬ御役人樣だから、妙案を考へ出して、男だけは宜い、女の移住はいかぬ、男が移住しても男ばかりで女が往かなければ、後にはいづれ歸つて來るからと云ふので、女の移住を禁じたが、支那のことだから、そんな禁令を出しても行はれぬ。行はれぬでも、何時迄もそんな禁令が慶されずに居る。さうして段々移住民が殖えて往つて益々取締がむづかしくなつて、始終臺灣を荷厄介にして居た。それは盜賊の取締ばかりてなく、漢人と生番との喧嘩が始終絶えぬのである。其の頃漢人は西の海岸にばかり住んで臺灣の十分の八九は生番地ですから、その生番地には漢人が開墾して進んで往くと喧嘩が起こるから、漢人が東の方へ開拓せぬように万里の長

城の樣に土手を築いて生蕃地に進まれぬようにした。何方かと云へば手傳をして生蕃を追ひ拂つて開いたら宜からうが、それがすかから、支那政府では、臺灣の方に移つて居る人民が油斷をすれば海賊になる、成るべく弱めて置けば大したことはなからうと思つて、苦しめることにばかり力を盡くして居つたものです。

さうして居つた所が、彼の道光年中、日本の天保の末ですが、英吉利と阿片戰爭の亂が起こつた。それからどてもおゝ云ふ風に歐羅巴から軍艦でやつて來るようになると臺灣邊りを根據として何かやられては大變だと云ふ考が起こつた。そこで臺灣の今迄の方針を變へて、開かうかと云ふ考が起こつた。さう云ふ考が起こりましても、丁度德川の末に蝦夷地を開墾するような譯で、矢張捗々しく出來ないで、餘り能く開けなかつたのであります。其の後に明治七年日本政府で臺灣の牡丹社征伐と云ふ事が始まつた。支那の政府に掛け合つたら牡丹社と云ふ生蕃は吾々の云ふことは聞かないから仕方がない、「仕方がなければ私の方でやるから」と云ふので、臺灣征伐と出掛けて牡丹社を平らげた。其の後も支那政府で手が屆

がぬと外國からやつて來る、外國がやつて來て占領しても何共言分がないとなると、これは大變だと云ふことになつて、それから急に臺灣全部を開拓しようと云ふので、名高い劉銘傳がやつて來て、到頭臺灣を一ッの省に立てゝ、其の開墾に力を盡くしたのであります。だから清朝で本統に臺灣を開かうと云ふ目的で臺灣を支配したのは、劉銘傳以來のことです。彼の臺灣は殆んど二百年支那の領地になつたなどと云ひますけれども、支那政府が臺灣を開かうと思つて力を盡くしたのは光緒三年からであります。光緒三年と云ふと、日本で云へば明治十年其の以後臺灣に力を盡くしたのであります。其の前と云ふものは、支那の政府では、臺灣と云ふ所は唯だ邪魔物で、何か虎でも飼つて置くようにも考へて居つた。殺しては惜しいけれども、此奴を離してはいかぬから、食物でも少しづゝ食はして強くならぬように飼つて置かうと云ふ位の考であつた。全体清朝人は、福建其の他の廣東廣西と云ふ所の人民は猥褻にして制し難しと云ふことを清朝の書物に書いてあります。猥悍とは暴つぽい事で夷狄などに附ける形容詞であります。これはどう云ふ譯かと云ふと、福建廣東廣西は明の末迄暴れ廻つて、明の滅びる時に忠臣義士が

あの邊で兵を擧げて、清朝に長らく抵抗して居つた。だから明がすつかり滅びて仕舞つても、彼の邊には明を慕うて居る人民が多い。それだから滿洲のチャン〳〵の政府には、不滿足を唱へるのは、支那十八省の中福建廣東廣西が一番多い。其の中の最も政府が氣に入らぬ、滿洲の夷人に從ひたくないと云ふ奴は、自暴を起こして、こんな所に居るよりは、島でも宜いから臺灣に往かうと云ふので、臺灣に移つたものが、清朝から云へば最も暴つぽい制し難い人民でありますけれども、明の方から考へると、氣概ある人民なんです。臺灣に漢人が始めて移つた時はさう云ふわけなんです。其の後移つて來るのでも、さう政府に不平なような人民が多く臺灣に移つて住んだが、近頃になつて劉銘傳其の次ぎに邵友濂其の次ぎに唐景崧などと云ふ奴が、臺灣の巡撫になつて、明治十年以來日清戰爭前迄、臺灣を治めて清朝の難有さを振れ散らして、人民を騙して居つたのですが、臺灣の人民は忘れ易い奴で百年以來苦しめられて居りながら、劉銘傳等に騙されて、滿洲人と云ふ者は首狩りする野蠻であつたことを忘れて仕舞つて、難有いと騙されたものもあつたようで、すがそれは僅か十何年の間ですが本統の清朝の難有さなどは臺灣の人民に染み

込んで居ちぬ。

それだから日本の領地になつても、臺灣を支配することは容易い。最も始め臺灣を占領した時は巡撫をして居つた唐景崧と臺灣防務の頭であつた、劉永福と云ふものが、蟷螂の臂のようなものを振るつて我が王師に一寸抵抗などしましたけれども、手應へもなく敗北して逃げて往つて仕舞つた。それから後土匪と云ふのが一寸起こつたけれども、直ぐに平いで仕舞つた。これも一寸唐景崧等が煽動して戰爭を起こさした位だから、其の後土匪位起こるのは仕方がない。それから後臺灣の人民は誠に温順なものです。今守備兵も臺灣の人民が謀叛する爲めに置くのではつても居らなくても宜しい。守備兵は往つて居りますが、實は守備兵は居ない、此の邊の佐倉や高崎に兵營を置くと同じことで、いつ外國から無法にやつて來る人がないとも云へませぬから、國防の爲めに置いて居るのです。臺灣の人民と云ふものは極温順なものです。賞めれば温順ですが、惡く云ふと意氣地がないものです。僕等が自轉車で通りますと、此方で云へば、多町の市場とか駒込のヤッチャバとか云ふような人のゴタ〳〵集まつて居る所が、自轉車では迚も歩けませ

ぬわんな所に這入り込むと若い衆に打擲される。所が臺灣に往つたら威張つたものです。後から鈴を鳴らして大きな聲で呶鳴ると、和人と見たら、市場でも何でも皆人民が除けて通します。それから僕は自轉車で往つて大きな河がある。臺灣には橋がない。それを靴でも脱いで徒歩渡りしなければならぬ。靴下を脱いだりヅボンを捲り上げるのは面倒ですから、誰れか居ないか知らんと思つて後ろなど見ると、チャン〳〵坊主が向かうに往く。オイ〳〵と大きな聲で呼びますと振り向いて見る。言葉が分からぬから手招きをすると、どんな遠くへ往つた奴でもやつて來ます。和人が手招きをしたのを逃げでもすると、追掛けられると思ふかおとなしくやつて來る。やつて來ますと、自轉車を擔いで見せて河向かうに指してやると擔いて往つて呉れる。又車を置いて歸つて來た時、斯うやると負つて渡る狀を示さる負うて渡して呉れる。そして五錢銀貨でもやると、トウシャ〳〵（多謝々々と御辭義をして往く。トウシャと云ふのは難有いと云ふをです。誠に氣の毒で、迚もこんなことでは、生命を捨てゝも家を捨てゝも善いが、國を取られては堪らぬと思ひます。日本人などにはあんな事は出來ますまいが、負けた國の

人民と云ふ者は勝つた國の人民に向かつて實に猛の毒なものであります。さう云ふ風に柔順な民でありまして清朝の歴史に福建廣東の人は獷悍にして制し難しとか臺灣は盗賊の巢窟のような所で當たり前の政治が出來ぬと云つて居るのは嘘です。これは滿洲人から見て、明の遺民に對する惡感情でありまして、日本人が支配する時には温順な人民です。

それに就いて今一言愚見を申したいことがあるのです。此の通り温順な人民ですから、あれを支配するには敢意を抱いて臺灣人に向かふ必要がない。何だか日本で臺灣に往つて居る人達が、私の今申したと少しまだ違つて居るようです。どう云ふことかと云ふとあゝして御辭義をして、居るけれども、何しろ支那人だから今は馭つて居ても底意はあれで中々油斷がならぬ」と云ふ人がありますし、總べて和人の漢人に對する擧動を見ますと、何でも抑へ付けて、打つたり、蹴たりして居る。打つと云ふのは形容ぢやない本統に打つて居ります。これは中々六ケ敷い問題ですけれども、一言に云ひますと、和人の考では、言語宗教風俗の違つた人民と云ふものは、所詮穩に支配することは出來ないものだと思つて居るようです。自分の

身から考へるとそれも無理の無い事で、吾々日本人は言語宗教風俗の違つた人の支配を受けては生きて居りませぬから、それから考へて、迚も違つた國民と云ふものは支配出來ないものだと思つて居る。併し支配が出來ないとして見ると之れを支配するには悉く言語宗教風俗を日本化しなければ整理することが出來ぬと思つて居る。先づ總督府の御政治でも、彼處に移住して居る和人の感情でも、皆さう云ふ風であります。それだから學校のことを云ひますと、臺灣の學校では、皆日本語ばかり教へる。子供を集めて、日本語を饒舌らして、日本文の「奉存候」などを教へるのです。通譯とか書記とか巡査補などを養成する爲めに日本語を教ふるのは善からうが、普通教育を施す公學校が皆それだから驚きます。日本文と云ふ者は中々六かしいもので、同じ文字でも立食と立食と意味が少し違ひ、立坊と立坊とは大違ひ、坂の下と板下とは下の意味が違ひ、又場合に依ては下を下とも讀み、又音讀して陛下の時は「カ」で天下の時は「ガ」で下馬の時は「ゲ」と讀む。そんな區別は、中々臺灣の子供には覺えきれない。學校では折角和語和文を教へても、内へ歸れば皆方言ばかり用ゐて居るのです。そんなことをやつてどうする積りだと聞いて

見たら臺灣人に皆日本語を饒舌らせるようにすると云ふ夢見たような話です。中々教育の力などで國語を變ずると云ふことは出來よう筈の無いものです。諸君が外國語を研究なさるでありませうが、日本語を忘れて外國語ばかり饒舌る人は一人もありますまい。學校でもさう云う風でありますし、其の外宗教風俗皆日本化させると云ふ積もりの樣です。出來ることなら宜しうございますが、さう云ふことは古今の歷史に照らしても決して出來ないので、出來なければどうするかと云ふと、違つた人種は違つた人種として治めるでなければならぬ。そこは流石英吉利は大國でありますから印度帝國を支配して居つて、印度の人民の教育でも印度語を以て教へますし、風俗の極酷い倫理に違ふことは禁じも致しますけれども倫理に逆らふと云ふ程でないものは、風俗も宗教も其のまゝで、さうして普通の刑法は一樣に行はれますけれども、細かいことは迄印度人を無理に英吉利風に化せしめようとは務めない。然るを日本人はさう云ふ風に狹い考で、是非日本化しなければならぬと云ふように考へるのは、どう云ふ譯かと云ふと、矢張小さな島國に育つて大八島に大和人種ばかり固まつて居て、他の人種を支配した事が無いからでせう。善く云ふ事ですが「日本人民は一人種から成り立つて居るから強いが、露西亞などは國が廣いと云つても、あの中に數多の人種があつて、言語宗教が數十に分かれて居るから擧國一致ずることは出來ない」と云ひます。成程露西亞の擧國一致しないのも事實であり又我が大八島即ち五畿八道の中は一人種で固まるが宜しいが、屬國の人民を大和人種にすることが出來るものでない。和人の外は支配する事が出來なければ屬國を持たぬが宜いと云ふことになりますから、屬國を持てば屬國なり人種は只だ一種だと云つて、實は餘り誇るに足らない。已に八道の中にも大和人種の外にアイヌ人種、沖繩人種が少人數ながらも加はつて居つたが、臺灣を領してから、漢人種マレー人種の二種が殖えて、今では　天皇陛下の赤子とも云ふべき帝國の臣民は、和人漢人沖繩人アイヌ人マレー人の五人種となり、大八島も今では沖繩島、北海島、臺灣、澎湖が加はつて十餘島となつたから、眞に帝國らしくなつたと思はれる。是れから半年も經ちますと、御領分中にスラヴ人種、韓人種、滿洲人種などと云ふものが出來るかも知れぬ。（拍手大喝采）その時には　天皇陛下が其等に向かつて

つて一視同仁の政治を布かせられて、そしてスラヴ人には露西亞語を話して、希臘教を一生懸命に拜むのを妨げもせず、希臘教會でもモハメット教會でも何でも一樣に保護しておやりなさるでせう。勿論帝國憲法には皆從はしむるのは無論のことでありますけれども、御領分中にスラヴ人を支配することは出來ぬ、日本語を話させて、日本服を着せて御茶漬で飯を食はす、さう云ふ風になつて呉れなければ御領分の外に出て貰はにやならぬ、日本語で日本食をしないと云ふものは支配するに面倒だと云ふことでは、屬國は迚も持てませぬ。僕の考では臺灣の例から推して見ますと、國は大八島に限る、人は天孫人種に限ると云ふような昔の和學者風の狹い量見は止めて仕舞つて、英吉利のように許多の人種を支配して居つて、それぞれの風俗言語其のまゝにして、さうして大體を上から統べて居ると云ふ度量がなくては此の島嶼帝國が更に大陸迄統治するとう云ふような時になつて六ケ敷からうと思ひます。何でも戰爭は勝つに相違ありませぬから、御領地でも殖えた時には今迄の樣に屬國を本國の風俗に殘らず化せられなければ支配することが出來ぬと云ふ考だけは止めて、何人種が住んで居ても、其の言語宗教風俗が我が憲法

に背かざる範圍內に於いて自由にしてやるが善い。江海の如き度量を以て大國を統治したいものだ。全體國民が一人種から成り立つて居るよりは、色々の人種の色々の風俗宗教のあるものが、並び立つて居る方が、互に切磋琢磨する効能がある ものです。「他山の石は以て玉を攻むべし」と云ふ譬のある如く、餘り同じ人種ばかりよりは、異つた人種の帝國の中に在る方が互に利益を交換することが出來るのです。チャン〳〵見たような汚い奴は、餘り風俗の善い事も無く、御手本にもなりませぬけれども、勤儉にして貯蓄に巧みなる所などは、彼等の特色で、他國の商賈敵としては嫌らしき奴だけれども、帝國の臣民としては、富國の助けを爲すべき頼もしき良民であります。だから矢張漢人は漢人として治めて往くと云ふ方針を取り普通敎育を施すなら、英人の印度に於けるが如く、其の方言に依つて文明の事物を敎ふるが宜しい。かくの如き方針を以て屬國を治むることは大國を統御する上に必要なことと思ひますが、どうでせうか。（拍手大喝采）

雜録

露西亞の一面

露西亞の大學

I. F. 生

▲X將軍

『來る十一月十五日よりO大學は、X將軍によりて管理せらるべし。』

こは露國『官報』中に出でたる雜報文の一節なるが、これを讀みて、予は一大驚愕を催ふして、友人なる露人に下の如く問へり。

「X將軍は學者かね」

「將軍か、將軍は全く蠻勇のモデルよ」

「デモ僕は將軍が、O大學の校長に任ぜられたと新聞で見たよ」

「デハ君は、露國の二三の大學は、將軍が校長になつて居ることを知らんのぢやな」

「大變なわけだ、それでは全く希臘の先生だな」

「ソンなものだ、が、似て非なるところがあるよ露西亞では劇場でも、博物館でも、それから學校までが、みんな將軍が管理して居るよ、

軍隊は勿論のことさ」

この物語を耳にせる予は思ひぬ。さりとては將軍の權力萬能なることよ。劇場も、博物館も、學校も等しく之れ將軍の管理の下に屬すとは、不思議なる此の將軍の勢力かな。

此の將軍の權力萬能のことに就き、思ひ出たせる一條の物語こそあれ。こは予が嘗てチヴァ河の近傍を旅行せる當時のことなりし……。

露國に於ては、將軍は軍事の教練によりて、甚だ奇怪なる官吏に任ぜらるゝことあり。されば之に關する奇怪の譬言ありて、「幸福なるは將軍」、又は「將軍たることは幸福」なりとようように、露國の人民は己れが壓制を蒙むる權力をば、格言中に愚弄することを好み、以上の如き譬言を語りて愚弄するを樂みとなすなり。たとへ將軍が技術教育に、從事すると、特別に是等の勢力を有するものと考察すべきにあらず。少年時代に於ける士官等の學問は、他國のものよりも文學的に教育せられつゝあるとも、彼等の專務なる軍事に從事しつゝある間に、最初の學問は忘却し去り、末路に及んで學校長若くは博物館長に任ぜらるゝを常とす。されば是等の將軍が、大學長に任ぜられたればとて將た何をか爲し得ん。彼等が其位置にあるは、只だ習慣の爲めにして、自由に傾き易き少年時代に對し、傳來の精神を吹込まんが爲のみ。云々。と然れども此の如き目的は、將軍等によりて果して達せらるゝを得べきか。これを確かめんが爲めに、予は露國大學の現況を究め、學生の狀態を見んとす。

露國の巡査

▲大學生の狀態

露國大學生の狀態如何と問ふものあらば、予は答へんとす、彼等は實に外國中學生の一種にして其の講筵に入るや出るや、規則立ちて往來し、特別の寄宿舍に住し恰かも中學生徒の如くに、規則正しき制服を着せり。元來露國學生は、卒業後に及んで行政官吏となる義務あるが故に、其の未來奉職すべき官廳の色章を制服に附着せり。例を以て之れを示さんに、工務省に屬する技師の生徒の如きは、黑色天鵞絨の長衣を着、其の襟に斧と鶴嘴とを交叉せる徽章を着け、法學生は司法大臣の色章なる綠色を附着し吾が大學の帽と同等なる帽子を戴けり。

露國のカウカサス人種

▲大學生の特色

諸子は露國大學生の團結に就て聞けるところあるべし。予はこゝに此の大學生が異なる團結を形成する有樣を語るべし。

或る村落に一事件起りて、未だ總ての人これを知

らざるに、英文の手紙によりて注意深く傳達せられ、散布せられて事の外國に知れ渡るものは、即ち學生の團結あるが故なり。されば將軍を以て管理せらるゝ露國大學は、其外形に於て總て軍隊命令的なるに拘はらず、獨り學生に對しては、慈惠ありて殊に嚴格を極む。而して何れの國に於ても露國の如く給費生の多數なる處は、全然なきのみならず、尚將來益々增加するの傾向あり。

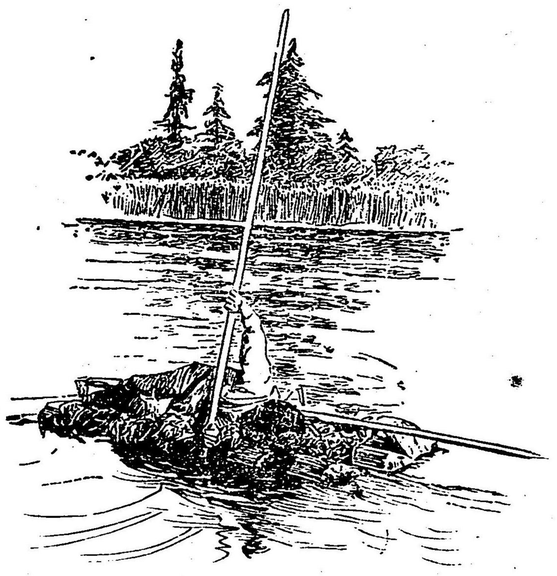
四十年以前には給費生の數實に僅少にして、其學生たるものは、僅少なる家族の子孫なりしも、其後皇帝の慈惠により、皇室奬學給費金、一般給費金、町村給費金、等のことを設けられぬ。此の三名稱は今尚は存すれども、其の實は全く相全じきものなり。其の他私人によりて、慈善寄附金なる名目の下に、貧少年のためにとて給與金を設けらる。而して是等の給與金を受くるものは主に僧侶の子弟と商人の子弟とにして、その給費生は、また多く地方の市街より遠隔せる村落に於て、從來生活の何たるを知らず、貧しく簡單に養育せられ、茲に最初の敎師と袖を分ち、始めて光明ある錯雜せる文明の中心なる大都會に來れるものなり。彼等は一般に喧噪なる、機智ある生活中に入りて、歡喜の中に熱中し攪亂せられて、次第に大野心を養生す、彼等が見んと欲する書籍は山の如く、圖書館に堆積し彼等が受けんと欲する學課は、恰も宮殿の如き家屋中に授けられ、彼等に華麗と偉大とを感ぜしむ。彼等が完全なる敎育を受けて、家庭の傳說を忘却し、其の平衡を失ひたるは、恰も足を失して倒れたるに似たり。此の如くして天然の橋梁を超へ、將た新事物の突擊を蒙りたる。是等商人の子弟は、化せられて無神論者ともなり、或は終に革命者ともなるなり。而して露國に於て革命の酵素を播種するものは、實に此等の學生中にあるなり。

▲革命の分子

革命分子の、露國大學內に存在することは疑ひも無き事實なりとす。露國の總ての探偵は大學校內にありて、少年氣鋭の力に對し暗鬪しつゝあり。

是等探偵の種類を分類すれば、第一、外國探偵、第二、ペテルスブルグ知事より送られたる探偵、第三、一般保安の探偵、第四、大臣等より出せる秘密の煽動者等是なり。

若し露國の人民中、如何なる爭亂にても起し得るものは、誰なりやと問はゞ、唯此學生のみなりとす。一方よりこれを云へば、學生は爭亂の發動者なれども又之れを他方より云へば一の鎭定者なり。



露國の眞珠取り

▲暴動の實話

これを一千九百〇一年二月『每日新聞』、『繪入新聞』等が詳說したる、ペテルスブルグの有名なる暴動記事に見よ。英獨の新聞紙が附會せる戲文よりも深く捏造することは不可能ならずや。そのトランスバールの報告の如き、英國は誠意を以て之れをなせるなり。されば英國風を呼吸せる新聞紙を見れば、サンペテルブルグは、皆是れ火と血とに滿されたるが如く、露

國の暴動、露國の革命なる文字は、到る處に連記せられ、『繪入新聞』は種々の事件を誇張し、火中の市街を表せる畫の如き、數多の軍隊によりて、凡ての人民が蹂躙せらるゝ圖を示しにき。然れども其の實は、歐洲に於て傳說せられたるが如き、重大なる者に非ずして、其の要領を一括すれば、第一日目に不意の所より騷亂生じ來れりしが、そは學生等が群をなして市中を彷徨し、警官の命令を奉せざりしこと是なり。警察官等が衝突せざりしならば、一小事にして止みしならんも、一般保安の警察官が、此の暴動の首唱者中に外國の間諜と、大臣中最も勢力ある大臣の探偵と、混じ居るを見て其の爲すべき處を知らず、爲に之が干渉も加へざりしなりき。

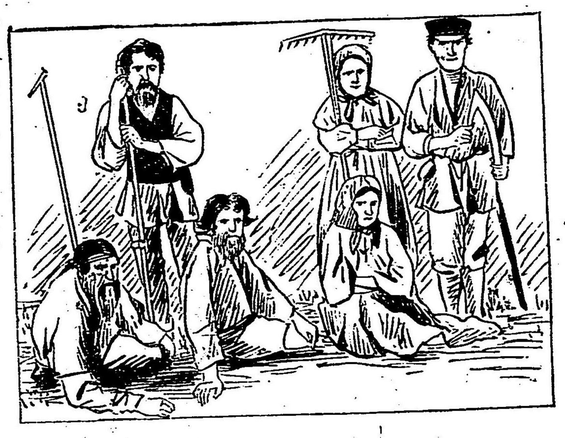
斯く入込める種々の事情により、或は其の主領等によりて、率ゐられたる學生等は、密集して騷亂し絶叫し、亂唱しけるものから、全國人民擧つて之を脅喝せりとて直に倫敦に打電し、第二日目には、其の混雜、前日と毫も變はる所なく、學生等は益々之れに反抗し、粗暴にも解散を拒絶したるのみ。

(其一)

第三日目には三警察の首領等が、力を合せて此事に盡力したりしが、恰も暴動に關係せる大臣の秘密委員等が幻術の如くに突然其の群中より消去せたるが爲めに、總てのものは皆悉く拘引せられ、五十の青コザックと、五十の赤コザックとは忽ちに繰出され

學生と衝突を避くるを口實とし、武器を脱して只だ鞭のみを携えたり。かくて無邪氣なる善良なる朴訥なる學生の群集は煽動者によりて、出口なきカザンの廣場に導かれぬ。然るに此所に學生の三百を留めて、餘は盡く之を調馬場の内に閉込め、只だ僅かに茶とパンと菓子を與ふるのみなりき。此の囚徒中には、一年志願兵に出でざるべからざる少年許多ありければ、其の正に入るべき軍隊に指して、彼等を入らしめぬ。

然るにモスコーに於ける騷亂は、實に此所よりも激烈なりしかば、其の鎭定の爲めには、彼のコザック騎兵までも加はりたる程なりき。



露國の農夫

(其二)

▲勞働者と女學生

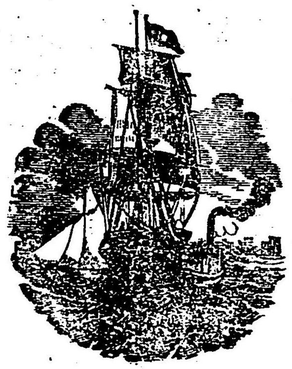
かくて勞働者は暴動の學生等と結合せり。然れども最も恐るべきは女學生にして、彼等は種々の人々を煽動し、或はこれ等と共に絶叫紛議して、大に其凡てを破壞せんとせり。されば女學生は意味ある身振を以て軍人を引付け、之を感動せしめて只管其の職務を忘れめしんと試みたるもの實に許多なりしも、木石に似たる露國の軍人は、毫も之に應ずるものなかりき。

又た一方に於ける女學生の暴動は、實に奇怪なるものにして、彼等が帽子の留針を騎兵の馬腹に打込みたるが爲めに馬の其の場

に斃るゝあり、或は二三日を經て、腹膜炎の爲めに厩の中に斃るゝなど、露國の女學生は斯くの如き、奇怪の働きを爲すものなり。

* * * * * * * * * * *

以上は露國大學の裏面を佛人の寫せるもの、以て其の一般を推すに足らんか。



露西亞の二大名物

素葬生

何をか露西亞の二大名物と云ふ？莫斯科府のクレムリン宮か。然り、金塔林立、結構壯麗、克く露西亞六百有餘年の史蹟を藏する一大名宮、以て彼が世界に誇るべきに堪へたり。曾つて千八百十二年、怪將ナポレオンの斯府に入らんとするや、馬を郊外の一丘に立て、羨望嘆して曰く、此地を露人の手に委ね措く、惜むべき也と。知るべし、巴里の贅澤兒をして、遂に此言をなさしむるの所を。而も余が今爰に算へんとする名物の一にはあらざるなり。

ニコラス朝の暴政か。然り民を見ること土芥の如く、常に過當の稅を賦課して毫も怪まず、農人の若し怠るものあれば、馬上監視の酷吏、絕へず鐵鞭を振つて彼が頸に加へ、宛然千年前の羅馬史を繙くに似たる彼が行政方針、以て二十四世紀の

今日に恥ぢざる天下の珍となすべき也。而も今余が爰に算へんとする名物の一にはあらざる也。

虛無黨の出沒か。然り猛烈敢爲、常に露帝の身邊を窺ひ、或は匕首を抱きて路傍に是を刺さんとし、又は彈丸を投じて宮中に是を覆さんとし、露西亞全國をあげて氣脈を通ずるの彼等、以て世の奇觀となすべき也。特に上下和衷、克く親子の歷史を持續し、克く共同の實をなす吾人の眼に映じて、更に疑惑の大なるものあるを覺えずんばあらず。而も今余が茲に算へんとする名物の一にはあらざる也。

彼の虐殺政略か。然りキシネーフの猶太人虐殺ブラゴエチエンスクの支那人虐殺、以て苟も文明の餘澤を謳はんとするものをして、慄然耳を蓋はしむるものある也。聞く北米の蠻人は、常に其敵者を制するに、慘虐なる手段を以てすと。聞く臺灣の生蕃は、常に其敵者を仆すに、殘忍なる鈍刀を以てすと。然るに今彼の如き文明を稱するの國民の政略として是を見る。優に世界の名物として認むべき也。而も今余が爰に算へんとする名物の一にはあらざる也。

然らば彼の侵略主義か。然り一寸の餘地だにあらば、其義と不義とは問ふ處にあらず、たゞ貪婪飽くを知らざる彼の侵略主義、以て不義擾亂を惡む吾人の前には、實に不可思議の一名物たるや勿論なり。而も今余が茲に算へんとする一名物にはあらざる也。

以上吾人が算へ來たる所一つとして、其珍たるを徵さゞるはなし。而も吾人敢て是を述べず、別に其二大名物なるもの〳〵存するを求めんとす。何ぞや。蓋し露西亞の建國は、元と壓制を以て創めたる擾亂を以て來れるもの、既往百年の歷史は、其內外を問はず、一字一句皆な半面幾多の怨恨を藏して飾れる文字、彼の虛無黨や、彼の侵略や、彼の虐殺や、擧げ來れば這個に類する事項は、纍々として其半面に橫はるに於て、少くとも彼にとつて

は平常の茶飯、寧ろ有り得べくして敢て珍奇のものならざるべければ也。

由來露西亞の國是は、專制壓抑を以てなるもの官人は其權威を弄して敢て憚らず、貴族は其世襲權を擅にして敢て下らず、歐洲國多しと雖も、其政治に於て、其宗教に於て、其社會に於て、非文明なる行跡の多き、恐らく比倫なき所、人類の平和に反き、文明の進路を阻み、社會の福祉を認めず、斬殺是事とし、欺騙是得とし、强奪是利とするは、蓋し其長とする所か。さもあれ、彼が從來の貴族氣質を受けしむれば、當然其名門を誇負して政府萬能世義を唱へ、壓制政治を喜び、迷信と敗德とを以て其平日の行狀となすも、敢て怪しむに足らざるの血統を享けたるなり。然るを何ぞや。彼が唱ふる處は、曰く非政府、曰く共產主義曰く戰爭憎惡論、曰く菜食主義、曰く勞働神聖說曰く舊教排斥論、一として是を露西亞の貴族に聞くを得ざるの事。彼が行ふ所のものは、曰く耕作

常に思ふ。猶は未だ良心の光明を失はざる露人は一方其國家の暗昧暴政なるを恥ぢ、同胞國人の痴愚頑迷なるを恥づへしと雖も、他方此一大偉人を有し、此一眞宗教の有るを以て、聊か世に誇るべしとなすを。とにかく吾人は這般の國是に這般のものを見る。其對照の妙を覺えずんばあらざる也否な此後者を有する彼等を羨まずんばあらざる也

一大偉人とは誰ぞ。曰くレオトルストイ伯（Leo Tolstoy）是なり。彼は露西亞の貴族、而も名門の間に生まれ、若し彼をして一般普通、露西亞特有の貴族氣質を受けしむれば、當然其名門を誇負して政府萬能世義を唱へ、壓制政治を喜び、迷信と敗德とを以て其平日の行狀となすも、敢て怪しむに足らざるの血統を享けたるなり。然るを何ぞや。彼が唱ふる處は、曰く非政府、曰く共產主義曰く戰爭憎惡論、曰く菜食主義、曰く勞働神聖說曰く舊教排斥論、一として是を露西亞の貴族に聞くを得ざるの事。彼が行ふ所のものは、曰く耕作

曰く平民生活、曰く文學事業、曰く眞理の傳道、一として是を露西亞の貴族に見るを得ざるものならざるはなし。茲に露西亞の貴族に求めて得ざるものゝみかは、世界の有位有爵中にも亦求めて得ざるところ、マッシュウ、アーノルドは彼を評して露西亞の光榮たらしむるに餘りある者と呼べりしが、余は世界の光榮たるに餘りあらしむる者たるを以て目せんとす。否乎。猶は彼に就ては云ふべきもの多し。而も世間既に冊子に雜誌に傳へらるゝもの多く、讀者の之を知るもの亦多きを思ふ。故に余は特に此哲人を傳するを止め、移つて彼と共に、少くとも露西亞の二大名物として、其光榮たらしむるに餘ある者の一、『ヅッホーバー』を紹介すべし。

『ヅッホーバー』（Dowk hobar）は、頑迷なる露西亞の國敎たる希臘舊敎（正敎とも云ふ）に慊らざる一部の露人によりて創められし、新基督敎の名稱なり。（因に云ふ、ヅッホーバーを義譯すれば、英語の所謂 spirit-wrestler の意にして精神角鬪者の義なり。其創立の年月詳ならずと雖も、曾つて露西亞政府の官人、徵兵募集の事を以てコーカサス地方に行き、會々コーカサス山中に一部落あるを聞き、攀嶽苦心以て搜索し出したる者實に此一宗派なりと云ふ。彼等夙に國敎正敎派の形式になづみて、基督敎の神髓を失するもの多きを憤り、黨をなして、斯派を造り、頑迷なる世塵を脫して這個人蹤を絕せる山顚に移り、爰に共產、勞働、平和を主義とし、一に神に接して精神的の修養を致すべく、別乾坤の生活を營み居りしなり。かくして彼は基督が敎へし「古の人に告げて殺すこと勿れ殺す者は審判に干らんと言へることあるは、爾曹が聞きし所なり。然れども我爾曹に告げん、凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん。又其兄弟を愚者よと云ふ者は、集議に干らん」と云ふ敎訓、又は「惡に敵すること勿れ、人爾曹の右の頰を批ば、亦はかの頰をも轉して之を向けよ、爾曹

を訟へて裏衣を取らんとする者には、外服をも亦とらせよ」云々と云ふ教訓、其他彼がなせる有名なる山上の垂訓を固守し、戰爭騒鬪を以て神に背むく最大なる凶事となし、殆んど前記トルストイが奉ずる信仰と、同じ見地に居り、現にコーカサス山中に籠居せんとせる當初、此山中頗る猛獸毒蛇の幽棲するを恐れ、各自是等動物に對する危險を避くるが爲め、皆な小銃乃至劍槍の用意をなせしも、後動物に對してさへ抵抗角逐するは、同じく神の心意に背くものなるを憫り、若し不幸彼等の爪牙にかゝるものは、運命の然らしむる所、神に附與せられし當然の事たりと云ふの故を以て、悉く是を棄て爾來たゞ一に勞働稼穡、共産平和を事とせしなり。

されば露西亞の官人、行いて彼等に說くに兵役の義務を以てすれど、元より戰爭を以て最大なる凶事と信ぜる彼は、いかで是を諾すべきぞ。彼等は衆口皆な辭して曰く、余等は神に奉ずるの義務を知れど、兵役に出でゝ敵者を屠るの義務あるを知らず、請ふ是を恕せと。然れども國法の命ずる所、而も壓制なる露西亞政府の命令のいかで纏さるべき。加ふるに露西亞官人の特有性たる其殘忍の性は、未だ是を諭戒するに至らず、忽ち彼等を拉して是を搏ち、是を蹴り、遂に鮮血淋漓たるに至らしめき。されど一度信じては再び疑はざる彼等の信念は、此苛虐の所業を蒙るも敢て意とせず斷乎として當初の意見を貫けり。於此乎寧ろ官命を奉ぜんより、私慾を逞ふする彼等官人は、『ヅッホーバー』等が口に抵抗するも、腕力に抵抗せざるを利とし、彼等を鞭打し、負傷せしむるの外、或は其家内に入りて家財を强奪し、其婦女を辱しめ、迫害至らざるなきを加へぬ。されど信仰篤き彼等は一人として是に抗する者なく、而も其身邊にはとばしる流血を抑へ、其叫喚をなす妻子の聲を聞き、猶は是等暴政者の爲に其罪を償ふべく、神に祈れり。讀者試に思へ、若し吾人をして斯教の信

徒たらしむるとするも、事實此の如きの迫害を蒙る事ありとせば、吾人は猶は是に屈從して、而も其迫害者の爲に祈るべきや。否や。『ヅッホーバー』の如きは、實に基督が敎へし「爾曹の敵を愛み、爾曹を詛ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇迫害するもの丶爲に祈禱せよ」との敎訓に照して、眞の求道者と謂ふべき哉。世間基督敎徒を以て任ずる者多し。而も多くは是れ都合よき時の信者、這般の事件に遭遇せんか、忽ちにして改宗するを恥ぢざる底の僞善者、『ヅッホーバー』が我等のみ基督の光榮を知る者なりと自負するも、蓋し理由なきに非ざるべし。

如上虐遇迫害するも、猶は頑として動かざる彼等は、是を如何ともなし難く、露西亞政府は之を虚無黨と同一視し、西比利亞送致の囚徒として道に最も無慈悲なる監守兵を附けたり。然るに旅行の途次、熱心なる彼等の傳道は、遂に鬼にも勝さる監守兵をして、「小官は所詮此罪人を監守し得

す。小官亦『ヅッホーバー』の一人となれり。若し之を以て罪せば、彼等と共に囚徒とせよ」と云はしむるに至りぬ。於此乎政府大に驚き、蒼皇他の者を派して更に之を送らんとせり。而も如何なる看守も、皆な彼等の德に伏して傳道に化され『ヅッホーバー』の數こそませ、其目的を達すべくもあらず。依て之を西比利亞に送致するの案を廢し更めて虐遇の最も甚しきものを加へんとせり。

露西亞の刑法として、其西比利亞の獄囚に行かしむるは、決して寬大の處置にはあらざる也。況んや是以上の嚴刑に當てんとする、政府の意向知るべきのみ。キシチーフに於ける支那人の虐殺？是をブラゴエチエンスクに於ける支那人の虐殺？是を以ても知り得べきが如く、彼等の頭上には、馬蹄の刻印、彼等の肩先には、鈍刀の切口、鮮血と死屍とは當然愛くべき運命たりし也。然るを曾々英政府之を聞き、『ヅッホーバー』の爲に、露政府に抗議し、斡旋盡力終に遷して英領カナダに住せし

ひる事とせり。

其祖國なりと雖も、彼等にとりては暴虎の夫れに等しき政府の爪牙にかゝらんとせし彼等は、義俠ある英政府の援助によりて、加奈陀平和の地に生まるゝを得たりき。而して爾來其の信仰の默示に從つて、克く耕作勞役し、克く共產平和の實をあげ、克く信義公道を守り、一人の貧民もなく、一人の破約者もなく、以て加奈陀の良民として今日猶ほ盛に生存せりと云ふ。

「以上は是れ此の世界無二の一大名物たる『ヅッホーバー』の大略を記せるものが、讀者之を以て如何の感を興すや。記述頗る粗雜、爲に或は了解に苦しむは多く、隨ひて其教理に對する異見も蓋し多からんか。元より彼等の頑迷なる、所詮度すべからざる所なきに非ず。而も其信念の强固にして、其平和共產毫も討伐角鬪の弊なく、共力勞役其天職を奉じて高潔純白の生活を送るの點は、少くとも露國產物の一としてトルストイと共に、世界の珍とすべき價値を有せずや。

猶ほ彼に對する最近の生活として、世の傳ふる者あり。此れ附記すべし。トルストイ最近の名著小說「復活」"Resurrection"の出づるや、英國の一書肆書を伯に寄せて、其飜譯を許さん事を請ふ。伯返書して曰く、若し其純益をあげて「ヅッホーバー」に寄附するの條件を踏まば、是を許さんと。約なり、書售れて若干の純益金に此事を附して「ヅッホーバー」に送る。然るに「ヅッホーバー」亦直ちに是を返附し來り、且つ書して曰く、「貴店の好意も之を受く、トルストイ伯の好意も亦之を謝するの語を知らず。而して「復活」の一書や、伯が世間迷妄の徒を救はんとして著はされしものたるを知れり。而も吾人を以て推すれば之を購讀せる者の多くは、其伯が精神とする所を歡賞するにあらで、其表面に描かれたる墮落の徑行を喜ぶ者なるを覺ゆ。(「復活」の一書は或る墮落せる者が、遂に後悔して神の世界に生まるゝと云ふ筋を抒べ

し者なり)さすれば此純益金は、世の淨きもの、手より拂はれしにあらで、墮落者の財囊より來りし者、吾人清淨純潔を尊ぶ「ヅッホーバー」は、かゝる不淨財を手にするを欲せず。云々」と誌せりと。嗚呼何等高潔の語ならずや。讀者、請ふ世間其宗門の宣傳を多く顯門の間に施し、以て多くの利得を貪らんとする賣僧牧師に比し、彼等清敎徒の胸事を味ふて可也。

蟲籠

名古屋　堀江生

(十一)　煙管の用途

某幼稚園の運動場、櫻桃山吹の花など吾第一と咲きほこる植込の彼方、日當り宜き所に大勢の子女が一人の敎師を取りまき、優しき聲音に先生〳〵と呼び立て。遊び戲れて居る。敎師は長羅宇の煙管を示じて生徒に向かひ。

『皆さん是れは何で作つてありますか當てゝ御覽。御褒美にはお饅頭が出ますヱ』

『先生あの――――』と愛らしき少女が口元に無限の微笑を浮べ

『それは金と竹でありまず』とさも得意げ也

敎師は更に『是は何にしますか、此度の御褒美は雁です』

あの雁と皆々は喜び。『先生妾が』と手を擧げながら『夫は阿父ちやんが阿母ちやんの禿頭敲くの！』

(十二)　正男さん

神奈川縣　鶴正男

正男さんの少さい時お寺の隣にある尋常池邊小學校に通ひ居たり。なりは小さいか學問ではいつも優等である。一年生で暑中休みの時分、正男さんは隣りの、友達と夢中に遊んで居つた、すると お祖母さん「まさやまさたぼんももーちきだヱ」

友「ぼんとは何んだね」

正男さん得意になつて「ぼんは屋根から下つてくるのほら ぼーんぼーんと ね」

さあお祖母さん方は大笑ひ 正男さんは大きくなるまで斯う愚つて居た。

正男さんは今になつても斯う繰り返されては苦笑ひをして居るのである。

丁髷に映りし

露西亞帝國

△漁民幸太夫磯吉の漂流談▽

村羊生

一、序言

▲隔世の感——滑稽なるロシア觀▼

歷史は是れ生命あるパノラマ也。

日月星辰、自ら機微あり、井然として寸時も止む時なきが如く、駸々乎として日一日に進歩轉變しゆく時勢の潮流の如何に速かなるかに見よ。昨日のわれは今日のわれに非ず、去年の社會は今年の社會に非る也。指折り數へて三十餘年、わが國人文の進歩發達の跡を追へば實に隔世の感なきを得ず。

林子平が海國兵談を著はして禁錮せられし事もありき。横井小楠が硝子にて障子を張りたるの罪に座して閉門仰せつけられたる事もありき。更に長州下の關の役に於ける長藩參謀の献策を讀んで『南蠻の異人には足なければ陸に上る能はざるや論なし、宜しく陸に接近するを俟つて直前わが日本刀の味を知らしむべし』に至つては、今にして思へば實に抱腹絶倒の至りにあらずや。

あゝ今や日露の平和一朝にして破れ、兩軍干戈の間に見ゆるに至り、艨艟貔貅相踵いて滿韓の野に向かひ、帝國の勇武は世界に轟きわたると共に是れまでは亞細亞洲裡の一小帝國として知られしわが大日本帝國は、俄然世界列強環視の衝となり一躍して極東平和の擁護者を以て仰がるゝに至れり。

而も戰は容易の事にあらず、況んや領土の廣大彼れの如く、人材の豐かなる彼れの如きを敵として、世界の大舞臺に輸贏を爭はんとす、抑もまた難からずや。吾人はまづ深く彼の國の事情に就いて、より多くを知らざるべからざると共に、丁髷時代の日本人の眼に映じたる露西亞帝國の如何に多趣味なりしかを知るも、また一興ならんか。

二、發端

▲神昌丸の難破——將軍漂流民を見る▼

時は寛政四年壬子九月三日、露艦一隻わが漂流民を送りて根室に至るの報あり。

一行は神昌丸の乘組にて、去る天明二年壬寅十二月十三日伊勢の白子港を出帆し、其の夜駿河の沖にて俄大風に吹き放され、同三年卯七月二十日魯西亞の屬島アミシツカといふ所に漂着し、夫よりカムサツカ、オホツカ、イルカウツカの地を經歷し、歐羅巴洲なる魯西亞國の都に出で、女帝に見えて話しを受け立ち歸りたるもの也。

時の將軍德川家齊、命じて神昌丸船頭大黑屋幸太夫、同水主磯吉を召し寄せ、其狀況を問はる。實に寛政五年癸丑九月十八日也。

此の日將軍は吹上の御物見に出座、透明の簾をかけ、右の側には松平越中守(定永)加納遠江守、平岡美濃守、高井主膳正列座。取調べ掛としては御納戸頭取龜井駿河守、水野河内守、多紀永壽院桂川甫周列座し、執事中川勘三郎、矢郎彦五郎左右に並び、御座の後には御小姓、左には御小納戸群座せり。白洲には床机二脚を据へ、正午の頃愈々兩人を御前に召出さる。

幸太夫齡四十二歳、髮を三つに組み、之れを後に垂れて黑き絹にて卷き、黑き氈笠を脇はさみ、襟には黄金にて作りたる小さき鏡の如き物をかけ桃色の銀莫馭兒にて製したる筒袖の外套に赤き玉の鈕を施し、仝じ織物の袴を穿き、紺地の錦の緊身を着し、足は白きメリヤスの上に黑き百爾西亞革の深沓を履き、丸籐の杖をつけり。

磯吉は齡二十八歳、仝樣に髮を組み、裝束も幸太夫と大差なく、紺哆囉呢(羅紗)の外套に銀の表紐を付け、緊身は猩々緋に黑き緣をかけたるを着し黄黑間色の天鵝絨の袴にメリヤスの靴下を穿き、上半は柿色の革にて繼ぎたる深沓を穿てるが、幸太夫と共に笠を地上に置き、拜をなして床机に座

したる体更に此の國の人とは見にず、一見紅毛人に髣髴たり。

以下の物語りは實に其の陳述にかゝる。一言一句當時の人々には如何に物珍らしく感じけんよ。時の祐筆が『答ふる所的實にして聊か虚説なし、誠に千古の一大奇事なり』と嘆稱したるも故なきにあらざる也。

三、足鹿より東薩加に入る

▲風俗——食物——氣候▼

＊　＊　＊　＊　＊

最初に到着せしはアシカといふ島にて、此處に四年滞在す、食事は魚の潮蒸、黒百合の根を水にて煮、研いて白酒の如く製したるを用ゆ。女は腮に二本、鼻の穴に二本角あり。顔面並に手の甲に青き筋を入墨せるが、角は生來自然に生じたるにはあらで、鯨の牙を筆の軸程に削り、長さ二三寸許りなるを特更に裝飾せるものにして、自在に嵌め外す事を得る仕掛也。男子は被髪にて男女共に鳥毛を身に纏ふ。

それより東薩加に渡りて、オホツカといへる地に更に四年滞留す。此間乗組員中六名の者チンカといふ病にて倒る、且つて日本にて見し事なき病体也。此地は寒氣甚だしく、冬の間外出するには裘を着し、狐の皮にて面を包み、目ばかり出して歩行するを常とす。もし其等の用意を怠り、耳鼻を現はす樣の事あらば、忽ち凍りて石の如くになり、加之暖氣に接する時は局部は直ちに溶落し、頬面の如きは刃物もて割り取りたらん如し。尤も其の節は乳酪に丁子や肉桂の粉末を加へたるを塗附すれば、自ら癒ゆ。甚だしくなれば手足も脱落する由にて、現に同船の庄藏といへる者その病にかゝり、随分とも相惱みしが、彼の國の醫師來りて治療に任じ、まづ大いなる布をかけ、小鋸にて足を挽き切り、燒酎に浸した木綿にて繃帯せり煎藥は療治の前にも飲ませたるが、後には硝子に入れて與へたり。

手當として與ふる所は僅かに銅錢十文にて、それにて牛肉小麥などを買調へて與ふるが、雜費それにて充分なり。

四、女帝に謁見す

▲露都に上る——謁見の禮▼

當地に駐在しおる役人なるべし、甲比丹テモオシボイチといふ者、頻りに歸化を勸むれども、素よりさる心は夢更になければ、如何にして今一度日本の故國に歸りたく、種々と心膓を砕きしも、少しも甲斐なければ不思議に思ひてよく聞き糺せし處、いつも例の役人共が途中にて握りつぶすものなる由窃かに知り得たれば、遂にはあらゆる手段をめぐらして當路の役人を瞞着し、幸太夫獨り露西亞の都に登りて事情を訴ふる事となしぬ。

其の砌り、女帝ベチシルホルといふ所に行在せられたり。早速に召出されて宮中に伺候すれば數多の官人嚴重に相戒しめ、玉座の左右には花の如き宮女立ちならび、あまりきらびやかなる四邊の光景に、何となく心劫れて猶豫するを、御老中ともいふべき官人つか〳〵と近づきて女帝の御前に伴ひぬ。

即ち豫ねて教しへられたる通り、兩手を重ねて差出せば、女帝も仝じやうに御手を差延ばしながら指先きをわが手の上にそと載せ給ふをば三度押戴きて嘗む、是れ初めて帝に見ゆる時の禮儀なりとか。

謁見も濟みて何かと御物語りありたれども少しもわかりし事もなかりしが、兎に角歸國の願だけは早速に聞き届けられたるに、聊か愁眉をば開きぬ。あはれ幾日の心遣ひなりけんよ。

五、露國事情

▲帝室——日本の事情とロシア▼

當今の女帝はエガテリナ、アレキセウチといひて、御年は六十四歳と承りぬ。皇太子はハウルベ

トロイといひ御年三十九歳にわたらせらる。皇孫二方あり、一をアレキサンデルハウロイデといひ御年十六歳、一はコンスタンサンハウロイテと申して御年十四歳なりと聞きおよべり。

イルコウックにて朝鮮人を見しが、唐人も見受けたり。聞けば北京の人なりとか。彼の國の人々がわが日本の事情に精通し居るには驚けり。街頭日本の事實を書きつけたる書籍、並びに日本地圖などを見しが、日本人にて桂川南甫、中川淳庵の名は何れもよく知れわたり居り、書籍中にも其の名を見たり。（中川淳庵は若州の侍醫なり、往年病死す、彼國にては官醫の様に心得居るものの如し併し何故ありてかく知れ渡りしかは不明也）

六、露都の風俗

▲風俗——武藝——弓術▼

露都の風俗を述ぶれば此の地の人々また煙草を用ふ。不思議なる事には矢張りタバコと稱する事にて、品質は寧ろ下等也。煙管は燒物もあれば金石にて製したるもあり、火をつけるには水晶にて天火を取る。（凸鏡にて太陽の光を受け其の焦熱によりて點火するをいふ）我々の天火を取らざるを見て何故なりやと或る人の尋ねに、是はあまりに勿体なき故と答へしに、其の人は何となく微笑せり。

武藝の稽古といふ事は一向に見受けず。唯だ足輕体の人（兵卒なるべし）が鐵砲の稽古しつゝあるを見る。專ら足の踏み方を習ふものゝ如く、侍は弓を用ふる事なく、唯だ獵師のみ之れを用ふ、至極麁末なるものにて、矢張り蝦夷人の弓と全様白研にしたるものの如し。

七、露廷の官爵

▲老中様——其行列——勳章▼

重職——老中とも相見ゆる人々の市中を往來する様を見るに極めて手輕なるものにて、輿は甚だ高く、立派なる車輪四あり、馬六匹之れを曳く。

（六頭立の四輪車）輿の内には四人程陪乘するを常とす。且て御老中と同乘にて、遠く郊外に出でし事ありしが、車の前に前驅二人立てるを見る迄にて、人留などといふ事は全然なし。尤も跡伴は隨分ある様子なりき。

御老中の人々はいづれも襟にメンタアリといへるものを掛く。（勳章？）一面にはペートル大帝の乘馬の像、片面には今上女帝エカテリナの肖像を彫りつけあり。腰に下げたる銀時計と共に女帝より賜ふものにして、之を掛けたる人は何處に行きても鄭重に取扱はるゝ也。

八、露國の宗教

▲洗禮——ホシツ——佛壇▼

彼國の風俗として、耶蘇宗門に改宗する時には、特に四十二日間水を浴せ、（洗禮）名を改むるを常とす。（基督信者名といふなるべし）小兒生るれば七日目の夜に大鉢に水を湛へ、小兒を水中に浸すこと三度、その上に命名するものとす。未信の徒は論外の様なり。

家々の入口には切支丹の法器十文字形——といふよりは、末廣がりに横木を入れたるキリスト（十字架をいふなるべきか）といふものを掛く。凡べて人を訪問するの時、必ず眞先に佛壇を拜し（希臘教の慣例として聖母並びに基督の肖像を拜するの風あり）然る後に主人へ挨拶するを例とす。歸る時も、主人には挨拶せずとも佛壇さへ拜すればそれにて足る。佛の事を彼の地をホシツ（エホバを指してなるべし）といふ。

九、露都市井所見

▲王城——城内の雜觀——工業▼

王城の構は、打ち見たる所にては一向城らしく思はれず、構造は煉土にて土藏造、または五重にも六重にも石もて疊みあげたるもあり、家の造りは二重目または三重目に築山泉水などを構へ、畑を

しつらひたるさへあり。聞けば下地を銅にて張り其の上に土を盛りたるものゝ由、尤も王城とても一見したる所にては平人の住居と左まで違ひたる樣子もなし。

家作りは大方煉土石なる故火災は至つて稀れにして、我が滯在中唯だ兩度ありしのみ、それも何分廣き事故二階目に火事ありても三階目にては知らず、隣家にては猶更の事なるが、勿論建家の燒失といふ事は滅多になく、單に家内の道具内雜作等の燒失するまでの事なり。尤も中には木造の家もありて、それ等は火災もありとの事也。

城樓の上には殆んと小車の輪大なる自鳴鐘あり城中の靈臺に伯多錄（彼得）大帝の像を安置す。寶庫の中には大なる磁石あり、大さ三尺ばかりにて方形なるを筋金にて釣り下ぐ。四隅に百貫目宛の碇一挺宛吸付き居れるが、其の脇に仕掛けある螺旋を戻せば、吸取の喰違ふものと見え、四隅の碇は轟然たる響をなして地上に落下し、再び螺旋を戻せば件の碇は直ちに飛び上りて舊の如く吸ひ付く事妙なり。

硝子の製造は非常に面白きものなりき。恰かもペテルホル（ペータースブルク）に出立の途中萬端の世話をなし呉れしキリロといふ者硝子製造師の由にて、仝人宅にて親しく是れを見る。石を粉末にし、それに山鹽と小麥粉の如きものを混入するだけは敎へしも製法は傳へず。硝子の製法はまづ陶の如きものに吹き、夫れより筒に吹き立て山鹽にて竪に筋を入れ竈に入るれば、右の筋より二つにわれ、竹を割りたる如く成る。夫れを三方土にて塗り塞ぎたる竈の中に入れ並べて燒けば、自然兩方にながれて平らかになる也。

哆囉呢の織方は、綿羊の毛を紡ぎて突柿にて織る。織りあがりたる時は、全面に水を曉き、毛の硬き刷毛にてこすり疊みつくるを常とす。

滯在中別に怖ろしと思ひたる事はなかりしが、唯だ彼の國の寒氣には殆んと閉口せざるを得ざり

き。五月より八九月頃までは夜中殊の外明るく、晝よりも明瞭と見え、細字細線の如きも燈なしに讀むを得べし。

十、露國の動物

▲駱駝——野猪——犬——鴈▼

動物などの種類も吾々には珍らしきもの多かりき。ヤカウツカよりイルカツカへ行く途中に駱駝を見たるが、全躰鼠色にして殊の外大きく、脊に瘤ありて頸は格外に細長く、頭は至つて小なり。

魯國の人は之れをベルホルウタと稱す。

鴈は年中居らざる時なく、春の中頃より初秋にわたりて別けて夥たしく、卵を生みかへすも其の時節也。家々にては其の羽を切りて鵞鳥の如く飼養し居るを見る。雄四五羽に、雌三四十羽宛附け置き、土人は其の卵を食用に供す、味甚だ美なり。

ペルエルホルには、鼠ほどの野猪、雀ほどの矮雞類を見る。野猪は歸國の節持歸る積にて三匹迄飼養せしを、彼の國の人々は迚も保つまじと言ひしが、果して間もなく死了せり。

彼の地の犬は中々力強く、寒中の橇は大抵犬を以て之れを曳かしむ。通常四匹を用ふ。

十一、莫府の大鐘

▲大石火矢——大鐘——石橋▼

ムスクワ（モスコー）の都には、大なる石火矢あり、銃口より這入りこみて、充分に足を延ばし手を延ばせば指先少しく支へる程也。長さは三間ばかりもあらんか。仝じ所に非常に大なる鐘あり、昔時祝融の爲め燒落ちたる由にて深く大地に喰込み居れり。周圍を堀りて石垣を積み、其の中に下りて見物する樣になり居れるが、其の大なる事、實に驚き入るの外なく、重量はわが國の四貫百目を一貫目として數へて、猶ほ二千五百貫に上るといふ、遠くのぞめば小山の如き觀あり。

此の地に有名なる大石橋ありし由なるも、當時

破壊して、假りに板橋を架し居れり。ナポレオンといふ佛國の大將が此地に押し寄せ來りし紀念なりとて、樣々の石像やうのものを所々に見受けたり。

十二、愈々歸國に決す

▲海路三ヶ年——歸國の願ひ達す▼

我等事は特別の取扱にて、萬事賓客の樣にもてなされしが、本國には老母妻子兄弟もある事故、如何にしても恩愛の情忘れ難く、故國の面影の戀しくて、其の上馴れぬ食物とて難儀一方ならず、言語も明白に通ぜざる事とて、永く彼の地の人たらん事は夢さらに思ひもよらねば、種々に陳述せしも兎角遲延の模樣故、恰かも紅毛人（和蘭人？）が日本へ通船する由聞きたるを幸ひ、送還の事を賴み聞えしに、露西亞帝へ差出せし歸國願を願下げ、全く露西亞の手を放れなば、屹度送り還すべしといふに、海上幾日を費すべきやと問へば三年の日子を要すといふ。露西亞人の言ふ所によれば左程多くの日子を要せざる樣聞き及びしが、それにても歸國せらるゝ事ならば、止むなく紅毛人になり賴まんかなど案じ煩ひしが、幸にして願意聞き届けられて遂に首尾よく本國に送り還さるゝ事となりたるが、愈々彼地出發の際、御老中の告げて曰く、世界の國々いづれも我國と交易通商せざるはなきに日本のみ通信なし、汝等を送り還す因みに交易の儀取繕はずやと、全く役人の存寄の樣に申添へたりき。

人物評傳

押川方義師

富士山麓 山月子

（一）人を論ずる資格

樊遲、知を問ふ、孔子曰く『人を知る』と、人を知ること、實に困難なり、世界歷史に、英雄の資格の一として記せられたるものは『人を知りて能く任ず』といふことなり、支那史上に、賢者の資格の一として數へられたるものは『明主を撰ぶ』といふことなり、人を知るの明、抑も何くより得來らん乎、

十年以前、余仙臺に在り、三個の疑問に撞着せり、心眼に映ずべき活ける基督とは如何、是れ一、日本基督敎開闢以來の人傑は誰ぞ、當時人々稱して西京の新島、東北の押川といふ、新島氏沒して押川師在り、二人孰れを優れりとせん乎、是れ二、當時神學論に種々あり、修養論に種々あり、横井、植村、内村、松村、諸氏の說、相反する所ありて一ならず、眞理何くに在る乎、是れ三、

第二、第三は、餘りに心を惱ます程にもあらざりしが、第一の問題は、余が滿身の熱血を沸騰せしめ、止むを得ざる事の外、萬事を放擲して、一意祈禱と默想との三昧に入らしめたり、苦心三四年を經過し、明治二十九年一月九日、宮城野原に於て、漸く天來の默示に接し、忽然として『血肉爾に示せるに非ず、天に在す我父なり』との一句を悟し、第一の問題、朧ろげに解け、第二、第三の問題、明かに解けたり、是に於て、始めて自ら押川師胸中の幾分を見ることを得、紛々たる神學論、修養論、一も心を煩はすものなきに至り、人に接するに『これは如何なる人か』などの念を起さず、虛心にして、自然其人の大體を知り得るに至れり、此時に於て、始めて『我れ人を論ずる資格を得た

之」との自信を生ぜり、斯く言へばとて、人固より神（全智の）に非ず、豈他の一切を知ることを得んや、先づ我よりも高き人か、低き人かを知り、其長處、美點を或る度まで知ることを得、而も大體映るやうになりて解かるものにて、探偵の鋭眼に、人を看破するが如き者と同じからず、是れ有の儘の事を有の儘にいふのみ、余はこれ位の事に誇らん心、露程もなきなり。

（二）内觀外察

一方に其内部の心靈を觀得ずる明あり、他方に其外部の實歷を蒐集する精あり、一は則ち言はず、行はざる本體を觀、他は則ち其言、其行を察す、内觀外察、相照應して、以て始めて批評の正鵠を期すべし、言行のみにて人を察するも、活ける人に對しては、誤解頗る多し、況んや言行をすら知らず、風聞傳説によりて、他を批判するに於てをや、余は固より押川師に對して、此内外兩點に於て、遺憾無きほどの資格と、材料とを有する者に非ず、然れとも比較的遺憾少きことを斷言するに憚からず。

（三）少年の押川師

師は伊豫國松山藩士橋本宅次氏の三男なり、幼名を熊三郎といふ、九歳の時、祖先の緣家たる押川家に婿養子となる、

師の祖父某氏は、義の爲めに割腹して果てたり、父なる人は、藩に於ける擊劍の師範代理たり、母は賢夫人にして、師に教ふるに、正直正道といふことを以てしたり、養家の父は、槍道の師範代理たりき、

當時の藩主は明君なりし、其養育の任に當りし局は、名高き賢婦にして藩主に教ふるに、經濟の道を以てしたれば、一藩皆質素儉約を守り、富み豐かなるに至れり。

藩の學校を明教館といふ、文武兩道を教ふ、寄

宿生あり、通學生あり、互に切磋琢磨す、而して一週日に一回は、一藩の士、悉く出席せざるべからざる定めなり、痛み處ある者に限り、欠席を許可せらる、藩主の息、亦普通の子弟と共に出で、教育を受く、かくて一同、小學、大學、論語、孟子を學び了るときは、則ち普通藩士と同じく、一週一回の出席のみにて足る、餘の日は、出席、欠席共に自由なり、其後續けて學ばんとする者は、則ち寄宿舍に入る、武道は、馬術と水練とを除き、劍、槍　弓等、凡て館内に於て學ぶことを得、十二月、寒稽古の時は、朝々特別に粥を賜はる、

押川師の養父は、番目附たり、師は通學生にて、毎朝星を戴いて起き、稽古に出る前、必ず一家一日の飯米を搗かしめられ、且晝夜小僧の如く逐ひ使はれたり、其教育の嚴なる、今の軟弱子弟をして驚心駭目せしむるものありしといふ、

逸話あり、師の實父、押川家を訪ふ、一方は擊劍家、一方は槍術家、實父辭して歸らんとするに臨み、養父、師をして其草履を直さしむ、實父怒りて曰く『三男は草履取として遣はしたるに非ず養子として遣はしたるなり、直すに及ばず』と、養父は曰く『親として命ずるなり、直せ』と、曰く『直すに及ばず』曰く『直せ』、遂に養父と、實父との間に、斬り合始まらんとする程なりしが、仲裁者あり、事なきを得たりと、當時の武士氣質、亦想望すべからずや。

（四）人を呑むの氣

師十三四歳の時、論語を讀み、心深く孔子の大人物に感じ、支那に渡りて親しく其教を受けんことを欲す。家に歸りて懇ろに所志を陳し、以て其許可を乞ふ。養父曰く『汝の志極めて可なり、然れども奈何せん、孔夫子は既に千數百年の昔に沒せられたり』と。師聽きて大に落膽す、後年、集禪學者之を聞き、驚嘆して曰く『蛇は一寸にして人を呑むの氣あり』と。

十四五歳の時、一危難に臨む、そは養父、引田流の槍術に熟達し、一藩の代稽古たるより、自然他の嫉妬を招き、腹黒き者共、相結合して、試合に托して、其養子（師）を殺し、以て苦と辱とを其親に與へんとせるなり。事洩る、而も武士の意氣地、恩愛を以て枉ぐべからず、乃ち師に命じ、一死を期して其試合に出でしむ、師、此意氣、決心を以て他に當り、自己より年長なる多くの相手を悉く突き破り、勇みて歸宅したり、前夜より羽織袴を着し、食はず、飲まず、神棚の前に端座祈念しつゝありし養父は、息子が無事に戻りしと聽くや、一言の答もなく、一瞥を師に與ふることもなく、其まゝ立ちて寢處に入り眠りたりと、

十六歳の時、小林小太郎といふ人に就き、英學を習ひ始む、同學僅かに十數名、昔氣質の養父は師に英書を學ぶことを許さゞりしかば、師は隱れて潜かに學びたり。即ち擊劍の時間と、遊びの時間との幾分を割きて、毎日二時間づゝ學びたり、

師儒道を喜ぶ、槍は引田流に達し、劍は直神影流に通ず。馬術亦精妙を極む。師の行歩の大跨にして、眞個『横行濶歩』ともいふべきは、槍術修業の爲めに斯くなりしものなりと。宮川經輝氏、師の演說の態度を評して『槍道より得來るもの』とせり。

（五）青年の押川師

既に東洋文武の道を修むるも、西洋の學を習ふに及びては、又別樣の趣味あり。如何にもして更に英書を研究せんと欲し、遂に脫走して江戸に出で、箕作氏の塾に投ず、後藩より英學修業生十餘人を撰拔するに及び、師も其一人に加へられたり。

師豪放不羈、磊落不屈、粗暴、塾内隨一と稱す、弱きを扶け、強きを挫き、時々喧嘩をなし、屢々鮮血淋漓として歸る、其相手たる者は、多く薩摩肥後等強藩の士なり。或る時、虎の門外に於て、薩藩の士、十三人と衝突し、劍を拔きて斬り合ひ、遂に三士を逐ひまくりて歸りたり。

藩より書生に與ふる金は、毎月十二圓五十錢にして、當時の賄料は三圓五十錢、餘す所九圓ありしも、其頃の學生の亂暴なる、殊に亂暴隨一なる師の事とて、其殘餘は、一時に人と共に飲食し、後は一文無しとなるを常とせり、而して留學生の成績惡しき者は、藩に呼び戻さるゝ定めなりければ、師は試驗前の如き、晝夜勉强し、睡りを防がん爲め、顳顬の血を取り、爲めに疲勞するに至りしことあり、夜は一つの蚊帳の中に、幾人も頭のみ突き込みて眠りたりとぞ。

心姿雙絶なる名妓某が、深く師に戀着せるは、此時代の事にして、師は基督の道を知るに及び、剛鐵の意志を以て、其關係を斷ち去りたり。可憐なる彼女、鐵石心なる師が薄志の輩をして驚倒せしめ、有情の人をして落涙せしめたり、是れ尋常放蕩者の關係と、大に異るものありたればなり。

（六）師と基督教

明治三四年頃、藩に改革あり、學生皆給費を絶たれ、自費となる、師是より先き、屢々横濱に出づ、徒歩して京濱間を往來し、以て宣教師ブラオン氏に英語を學ぶ、

四五年頃、宣教師バラ氏、或る集會の席上、祈りて曰く『神よ、我が日本國を救ひ給へ』と、愛國の精神燃るが如く『日本』てふ名は、戀人の名の如くゆかしき師の耳に、外人の口より『我が日本』といふ言を聽く、心大に動かざるを得ず、以爲らく、基督の道は、斯くの如く博愛平等、一視同仁なるかと、是に於て乎、今まで英學研究のみを腦中に置きし師は、一轉して更に當時の異端邪宗——宣教師には探偵附き纏ふ程なる基督教を研究せんとするに至りたり、

教界の某名士曰く『基督教は、罪を感ずることより入らざるべからず、國家といふことより入りし者、社會改良といふことより入りし者、人物といふことより入りし者、多くは墮落し了れり、云々』

と、是れ未だ神の人を導かせ給ふ大慈聖智の無窮なるを辨へず、基督の法門の無量なるを知らざるより出づる僻説にして、取るに足らず、余の如きは生死の問題より道に入れり、罪の感は其後に來れり、信者の墮落の如きは、別に他の原因あり、

さても師が獨特の靈眼は、直ちに『宗教は人物に在り』との點に注視し、活ける基督に近接するに至れり、

師や始め論語を誦して、孔夫子の人物に感じ、後支那史を讀みて、諸葛武侯の人物に感じ、後西史を繙きて、ナポレオン第一世の人物に感じ、最後にナザレの耶蘇基督の大人物に撞着せるなり、生命貫徹する所、朽骨皆活き、靈心相通ずる所、古人眼前に躍動す。彼等は我が師の師、我が師の友なり、是れ普通讀史者の感と同じからず。

師遂に洗禮を受けて、信者の仲間に入る。

（七）越後傳道

ブラオン氏は、基督敎に於ける師の最初の師なり、熊本のゼンス、札幌のクラーク、二氏と並び稱せらるゝ人なり、師評して『感情に於て宗敎の了かりし人なり』といへり、バラ氏の如き、其他某々宣敎師の如き、皆師の先輩たり、一日、某宣敎師、約翰傳第十章『羊牢に入るに、門よりせずして他より踰る者は、竊盜なり强盜なり、云々』といへるを解して『故に釋迦も孔子も竊盜なり强盜なり』といふ、師之を信ずること能はず、是より疑問を發して、自ら研究し、遂に獨特の見識を開く、聖經に曰く『多くの先なる者は後に、後なる者は先になるべし』と、西洋より傳へられし基督敎も、日本に於て、更に其奥秘を發見し、幾百年の後に於ては『日本人の歐米傳道』てふ時機の來らんことあるも知るべからず、

明治九年頃、越後に蘇蘭の宣敎師バーム氏在り、醫を業とし、道を傳ふ、傳道師某氏あり、協働す、偶と同地方に疫病行はる、佛敎の僧侶、流言して

曰く『是れ耶蘇の然らしむる所なり』と、所在愚民を煽動す、是に於て乎、數十、數百の群、竹槍蓆旗を以て蜂起す、傳道師某、危急の間に身を以て免かれ、横濱に來り、敎會堂の集に於て、泣いて其狀を報告し、『越後は鬼の國なり』といふ、滿場粛々、沈として水を打ちたるが如し、時に一人あり、起立して曰く『我れ願くば其鬼の國に行きて、神の道を傳へん』と、衆、頭を轉じて之を見れば、其人年齡二十二三、容貌高貴、英姿颯爽たり、是れ即ち我が押川方義師、只だ見る、一西洋人の歩み來りて、師に握手し、落涙して喜ぶを、是れブラオン氏なり、感激の氣、謝恩の涙、堂に滿つ、

既に出立せんとするに臨み、ブラオン氏、師を其家に招き、壁に懸けし洋服二重を示し『越後は寒國なれば、此中、何れなりとも卿に呈せん』といふ、師見て曰く『皆貰ひ行くべし』と、其二重を持つて出立す。既に越後に入るや、寒氣身に徹す、

師、日本服の上に、彼ブラオン氏より貰ひし大洋服の上着を着し、バーム氏を訪ふ、水谷某といへる老婦、出でて師を見、何人なるかを問ふ。師答へて曰く『押川なり』と、彼女は豫ねて横濱より押川といふ人來る由を聞きしが、今其奇なる風體に接し、驚いて『へー』といひたるまゝ、暫時口を開くこと能はざりしといふ、

此奇體なりし青年、一たび演壇に立つや、神威、渾身より射、雷霆、舌頭に迸る、一語一句、風霜の如く、劍戟の如く、人の精神を襲ひ、人の心臓を貫く、『押川』の名は、忽ち四方に喧傳せられぬ、反響斯の如くして、毎日五六回の演説をなす、反響何くんぞ起らざらん、一揆等復蜂起し、其有力なる外道を退治せんと欲す。師泰然、一本の杖を携へて、竹槍蓆旗、數百の間を横行す、威風凛然、衆、目を注いで、敢て手を下す者なし。

一日、師の容貌に似たる某といふ者、某村落を過ぐ、誰いふとなく『耶蘇の隊長押川が通る』と

嘲す、『然らば打ち殺せ』といひ、竹槍を持ちて走り出づる者あり。一人、二人、重なりて數十人に至る、某は其何事なるかを知らず、たゞ恐ろしき群集の、口々に罵りて、我を逐ひ來るを見る、乃ち一生懸命に走り、巡査の駐在所に駈け入りしが、巡査は生憎に在らざりき、由て內より堅く閉し、息を殺して潛居す、衆到り戸を押せども開かず、乃ち屋根に上り、板を剝ぎ上より石を投じて、某の頭を打碎し了れり、憐むべき彼は、師の身代りとなりて果てたり。

又一夜隣村に往かんとす、八時よりの集なれば、七時に出發せんとせしに、俄然師は頭痛破るゝばかりにして堪へ難し、勉めて往かんと欲せしに、バーム氏診して『斯くの如き大熱にて往かんこと甚だ不可なり』といひ、强て抑留す、師乃ち床中に臥す、翌日飛報あり、曰く『昨夜暴徒あり、亂入して、集會所を破壞し去れり』と、斯の如き危險、幾回なりしを知らず、されども大能の聖手、師の上に在りて、師の髮の毛一筋をも、空しく失ふことなかりき、

バーム氏は、一種の人傑なり、師と肝膽相照し、共に道の宣傳に勉めしが、神學上の意見、相違し來れりとて、本國のミッションより召還せられ、遂に再び日本に來らず、眞に惜むべきなり。

(八) 仙臺傳道

師、越後に在ること五年、明治十二三年頃、大火あり、殆んど新潟の全市を燒く、居るべき家なく、訪ふべき家なし、門下吉田某氏、師に勸むるに、生國仙臺に傳道せんことを以てす、乃ち十三年春一たび視察し、秋九月出仙す、師、吉田氏を伴ひ、二人、風呂敷に聖書を負ひ、仙臺の市內を、一戸々々に訪ひ、之を賣る、買はざる者には、『寄附せん』といひて、置き去りければ、後より追ひ來りて代價を出す者もあり、或は誤りて高等乞食となし、天保錢一枚を出す家もありたり。仙臺

市を巡りて後、古川町、其他の町村をも巡りたり。十月に至り、師は其女子を喪へり、其腸窒扶斯傳染して、師も亦病床に臥す、重症なりしかど、幸にして癒え、全快後起つて演說せしに、始めて數名の悔改者を得たり、

師、一室に於て、常に同胞の爲めに祈る、室隅の疊肘つきし處、表破れて穴明き、涙滴りて疊の幾分を腐らす、師が此赤誠と熱涙とは、日本東北傳道の根基なり。

西人某氏、遙かに師の名を聞き、橫濱より仙臺に來り、師を訪ふ、師が僅に數疊の座敷に居り、膝に繼ぎ切を當てたるヅボンを穿ち居れるを見、先づ其朴素と淸貧とに驚き、相語るに及びて、再び其熱誠と、識見とに驚きたりと、

既にして南町通りなる本願寺別院、財政困難の爲め、建物を賣らんとす、師之を聞き、僅かの信徒を集めて、集金の演說をなす、聽く者感激、非常の奮發を以て出金し、寺院を買ひ取りて敎會となす、事傳へて京都に聞ゆ、本山の衆、大に驚き使者を立てゝ買戻さんとす、師應ぜず、再度の使者來り『價を倍せん』といふ、復應ぜず、三たび使者到る『三倍して買ひ戻さん』といふ、師答へて曰く『十倍にても應ずること能はず』と、使者力及ばずして歸る、當時の縣知事、驚きて曰く『耶蘇敎といふものは、恐ろしき力のものぞ、何處の隅に居りしか知れざりし者が、忽ち出來本願寺を乘り取りたり』と、

明治十八年、フルベッキ氏の依賴を受け、土佐に傳道し、居ること數ケ月にして、高知敎會設立せらる、師が當時名聲天下に赫々たりし板垣退助氏と議論し、氏を僻易せしめ、土州人の耳目を聳動せしは此時なり、

明治二十年、宮城中會を立て、仙臺敎會を以て日本基督敎會に合せり、

此年、ゼルマン、リーホームボ、ミッションの宣敎師ホーイ氏と共同し、東北學院を建つ、五層樓

瓦の建築は、師の熱涙に感じて、某寡婦が、十數年間湯屋の火たきをなして、貯蓄したる全財産五圓を寄附せしものが基礎となり、内外人士よりの寄附金によりて成れり。

此前後、山形に傳道せしこと、山形英學校を立てしこと、山形に於て、當時の文部大臣森有禮氏と衝突せしこと、(松村介石氏が記して『彼が山形に於て、森文部と衝突したが、森などは其眼中に無かッた』といひしは、此時の事なり)などあれど、其事實と、年月とを詳かにせざれば、今は之を省きて、他日を期すべし。

(九) 歐米漫遊

明治二十二年、出でゝ歐米諸國を漫遊す、行きて某大學に至る、彼の博士、學士等、大に師を歡迎し、曰く『貴下の如き人の來遊せられしは、我が大學の光榮とする所なり、願はくば一年間遊び居られんことを、然らば呈するにデー、デー(神學博士)の學位を以てせん』と、師笑て曰く『日本の東京にては、下駄の直しをする者、デー、デーと呼び行くなり、我は左樣なるものを要せず』と、

此行、師は親しく米のムーデー氏を見、英のケボルジョン氏を見、又蘇蘭に歸國中のパーム氏を見、交遊、觀光、視察の間、心身を養ふ所あり、翌二十三年、歸朝す。

師が米國に於て、陸奥宗光氏と、大に宗教論を闘はし、後陸奥氏が某氏に語りて『押川といふ男が來て、大議論をして行きたり』といひしは、此の時の事ならんか。

(十) 師の傳道と教育

東北學院と、仙臺教會とは、師が多年の熱血を注がれし所、

仙臺には、組合教會あり、美以教會あり、浸禮教會あり、天主教會あり、而して舊本願寺を以て會堂とせる師の講壇には、日曜日、人を以て溢れ堂外に立ちて聽く者、頗る多し、當時の諸教會、凡て親切にして、會員等立ちて、新らしき來聽者に席を與へ、讃美歌を貸しなどせしも、師の教會に於ては、師『道を安賣する必要なし』といひ、會

員等、少しも來聽者に搆はず、たゞ各自靜聽して靈の進歩を期し居りしが、猶聽者は雲霞の如く集れり、東京の某教會員、仙臺に至り、此狀況を見驚きて余に語りて曰く『押川氏の演說の有力なる近傍の教會を吸收して、寂寥とならしむ』と、

後師は教會を後任者に托し、專ら學院の爲めに力を致し、傍ら各地の傳道を助けられたり、

師の說教、演說を聽き慣れし者は、如何なる雄辯家、能辯家の說教、演說に接するも、物足らぬ感をなさゞる者なし、其大雄辯は、迅雷の雲に轟くが如く、天馬の空を駈るが如く、長江の滔々たるが如く、怒濤の澎湃たるが如く、大空の極りなきが如く、星辰の嚴肅たるが如く、明月の皎々たるが如く、高山の嵬々たるが如くなるのみならず、實に其中、他の摸すべからざる聖氣、靈氣、神威權威の存する者あればなり、

余が舊日記の一節を擧げんか、

十二月一日(明治二十八年)此日、日曜、朝會堂に於て、押川師の說教、及び晩餐の式ありたり、誠に是れ十九世紀豫言者の大說教、題は則ち『基督の文武』或は黑雲閃電、雷雨迅烈、或は好日清風、花香馥郁、或は高山巍然として眼前に峙ち、或は大海渺茫として望むに際涯なし、野の百合を見せしめ、空の鳥を見せしめ、皎々たる月夜を現じ、寂しき星夜を現じ、曠野を示し山頂を示し、英雄の鐵馬利劍、名將の優情戀思、維れ文、維れ武、舌頭より迸り、體度より溢れ、以て耳に入り、目に入り、心に入る、而して此間を一貫して見るが如く現はし來れる者は吾等の聖主基督の人物なり、曠野の基督、ゲッセマネの基督を述ぶる時の如き、高妙深奧、言聞えて理汲み難く、たゞ我靈不思議の間に引かれて、言ひ難き感應を蒙り、語るへからざる聖化を受けたり、一場肅然、涙を呑みて動く者なく、靈氣堂内に滿つ、歸途自然に默想し、何時家に着せしやを知らざりき。

又名古屋に於ける日本基督教會の總會に演說せし時は、傍聽の諸士、始めは熱心に目を師に注ぎ居たりしが、感漸く深きに隨ひ、其頭自然に垂れ、筆記者亦頭を下げて、何時筆の止まりしかを知らず。彼れ東都の新紙に通信して曰く、

氏の權威ある演說は、吾等をして之を紙上に寫さしむることを許さず、心づきて見し時は、机上たゞ白紙のみ

如雲巖本氏の如き、亦師の辯を以て『日本第一

の雄辯』となす者、

其教育法の如き、亦大に他と異れり、彼の釋迦牟尼佛が『法の本法は無法なり』といひけん如く師の教育法も、亦是れ無法の法なり、明眼、人の特性を知り、之をして自由に、自然に、發達進歩せしむ、其間言ふべからざる妙味あり、請ふ一二の例を擧げしめよ。

嘗て東北學院普通科一年生の中、學年試驗の際、竊かに書物を見て答案を作りし者一二名ありたり、事洩る、始業式の後、師普通科生を集め、演說して曰く『自己の實力を以て、堂々應試し、及第も男らしく、落第も男らしくすべし、卑劣の擧動をなして及第するが如きは、公明の態度を以て落第するに如かず……諸君何ぞ義を踏んで打死せざりしや……若し我れ諸君の爲に死し、諸君が我の死骸に上り、それだけ地上より高まるならば、我は喜んで諸君の爲に死せんことを欲する者なり』と、聲曇りて泣襟に滴る、衆皆泣き、一人の頭を上ぐる者なく、學生の風、更に一新す、

某生あり、師の家に到り、質問して曰く『先生の說、時々異り、撞着あり、矛楯あり、何れに適從すべきかに惑ふ、請ふ指教を垂れよ』と、師笑て曰く『我が說の相異するに非ず、汝の方が變りて來るが故なり、例せば、讀書にのみ耽りて、精神の錬磨を怠るが故に、書物の蟲となること勿れと警むるなり、然るときは又一方に僻し、洞穴の中に入て、思考にのみ耽り、一向に讀書を怠り、學科を疎かにするが故に、書物は先賢古哲の明識卓見を載せたる者なり、精讀せざるべからずと教ふるなり、云々』と、

某生あり、師の意を誤り、師が情實に縛られ、主義を枉げしことを云々す、師彼を召し、問ふて曰く『汝の言ふが如き卑劣なる事を、汝自ら爲し得る乎』と彼れ默然たり、師再び問ふて曰く『教の爲さゞるほどの事を、我は爲すと、汝思ふ乎』と、彼愈々默然たり、師曰く『汝未だ人物を知ること能はず』と、彼深く反省し、大に道に進む、

某生あり、哲學上の難問に苦み、師に問ふ、師答へて、彼空しく歸り、退いて思考を錬ること半月有餘、一意見を立て、再び師に往く、師是に於てか明かに指教す、彼釋然として貫通す、

東北學院秋季運動會の時、師衆生を率ひて、藏王山を超ゆ、既に頂上に達す、舊噴火口あり、硫水湛ふ、時に寒風凜々、雲霧濛々、火口或は顯はれ、或は隱る、凄絶、壯絶たり、師見て而して曰く『是れピスマークの精神なり』と、一生問ふて曰く『何處がピスマークの精神なるや』と、師笑て曰く『そは直覺に在り』

圓球を盤上に轉ず、球の盤に附く所、僅かの一

部分のみ、附かざる所は、多くの部分なり、師の働きを見るに、亦斯の如きものあり、是れ彼の熱心全力を注ぎ盡して、餘裕なく、以て心を煩はし、身を傷むる者と異る所なり、而して其一部分中に全力含まれ、其力の發動する所、多くの熱心家の一生懸命に盡力する者に比して、遙かに優れる者あるは何ぞ、嗚呼一部に全力あり、忠實裏に悠遊あり、熱血裏に冷氷あり、講壇の師、坐談の師、閑居の師、執務の師、殆んど別人の如く、衝突、撞着、矛楯して、而も衝突、撞着、矛楯せず、活動自在、妙用無礙なるは、是れ師が天下に獨歩して、比肩する者なき所以に非ずや、而して其根源は、實に渾身、活ける大靈に充ち滿ちたるに由る者なり、故に今の人の働きとしては、比類少なしと雖も、師自身としては、數ふるに足らざる教會、學校の働きを以て、師の人物を盡さんとするが如きは、未だ誠に師を知る者といふべからず、斯の如き凡眼なればこそ、或は北清事變時の誣說に雷同し、或は實業界に入りたるを以て、云々の旨評をなすに至るなれ。

（十一）師の修養

師、自己の實驗を語らず、十餘年間に余の聽く所僅かに二三點に過ぎず、其一に曰く、

我數年前、心中の罪を發見し、之を耻ぢて非常に苦みたり、遂に此罪人として生くること能はずと思ひ、死を決したり、此時始めて基督の救ひといふことを眞に悟りたり、數年前の事と雖も、猶今日の如く感ず、其時は聖書を讀むも、神に祈るも考ふるも、山に入るも、斷食するも、罪より脫せず、此時罪の重みといふもの、眞にわかりたり、生れてより以來の罪惡、兵隊の行列をなして來るが如く、一整に來りて我を攻め、天地、鐵網を以て張り詰めたるが如くなれり、三十日の間、非常に苦み、非常に祈りたり、或は半夜起きて祈り、或は山中に入り、如何にするも、何處に行くも、其罪の重荷を脫せず、自ら思ふ此罪人にして生くることを耻づと、一日決心し、祈と共に死せんとし、倉庫の中に入り、中より鍵をしめ、三時間も熱切に祈りたり、其時始めて基督が我が罪を取り給ひしと、豁然とわかりたり、天に飛び昇りたるが如くなり、自由の人となりたり。

是れ明治二十六年、東北學院神學部教場に於て、

語られし所。又曰く、

英國のヒュームが『奇跡は出來得べからず』といひける論文を讀むに及びて、遂に懐疑の淵に沈み、幾多の哲學書を繙きしも、心曠然たるに至らず、非常に懊惱苦悶せり、此時『心の貧しき者は福なり、心の清き者は福なり、求めよさらば與へられ、尋ねよさらばあひ、門を叩けよさらば開かるゝことを得ん』との語を思ひ出づ、一日、不思議にも、心の門開け、無念無想無慾の境に入り、始めて神を確認せり、乃ち頑固なる信條も、進歩せる學説も、無神論も、ユニテリアンも、近世哲學も、さまで心に懸らぬやうになりたり、

是れ明治二十九年、師が東京青年會館に於て述べられたる所にして、余は知人より傳聞せり、是れ前經驗の前なりしか、後なりしか、余未だ之を聞かず、又曰く、

此頃多くの厭ふべき事に接す、一夜屋外に出づ、天の萬軍は飛ぶが如く……（此間の言を忘る）……我れ基督の道を研究すること、三十年、未だ此時の如く神をわかりしことあらず、

是れ明治三十二年頃？、東北學院講堂に於て、演説せられし所。談片數個を擧ぐれば、

曰く、我は基督の如何なる方なるかを識れり、されども純全の僧凡、可大り

思想なれば、言ふこと能はず、

曰く、或が爲す所には、某督が偕になりて動き居れりと思ふ

（以上二語は、余一人に向ひて語られし所）

曰く、聖人の道は通識なり、

曰く、聖人の道は平凡に歸るに在り、

修業に凝り固まれる人に向ひて曰く『神の道、人の道と異り此奥義を知らざれば、生涯修業の人として終るべし』と、

働に熱衷する人の問に答へて曰く『我等の働きなどは、僧侶が坐禪を組み居ると同じことなり』と。

然るに昨年二月、余が師を見し時には、師いへり『我は未だ曾て我が信念の奥秘を、何人にも語りしことあらず』と、余は未だ師の高さ、深さ、大きさを測り知ること能はず、寧ろ默して止むを可とす。

嗚呼其天稟既に非凡、而して其經歴、修養、亦非凡、而して所謂修養を脱し、神と偕に樂み、神と偕に苦み、神と偕に遊び、神と偕に働く、其心地の容易に窺ふべからざる、亦當然のみ。

（十二）師の大悲大量

青天に霹靂を飛ばし、陸地に波濤を起し、快刀亂麻を斬り、鐵腕、情實を斷つ、火を見ることを避けず、血を見ることを辭せず、英雄クロムウエルは是なり、豪僧日蓮は是なり、一方に悠々無邊の乾坤に、眞如の明月を樂むと共に、他方に慈眼愛腸、迷へる者の爲めに泣く、高德、人の死心を得ると共に、鐵腸鐵腕、堂々惡名を負ふて、改革を斷ずる者、今の日本に於て、一押川方義師あり、此度胃、此手腕は、師が人に憚られ、怖れられ、反對せられ、惡評せらるゝ根源にして、試みに當時の批評の種類を擧ぐれば、曰く、傲慢不遜、曰く、殘酷、曰く、宗教家らしからず、曰く、何、曰く、何、されども師は毫も之に感ぜざるを以て、或る牧師、傳道者の如きは、如何にもして師の名聲を毀けんと欲し、前年、東北學院副院長ホーイ氏が、七千金を强盜に奪はれしことありて、ホーイ氏が宗教家の事として、之を沈默に附し、自己の給料中より、年々之を補ひつゝありしことを種として、一狂言を作り『其時の强盜は、院長押川なり、押川なるが故に、ホーイは之を届け出ることを憚れるなり』といひ、先づ之を東京にて言ひ觸らし初めければ、浮説は忽ち四方に傳播せり、或る人、此事を以てホーイ氏に問ふ、ホーイ氏驚き怒りて、其無實を證し、遂に事明白となりて止む、盖しホーイ氏の家に强盜入りしは、即ち師が洋行中の事にてありしかば、時日の上より、直ちに其無根は證明せられたるなり、而も師自身は、平然斯の如き無禮、不埒、武士道に於て忍び難く、恕し難きほどの醜聞をも、馬耳東風に聞き流したり、後ホーイ氏、師と會し、語るに此事を以てし『誠にお氣の毒なり』といふや、師笑て曰く『假令天地擧つて有罪を證すとも、無罪は即ち無罪なり』と、ホーイ氏嘆じて曰く『大膽なる哉君や』

斯の如き風評を立てたる某牧師等は、同時に師が『神田の某牛肉店の女中と怪しき關係あり』といひ、或は『教員某の妻に横戀慕して其意を遂げ

す、夫某を罷免したり』といひ、これ亦仙臺より離れし東京に於て、あちこち言ひ觸らしたり、所謂『強盜強姦』の評は、斯の如き處より出でたり、而して此甚しき讒誣中傷を事とせし某牧師等は、師が實業界に入りし時、自己も同じく事業に從はんと欲し、師の家に行き、其周旋盡力を乞へり、師前事を以て意となさず、親切に之が周旋の勞を取れり、當時親しく此情況を知りし者、皆師の度量と慈悲とに嘆服せざるはなかりき。

(十三) 美くしき友情

曾て內村鑑三氏の主宰せし東京獨立雜誌に『耶蘇敎界の大山師』と題して、彈劾的記事を載せたり、其要旨は、近頃破產せし某實業家には、三個の寄生蟲あり、一は仙臺の某學院長（師を指す）一は高天原牧師（海老名彈正氏を指す）一は巢鴨の某女學校長（巖本善治氏を指す）なり、云々とて、頗る惡口を並べたり、然れども是れ事實を顚倒せる者にて、此實業家、師が大日本海外敎育會を起す前、韓國視察に赴かんとする時、師の精神に感じ、五百金を寄附せしことあるを以て、師の俠骨なる、今某の窮境に陷れるを看過するに忍びず、周旋して幾万の金を借り、以て一時の急を救ひたりしが、師は其手形に裏書じたるより爲に債務を生じ、非常の損害を蒙り、屢〻家に執達吏を差向けらるゝ程の狀に至りしなり、海老名氏の事は知らざれども（寄生虫ならざる事は明かなり）、巖本氏の如きは、此實業家の家政整理の際、好意を以て、其娘を自己の女學校に學ばしめたるなり、斯の如き俠擧、義擧は、寄生虫となり、山師となりて、彼の雜誌の攻擊を受けたり、而して師は之を知らず、或る時、基督敎界の多士、集會せる處に出づ、一人あり曰く『押川君、君の事が獨立雜誌に出で居るが、見たるや』と、師曰く『見ず』時に小崎弘道氏あり、獨立雜誌を手にす、半ば師を見、半ば雜誌を見る、師之を一瞥して曰く『我

輩の事が出て居るならば、大聲を發して讀むべし』と、小崎氏乃ち讀む、師聽き了り、一笑して曰く『其雜誌を見て、我をかゝる人物と思ふ者は思へ』と。

師歸りて後、書を巖本、海老名、二氏に贈りて曰く『東京獨立雜誌に、かく〳〵の事出で居りたり、我は如何に書かるゝも、妨なしと雖も、君等に對しては、氣の毒なり、君等にして若し正誤せんと欲せば、我自ら其由を社に申送るべきが、如何』と、海老名氏答へて曰く『名譽も君と共に之を受け、誹謗も君と共に之を受く、また遺憾なし』と、巖本氏答へて曰く『余は平生、君の爲めに盡さんことを思ひ、而して自ら盡すことの足らざるを悲む者なり、昨夜も君の事を考へ、徹宵眠ること能はざりしなり、斯の如き事を書かれたればとて、何ともなきなり、余の爲めに勞慮を煩はすこと勿れ』と、かくて正誤文は出されざりき、大山師、寄生虫の名、消えざること幾年ぞ。

余は或る人より此事を傳聞して、自己を師の地位に置き、斯の如き際に、斯の如き心を以て、斯の如くなし得べきかと自問し、或は斯の如くなし得べきも、斯くの如き心を持つことの難きを思ひ、師の度量の未だ及ぶべからざるを感じ、飜つて巖本、海老名、二氏の心を思ひ、其友情の美くしきに感涙を催し、且今の記者等の、更に大に修養せざるべからざることを感ぜり。

(十四) 師の大俠

ヒリッピンのアギナルドが、米軍と戰ふ最中に於て、其副將軍某氏、日本に來り、押川師を見る、常に苦心盡力し、事若し發覺せば、自ら十年位は牢獄に投ぜらるゝことを覺悟し、村田銃十万挺を集め、秘密に船を出して、彼地に向はしむ、或る朝、飯を食しつゝ、時事新報を見る『米國軍艦ヒリッピンの港を封鎖す』との電報あり、師覺えず

大息して箸を下ぐ、夫人驚きて其何故なるかを問ひしに、師顧みて他を言へり。

日本國の救、第二の維新、東洋の救濟は、師が念頭に離れざる所なり、而して斯の如き擧あり、是れ何の故ぞ、評者或は無謀となし、或は冒險となす、然れども僧月照と共に入水せし南洲の心、米の獨立を助けしラーフェットの心を知る者は自ら師の胸中を解せん。

（十五）北淸に於ける師

明治三十三年夏、北淸事變あり、七月、師渡淸す、これより層一層惡評を蒙る、此事に關しては、余曾て或る雜誌に書きしことあり、曰く、

其淸國北京に於ける師の行動の如き、門外者何をか知らん、師は東邦問題の爲めに、死を賭して入淸せしなり、其家族を東都の一友と、仙臺の一友とに托し、而して行きたるなり、（當時此秘密を知りし者、天下唯此二人のみ）

其渡航に先ちて、師は旅費の出處なきに窮しける際、偶然相知れる某商人の渡淸せんとする者に會せり、彼商、師が一切の

巖雲滯在費を負擔するが故に、其代りとして、師が大臣將校等に交あるを機とし、自家商業上の便宜を圖りくれるやう、賴み出でたり、師之を話しぬ、是れ後來、種々の浮評の出つる源泉の一となりしなり、

其軍隊慰問の如き、初め基督教會より、別に人を派せんとせしが、金なくして、未だ其運びに至らざりし、師は當初秘密に渡航せんとせしも此狀況を見聞して、氣の毒に思ひ、自ら進みて『我が仕事の傍ら、慰問をなしても可ならば、我之が任に當るべし』といひしかば、衆皆渡りに船と喜びて　師に依賴し師乃ち仕事の傍、之に當りしなり、

師が彼地に在りて、李鴻章に會し、慶親王に面し、相圖りしことは、極めて秘密なりき、そは當時若し發するときは、忽ち日本の支那通を以て誇る小野心家より妨げらるゝ恐あり、外は諸外國の干涉入るべければなり、而して戰後日本の軍隊が、軍に勝ちたりとて、馬鹿威張をなし、諸外國の着々として戰後の經營に餘念なきにも係はらず、我はたゞ戰勝の夢を語りて得々たるが如きを見、師憤慨一番、某將校を冷罵せしことあり、彼將校の先づ歸國するや、押川の商賣、腐敗ビールの賣りつけ、其他種々の風聞起れり、又入航の時同船して　事を以て師に不快を懷きし政客某が、未だ北京に入らず、天津より引き返しながら、北京なる師の行動につきて面り見たるが如く、種々の風評を立てたり、

爾來惡聞醜評、續々絕えず、師此間に處して平然、聞て聞かざるが如く、知て知らざるが如く、其狀恰も彼の豆腐屋の娘の姙娠を餘いられて、平然其子を養ひたりしといふ白隱和尙にさも似たり、

且師は知友門下の罪名を己に負ひ、共働者の汚名を己に衣せられ、敢て之に甘んじて、毫も之が辯解を事とせざるは、頗る西鄕南洲翁と星享氏とに似たるものあり、是れ師が時々非常の迷惑を蒙る所以にして、又人の死心を得る所以の一なのり、此等の消息は、神經質にして小膽なる、潔癖にして狹量なる、今の基督教會の所謂義人輩の夢想し得さる所なり、

師の計畫せし事は、即ち淸國皇族學校設立の事なり、其李鴻章に會するや、一見李をして知己の感を起さしめ、淸國第一の學者徐芳と會しては、彼をして覺えず感慨の淚を流さしめたり、李は人に向ひて『日本の大人物』として、師を賞め、慶親王の如き、自ら師の寓を訪ふに至れり、

聞く、李と慶親王とに會せんとするには、三百金を要し、百金にては、たゞ名刺を貰ふことを得るのみと、其名刺のみを貰ひて、李に逢ひ、親王に面したり、など誘る者多き際、卒然として來り忽ち斯の如き尊重、厚遇を蒙りしは、亦師が彼等小功名家に嫉妬せらるゝ原因の一たり、又其計畫の秘密なりしは、他の邪推と讒謗とを招くに足り加ふるに某將校の如きあり、某政客の如きあり、風聞傳へて日本國に入るや、平生、師の有力と名望とを嫉む敎界の小人輩、得たりと之に雷同し、附和し、誇張し、更に揑造するあり、曹參の母も言ふこと三たびすれば、其子に疑を起すに至りし如く、敎界内の名士も、沼々として所謂『押川の不都合』を信ずるに至れり、

此際師に對する信任を動かさざりし者、東都の名士に三四名、仙臺に二名ありしことを知る、聖能く聖を知り、義能く義を知り、英雄能く英雄を知り、俠者能く俠者を知る、此意味に於て、余は此數名を敬重すること深し。

（十六）學院長辭職

師彼地に在りて、京北熱を病むこと二回、幸に

して癒え、三十四年五月、歸朝す、其前後に於ける、一部基督敎徒の擧動、如何に野卑醜劣なりしかは、余之を記せざるべし、師の大慈洪量、之を念頭に置かず、之を口外に發せず、余豈師に逆ふて、之を摘發するを欲せんや、たゞ斯の如き師は『墮落者』たり、斯の如き敎徒は『多年宿志を變ぜざる大傳道者』たり、世評は則ち斯の如きことを叙して止まんのみ、

師、仙臺に來り、直ちに東北學院長を辭す、副院長シユヰーダー氏は、親しく師の感化に接せし者、切に思ひ留まらんことを請ひしも、師聽かず、却てシユヰーダー氏を勸めて院長たらしめ、『然らば名譽院長に』といふをも辭し、僅かに『顧問』の名を諾し、仙臺に於ける二十餘年の事業を擧げて盡く他人に讓り、單身空手、飄然として東都に歸れり。

* * *

師、實業界に入る、紛々たる世評は、更に師に加はれり。

(十七) 人謀と天意

是より先き、憂國の志士、日本政界の根本的改革を希望し、師と星亨氏との會合を圖る、當時星氏の政界に於ける、沖天の勢力あり、若し師に感化せられて、其精神一變するに至らば、幸なるべく、師の意志、經綸、亦星氏の手腕、勢力によりて、政界に施さば、頗る都合よかるべしとの意に出づ、相會するに及びてや、師も星氏を喜び、星氏も亦師の人物に感じ、相携へて將に新運動を開始せんとせしに、三十四年夏、星氏に對する伊庭想太郎氏の一擊は、此計畫をして、一夢に歸せしめ畢んぬ、

蓋し師や、其經綸湧くが如き點に於て、其機を知り、機を作り、機に乘ずる點に於て、其の强膽なる點に於て、其惡名を負ふて所信を斷行する點に於て、知友、門下の罪名を身に衣せられて、辯解などせざる俠骨に於て、人に畏怖せらるゝ點に於

て、機鋒の銳利なる點に於て、頗る相似たる所あり、若し相合して革新の事に當らば、如何に壯快なりしならんに、一閃の匕首は、此未演の筋書を寸斷し去れり、諸葛武侯曰く『事を謀るは人に在り、事を成すは天に在り』と、信なる哉言や。

(十八) 師の現在と將來

師今や實業界に在り、本多庸一氏、深く師の爲めに惜む、屢〻往きて、宗敎界に歸らんことを勸む、師應ぜず、一日、本多氏、師を見て曰く『若し斯くの如くなし居る中に死なば如何』と、師笑て曰く『死なば葬むるまでなり』と、本多氏曰く『君の强情には驚く』

其他敎界の諸名士、師の爲め、傳道の爲めに惜むと雖も、亦奈何ともすること能はず、

巖本善治氏、師の近狀を評して曰く『あれ程の人物は、吾々の忠告する位の事は、疾くに自ら知り居る者なり、知て而して斯く爲す、爲すだけ爲さざれば、止まざるべし、余は押川君の今の事業が、失敗すると、成功するとに係はらず、其技倆を養ふ上に於て、非常の效果ある、べしと思ふ、既に今日に於て、政界に立たしむるも宗敎界は勿論）決して匹敵する者なき程の技倆を有せり』と、

齋藤千生雄氏曰く『新島氏沒後、天下の衆目は押川氏の上に注げり、東北學院の院長として、根據を仙臺に据え、時々全國に巡回傳道せば、是れ日本基督の各宗派の、無名の法皇たり、其道、其德、其辯、其力、誰か之に匹敵せん、氏豈之を知らざらんや、知て而して其地位、名望を乘つかと、蔽履の如く、而して雨の如き惡評中に事業家たり、豈將來何事か期する所なくして然らんや』と、

某氏あり、遙々中國より出京して、滔々師が實業界に入りしことの不可をいふ、師微笑して曰く『ナゼ商賣するのが惡いまー』と、某氏答ふること能はず、低頭して歸り去る、將軍の西鄉、農夫の西鄉、心地異る所ありや、布敎の師、商賣の師

靈臺相違する所ありや、此平々凡々たる師の應接は、現在の師を盡して遺憾なし、

然らば師が將來は如何、師は何故に大なる名譽を放擲し、甚だしき惡評を甘受して、一意金儲けに從事するか、何が爲めに、何を企てんが爲めに如是の境遇に在るか、竟に之を解ずる者なし、青柳有美氏曰く『押川方義は、偉人たり、豪傑たると共に、又一大怪物なり、代數學に所謂未知數なり、Xなり Yなり Zなり』と。

（十九）師に對する批評

大隈伯爵、嘗て人に向ひ、師の事を語りて曰く『其考ふる所、謀る所、遠大にして測り難きものあり』と。小村外相曰く『喰へない人間なり、人をヤリ込めることが上手なり』と。巖本善治氏曰く『近世の傑士』と。新井奥邃氏曰く『押川氏は重もに破壞力を有す、其破壞の力は、日本廣しと雖も、其右に出る者なかるべし』と、又曰く『今日押川氏在り、國家人無きを憂へず』と。三宅雄次郎氏曰く『押川を律するに、世の常の規矩準繩を以てすべからず、押川は其質の甚だ太き者なり』と、本多庸一氏曰く『交友の感化中、余は押川氏より受くる者多し』と。海老名彈正氏曰く『日本に於ける基督敎徒中、最も基督に近き者は、押川氏なり』と、又或る人に語りて曰く『押川といふ人は、不思議の人間にて、余は屢〻彼と共に演說し巡りたることありしが、其度毎に、何か一つ益を得ざる者なかりき』と。松村介石氏曰く『現今日本の基督敎界中、大物といふ點よりいはゞ、押川の右に出る者、恐らく一人もあるまじ、今の社會には、大き過る人物なり』と、又曰く『若し彼に持たしむるに、五六十萬の金を以てせば、日本を顚覆すべし』と。某氏曰く『今の世、之と共に神智靈覺を談じて盡き難き快味を覺ゆること、押川に如く者なく、之と共に政治を語りて能く要緊を得ること、押川に如く者なく、之と共に金儲

けの事を計りて計策自在なること、押川に如く者なく、而して又之と共に綿々絲よりも細き情事戀愛を語りて、能く解し能く察し能く與することは、押川に如く者なし』と、某氏曰く『洗禮を受けたるナポレオンなり』と、某氏曰く『押の強き人間なり、押川の押の字は押の強さことを意味す』と、青柳有美氏曰く『之を古英傑の中に求めなば、我が方義はまさしくマホメットに酷似せる者にして此種の人は今の日本上下の全社會を通じて、一押川方義の外に其類あることなし、聖オーガスチン嘗て宇宙主宰神の性質を論じて、神は其圓心を行く處として見出さゝるなけれど、其圓周は遂に何れの處に行くも見出し難き圓に似たりといへり、我が方義を捕へて之を知らんとする者、又此感なくんばあらず、其圓心に似たる者は、我が方義の何れの性質に就ても之を看るを得れども、其圓周らしきものに至りては、甚だ茫漠として遂に際涯を知るに由なく、其何れに終るかを見出すに苦む、故に評して、たゞ其混沌として偉大なるを知り、峭峭として多面なるに畏服し、豫言者にして能く爲政家たり、將軍たり、商賈たり、詩人たり、色師たりといひ得るが如きに過ぎざるのみ、云々』と、故新島襄氏、嘗て松村介石氏に語りて曰く『我れ日本に於て始めて畏るべき人物を見たり、そは押川方義なり』と、故片岡健吉氏、嘗て余の知人に告げて曰く『押川氏は英雄なり』と。李鴻章、星亨、二氏の如き、一面識にて、師の人物に感じたる者なり、

諛つて滔々者流の惡評を聞けば、曰く、惡魔、僞物、强盜、强姦者、山師、墮落者、傲慢、殘酷、喰せ物、寄生蟲、役者、好名譽家、策士、虛言家、演說使ひ、獨活の大木、其他一々枚擧すべからず。

（二十）餘論

余に問ふ者あり、曰く、押川氏は酒色に溺るゝといふ評あり、如何と、余答へて曰く、若し余を、

移して、師の境遇に置くも、余斷じて溺れず、余は函館に於て、自己の道力如何を驗し、其然ることを知れり、況んや余より遙かに高く、深く、且大なる師に於てをや、古人いふ『水に入て、長人を見る』と、短者、短見を以て、妄りに長者を評すべからざるなり、

師や其深奥なる悟道に於て、其人物を知るの明に於て、其經綸の才に於て、其愛國心に於て、其包容の度量に於て、其膽氣に於て、其同化力に於て、其死心を得ることに於て、其雄辯に於て、其戰鬪力に於て、遙かに群を拔き、倫を絶す、若し之を以て、今の敎界に戻り來らしめば、各派を包容、統御し、以て震天の運動をなすに足るべし、本多、横井、松村、戸川の諸氏が再び師を敎界に引き戻さんと欲するも、亦宜なり、而して師の今に於て出でざる所以は、余之を知れり、師に聞かずと雖も、知り得て誤無きことを信ず、

然らば余は、師が永く實業家たることを喜ぶ者か、曰く否、余は日本將來の精神改革、及び第二の維新を思ふ時、一押川師の人物を除きて、考ふること能はざる者なり、

曰く、然らば何ぞ師に說く所あらざる、曰く、神を信じ、國運を信じ、師を信ず、また其必要を覺えず。

又人あり、曰く、押川氏、若し斯の如くして死せば、豈遺憾ならずや、他の孜々傳道に敎育に務むる者に劣らずやと、余答へて曰く、何をか劣るといふや、師が今までの働を以て、現今幾多の宗敎家、敎育家に比す、何人か師に及ぶ者あらん、殆んど獨力を以て、東北傳道を開始し、萬衆を導き、學校を創立し、人材を養成し、數十の門下、出でゝ傳道と敎育とに盡し居れるに非ずや、而して他の多くの人物は、活氣漸く衰へ、未來の運命既に定まれるを見る時に當り、元氣愈々鬱勃、人をして將來如何なる新運動を開始し來るか、或は風塵の間に、惜むべき死を遂ぐることあらざるか

を想像、懸念せしめ、毀譽紛々として、其身邊を圍繞する者、是れ豈師の偉大なる所以に非ずや、既に筆を擱かんとす、友人傍に在り、曰く、君の押川氏に對する盲信に非ずや、心醉に非ずや、好む所に僻するに非ずや、過褒に非ずやと、余曰く、我が眼中、押川無し、無き所に歷々として押川方義師有り、心神虛明、豈盲目ならんや、文士筆を執る、親疎なく情實なし、拙評たとひ今日の嘲笑を買ふことあらんも、百年後、知音の讀んで而して案を拍つ者あらんことを信ずと、

天地晴明、富岳我に對し、我れ富岳に對す。

蟲籠

（十三）雪ちやん

神戸攝海碧濤

雪ちやんは尋常三年生、九歲、唱歌はいつも先生より褒めらるゝ所也。

ある日曜日の朝、金が田舍新聞の判じ繪を考へ居りし處へ、雪ちやんはお垂髮に長いリボンを結び、被布の袖をいぢりながら訪れたるに、早速と金の字に濁り點を添たるを指して、

『雪ちやん、是れは何といふ字？』

『金といふ字よ！』いと得意氣なり。

『イヽエ』

兩頰に紅さして、仰ぐ樣にして、あの、

『未だ漢字に濁點をつけたのは習いませんの！』

（十四）雪雄さん

滋賀縣　秋田生

雪雄さんのお母樣、此の程、この可愛い〳〵五つの坊ちやんを殘して、遠い〳〵國へゆき給へり。

ある日お祖母樣に伴られて墓參しぬ。程經てお祖母樣、

「坊やもう歸らうよ」

雪雄さん、何と思ふたか「坊やは茲に居る！」

「なぜ？」が暮れると、幽靈が出るよ、サア歸りませう」

雪雄さん元氣なもので、「坊や幽靈なんぞこはくないよ、お母樣が茲に居らつしやるもの」

かくと聞き給へるお祖母樣、思はず袖ぬらし給ひぬ。折柄、手向の花のゆら〳〵と肯づくこと三度。

戰時雜談

軍國逸話

無名氏

戰へり、勝てり、擧國の士氣悉く盛なりとは、今日この頃に於ける我が國の有樣なるべし。ここに題して『軍國逸話』といふ、敢にて古昔に於ける軍國の逸話を述べんとするにはあらず、現に目下互に砲火の裡に相見えつゝある此の日露戰爭の過去期に於て、幾多世間に喧傳せられし各方面の逸話を軍國の紀念に集めしものなり。

世人往々云へらく、事實は小說よりも面白しと。若し夫れ此の軍國逸話にして、多少なりとも會員諸子が興味を呼ぶことあらば、これ事實の面白みなり。文を離れて事實の面白みなり。然り、事實は小說よりも面白ければ。

▲悲壯の最後……（梶村候補生）

「謹で平素の御敎訓を守りて出發仕候、不及ながら武士の一分は相立て可申候」

これ、二月十日旅順の海戰に於て名譽の戰死を遂げたる、初瀨艦乘組少尉候補生梶村文夫その人が征露の軍に從ひ同艦に乘組みて佐世保を出發するに臨み、その嚴君に宛てゝ投じたる葉書の文句の一節にして、まことに二十四歲の靑春を修羅の巷の風に散せし梶村文夫その人の絕筆なり。

梶村候補生が名譽の戰死を遂げつる樣のいかに痛快なりしぞ。新紙は傳へて曰く「當時文夫は下甲板監督の任務を帶びつゝありしが、旅順砲擊の終期に於て敵艦より發射したる十二インチの砲彈艦の後部に命中して爆發し、大破片飛んで文夫の左臀部より陰部を貫通せしかば、彼は倒れざまに『殘念！露スケー』

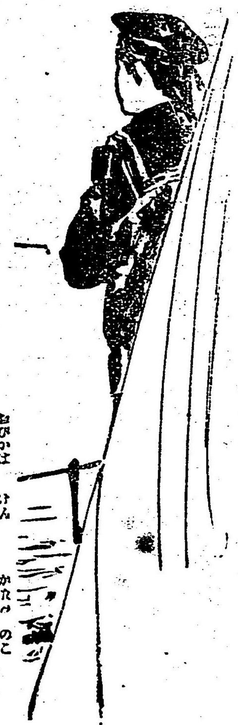
と大喝し、傍に在りし岡田少尉が隙さず抱き起せる時、創水の如く迸り出づる流血を眺めながら

『己の睾丸を拾つて來い』

と絕叫したり。病室へ舁き込まれても猶は

『靴は脫がすな、今一度行く』

と叫び居たるが、終には虫の息となり、やう〳〵聞き取り得る程の聲にて『名も初瀨、いくさもこれが始めなれば、後れは取らじ國の御爲に』と辭世を云ひ、大出血の爲め、治療を加ふる遑も無くして絕命せりとぞ就けて云ふ、文夫は筑後久留米篠山町士族梶村廣人の二男にして、その兄土方清は現に陸軍步兵大尉たりと。わゝ、名も初瀨、いくさもこれが始めなれば後れは取らじ國の御爲に、三誦の值ありと云ふべし。



▲筺の帶皮……（三浦中尉）

同じ旅順の海戰に於て、梶村候補生の名とゝもに忘すべからざるは海軍中尉三浦容夫の名なり。彼は逆捲き立てる旅順沖の荒浪に、富士艦上左舷のチッチングに屹立せるまゝ、敵彈の爲め海中に拂ひ落され、焦げたる帶皮と鋲とを筺に殘しつゝ分隊長心得として名譽の戰死を遂げつるなり。いかに其の最後の潔かりしことよ。

彼は舊水戶藩士三浦强の長男にして、祖父義雄は町奉行を勤め、烈公より義の一字を賜りて名乘の頭に戴き、維新の際義を全うして殉難したる人

なりと云ふ、容夫氏は今年二十七歳、十九歳の夏中學校を五年級にて去り海軍兵學校に入り、卒業の後、少尉候補生として軍艦比叡に乘組み、遠洋航海の後、天龍艦に移り少尉に任ぜられ、横須賀無線電信研究所に入り無線電信を研究し、數ケ月にして之を卒業し、中尉に昇進して軍艦淺間に移り、一昨年英皇の戴冠式を祝すべく、淺間艦を英國に航せし時は、同艦の無線電信を司りて敏腕の名を得たりと。

氏が富士艦乘組を命ぜられしは昨三十六年七月のことにして、專ら艦首に在りて、スターボードサイダーに任じ、十二月三十一日に至りて分隊長となり、遂に此の旅順の海戰に凄絶壯絶なる戰死を遂ぐるに至れりとぞ。

去る一月の末、その友人の一人、佐世保に氏を訪ひし時、氏は切りに冷水を大盃に盛りて滿引し恰かも酒を飲むかの如く見ゆるにぞ、友、その故を問ひしに、容夫微笑しつゝ答へて曰く。

『時局は切迫しました。身體を大事にしなければなりません。酒は止めました。』

と。こゝに於て、友人、彼の肩を叩いて

『金鵄勳章だよ』

と勵ませば、彼は確と打ち首肯きさ

『待つて居なさい』

待つて居なさいの一語、何ぞ其の壯なる。

三浦容夫氏

あゝ我が富士艦上に遺しつる、焦げたる帶皮と劍これぞ容夫氏が英名を竹帛に垂るべき唯一の紀念にして、金鵄勳章そのものよりも、遙かに遙かに

優れる月桂冠は、既に氏の上に自然の手により捧げられつゝありと知らば、氏も瞑すべきや也。

▲鮮血一里……（鯨の兩斷）

淺間を旗艦として、高千穗、浪速、千早、千代田、その他水雷艇八隻より成る我が艦隊は、運送船を護衛しつゝ、去る二月八日午後四時、韓國仁川港に入港せしが、こゝ航海中、彼の日淸戰爭の折、黃海の戰に於て、瑞鷹檣の上に止りたる軍艦高千穗が、巨鯨を兩斷して戰捷を卜せし珍事ありけり。

そを如何にと云ふに、該高千穗艦は、他の諸艦といもに某地點に進行しつゝありしに、忽ち前面に當り、二十間あまりの巨鯨游泳し居りて、我が艦の進行するをも知らざるが如くなりしかば、多くの艦員も如何に成り行くことやらんと、しきりに注目し居たりしに、艦は少しも頓着せず、全速力を以て、眞一文字に進行したれば、何かは以つて堪るべき、艦の衝角は忽ち鯨の胴躰を、グサとばかりに鋭く衝き立てたり。

かくと見るより艦員も勇み喜び、眞二つにせしと思ひしに、さはなくて、さしもの巨鯨、二つに斷れず、凄じき勢にて、尾を振り立て暴れ居たるが、艦はそを衝き掛けたるまゝ、更に構はず進行を續け居たることゝて、鯨は遂に殆んど兩斷の姿となり、次第〳〵に左舷に廻りて、艦尾の推進機に纏り、機械の運轉を妨ぐるに至りしより、高千穗は止むなく速力を緩め、諸艦に對して

『鯨を突きて兩斷す』

との信號をなし、鯨の離るゝを待ちて、前の速力に復したるが、艦尾一海里の間は、悉く鮮血をもて染められ、折りしも夕陽將に沈まんとする時とて、反照波に映じて一段の光景を添え、思はず身の征途に在るを忘れしめたりとぞ。

▲港口の封鎖……（稀有の大計畫）

第三回の旅順口襲撃に於て、我が帝國海軍は港口封鎖てう、世界海戰史に比類多からざる大計畫を致せり。

抑も港口の封鎖とは何ぞや。敵國の港口を閉塞してその港中に在る軍艦をして出づること能はざらしむること之れなり。一概に封鎖と云ふも港口に水雷を布設するもあり、港口に障害物を沈沒せしむるもあり、また艦隊を以て圍繞するもありて自ら一ならずと云ふ。

決死隊の一人
山賀大機關士の筆蹟

之れを歷史に徵するに、彼の米西戰爭の際にはメリマックと呼ばるゝ石岩船を西班牙艦隊の潜めるサンチアゴ港口に沈沒せしめ、之れを封鎖せんと試みしも、目的を達する能はず。爲めに遂に米國艦隊十一隻を以て港口を封鎖せしがこの封鎖は一ヶ月の長きに及びしとぞ。

我が豪膽なる東郷聯合艦隊司令長官は、このメリマック號のそれの如く、數隻の汽船を自ら港口に沈沒せしめ以て旅順口に於ける敵國の艦隊を封

鎖せんとの策略を繞したるなり。而して此の計畫を成就する爲めには、第一に沈沒すべき船、第二に此の慘憺たる任務に就くべき決死の士の人選の必要あり。

此の慘憺たる計畫を實行せしは、實に去ぬる二月二十三日の夜半なりき。而して沈沒に使用せし老朽汽船は……?、曰く仁川丸、曰く天津丸、曰く武揚丸、曰く武州丸、曰く報國丸、而して之れが任に當りし決死の人々は、あゝ此處に云ふに忍びざるなり。唯だこゝに一言すべし、曰く、此の決死の士の人選を爲せしは、薩摩隼人に其の人ありと知られたる豪のもの、その情に篤きことは宛ら老西郷の如く、此の人の一言には、如何なる士卒も喜んで死地に就くを敢てすと云はるゝ有名なる人望家海軍中將上村彥之丞氏なりきと。

▲死處を與へよ……(杉機關士)

決死隊の一人、軍艦常磐乘組み、(海軍少機關士

軍國逸話

杉政人氏は、その身体壯健なりと云ふにもあらずその容貌亦た衣骭袖腕の隼人のそれの如からず、而かも其の學窻に在るや、常に俳句を嗜み、業餘春花秋月に想を行るを以て樂みとしたるを以て、學友の多くは氏を目するに一箇優柔の青年を以てしたりと。然れども安んぞ知らん、これ大空に高翔せんとする鵬雛の暫時羽翼を養ふの時ならんとは。氏、その出征前在京の一友に書を與へて曰く

如何なる攝理の我が國に降され居るかは、小生等の知るところに之れなく、又た成敗は毛頭小生等の頭には之れ無く候。併し思ふ處を爲し、刀折れ矢盡きて潔く瞑目一番する、これ丈夫の本領に之れ無き哉。

近日の事、云ふだけ野暮に候、男子云ふべくんば、宜敷反響あらしむべし、男子行ふべくんば宜敷何かの痕跡を殘すべし。世に耿々の議、諤々の論隨分少なからず候、しかして得たる反應は如何。

蒼華は常に荒波洗ふ荒磯に爪を磨き居り候。この時に當りて、小生の云ふべきことは唯だ一つ現下の狀況、万事口にて立つべきにあらず、唯だ腕あるのみ。而も自己の腕あるのみ。

あゝ君よ、驚天動地の活劇目捷の間に迫る。幸に好箇の死處を與へよ。遠く別離の情を致す。

と、古人曰く、

『絶快の大業を爲すものは放言壯語の人に少くして、寡言默行の士に多し』

と、氏の如きは即ち其の人なるべきか。

Firing Courage
but Dead Calm!
Be Smart
but Cautious!

杉機關士常磐艦壁上の銘

氏その乘組める常磐艦の壁上、英文を以て自ら銘して曰く

"Japan expects every men
to do his duty!
Firing Courage
but Dead Calm!
Be Smart
but Cautious!
Die the men's death!"

（日本人各人に、義務を果すべきを期望す！
勇敢なれ。されど
沈着なれ！
活潑なれ、されど
細心なれ！
男らしく死せよ！）

＊　＊　＊　＊

冥想半世紀

大塚素江

緒言

吾が邦、曩には征清の事あり、今又露國と事端を搆へ、遂に干戈相見ゆるに至れり。私に惟みるに、

今上神武、回瀾の玉手一たび下りて、東海の逆浪倏ちをさまり、波光万里、日出る國の稜威洽く八紘に加はるに至らんは、まさに近きにあるべきなり。市井の布衣亦倖いに、今日のよき日にゆきあひて、心勇躍して、云ひしらず。爽かなる氣自ら迸りて、舌頭聖明を頌するの聲となり、病軀據鞍の素望成らず、兀座徒らに毛錐子と談ずるに至れるを慨く。羨望す幾多の將士、新たに佩ぶる寶刀の由來、いざ語らんかな五十年の昔がたり。今ぞ鯨る洋夷の血、烈公地下の破顔、國士九泉の抃舞、什麼如何ばかりならんかし。

冥想半世紀、世は如何なる代なりしぞ。外、戎夷の威嚇に窘み、内、王幕の反噬に遑なく、國士起ち、志士殪れ、紛々又擾々、社稷の安危澎湃の洋上に委せられ、一波は更に一波より急なるものありしは、事情に於て異る所ありと雖も其の境遇に於て、現下の支那朝鮮と相距ると啻に百歩ならんのみ。而して支那朝鮮の當來に期待するに、吾が邦今日の隆運を以て擬するを得べきや否やは玆に云はす、狂瀾將に倒れんとするに回してより、玆に未だ一世紀の半ならず、夢ばかりなる逢遭の年所皇國の礎臺を凝らし、稜々たる大日本帝國の聲威、重く洋の東西に加はるに至りし所以のもの、抑も何に由りて然るか。元より國民の志氣操持に負ふと雖も、將又國士精勵の賜賚ならずとせんや。參酌冥想、吾が邦今昔の泰否に鑑み、更に支那朝鮮の現情に想到すれば、邦家興亡の因に於て、兵庫囷倉の盈虛以外更に自ら會心の境あるべし。予は玆に

這箇の解說を得んが爲めに、青年讀書子に對ひて、吾が近世史を敷々するの迂を爲さず、直ちに當年の國士の口を藉りて、五十年の往時を語らしめ、ときに私見を挿みて、以て諸子に冥想の好資料を供へん、諸子それ靜座して、大人風發の言議に聽き、蹉跎奮興、志氣の消長する所、其の偶然にあらざるを覺らば、共に俱に、額を叩いて古大人に謝せよ。

古賀煜先生 **擬極論時事封事**（漢文以下同、）

謹みて按ずるに、神祖而來、賢子肖孫、繼々承々、以て殿下に迄ぶ、十有一世、黔黎人安、夷蠻悅服、緜祀二百、未だ曾て風塵の虞わらず、金甌の安、諸を泰山に譬ふ、四維の張、實に振古未だ有らざる所、西土の絕えて無き所、盛んなりと謂ふ可し。

時俗淫靡惰弱、又既に邊境の事あり、北より、南より、警報飛來して困頓の耳朶を打ち、巷談街說、オロシヤ黑船の語を絕たず、人心惘々として、行く雲の風に惑ふ、天下奚ぞ泰山の安に居らんや。寧ろ傲岸を以て士人の本色と思惟せる、直情勁行の儒士をして、胃頭まづ如此訣辭奸言を駢麗せしむ、其の意蓋し後段と相俟ちて褒貶の至を極むるにあり、抑揚の巧照應の妙、巧は即ち巧、妙は即ち妙なりと雖も、亦更に一方より觀れば、嫁いじめする姑の口吻にさも似たる、意地くね惡しき云ひまはし、操行ある儒士の人格を卑からしむるなきか。過ぎたるは猶及ばざるが如し、畢竟文華を過重して、其の實を傷ふ、漢文修辭の餘弊、先生をして亦、文の爲めに文を作りしが如く、徒らに華法に拘泥して、却て言外稜々の意氣を害はしめし感あるは、先生の爲めに惜む可きなり。但し此れらの事、或は予一已の偏見ならんか。

殿下承緒の重き、既に彼の如く、守成の烈又此の如し、一天其所を獲ざれば、尺地も其の有にあらず、臣庶將た殿下の爲めに之れを耻づ、況んや焉より甚しきものをや。

初めて其の謂はんと欲する所を謂ふ、意昂り、辭森たり。儒生一管の筆能く臺鼎の重きを弄ぶ此の如し、將軍帳前の書矛まさに鳥觜を刺すなるべし。

乃者、醜虜猖獗、其の蜘豕の心を逞ふし、丙寅の秋、入寇の唐狄、積聚を焚絕し、戊人を虜略す、前二年の夏、再び蝦夷諸島を破る、守吏風を望みて遁れ、軍資器械、委置して山の如く、悉く彼れに竊有せられる、去年の秋、又計を以て崎陽を掩擊す、我が不意に出で、寸兵を勞せず、一鏃を費さず、蠻邸の質人を刼め、多く畜獸を抄略して歸る、肥前侯大國の君を以てして、杜門禁錮俘囚の若く、曾て敵の一旗を搴き、敵の一卒を馘り、以て怨を雪ぐ能はず、祖宗の深耻、社稷の大斁、何か茲に加かんや。

假武日久しく、悠遊之れ事とし、旦暮酒色に荒淫して身神共に傷れる當時の諸侯、多くは、眼劒光を見るを恐れ、耳鼙聲を聞くを怖る、手わりと雖も擧ぐるに力なく、足わりと雖も踏むに懶うし、徒らに民庶の供物を糜して何等の靈驗なき、曾其の偶神と異る所、更に嬌々を幸するにあり、陣頭戈を横ふの風流、元より渠儕の與る所にあらず、掃虜の事得て望むべけんや、國士の發憤推して知るべし。

臣私心竊に以爲らく、天下の事既に已に此に至る、意ふに朝廷の上、必ず應さに纓を請ふの士有るべし。封彊の臣、必ず應さに元を喪ふの志を存すべし。如之何、外には諸侯鎭撫使士馬を率勵して以て王の愾る所に敵する能はず、內には公卿貴臣明かに措置を建て、以て天下の勢を回す所ある能はず、下百司庶職の賤に逮ぶまで、皆偸惰苟安容身保家の計を存し、一人の國家の爲めに、忠赤を露はし報効を展ぶる者無く、宗社の孔耻國家の巨變を度外に置きて問はず、賴だ殿下獨り英武特

出、大に有爲の資を懷くも、亦更張改正して以て天下に幸する所ある能はず、晏安以て目前を超過するを希ふ、臣天下の禍底止する所を知らざるなり。

主人晏起して小僮門を掃はず、亦落葉を焚きて一陶の風流を恣にすることを爲す、爵金牀裏の白面郎君、香夢暖かに痴蝶と化して、ひたぶるに天なる露に醉ひて可なり、唯夫れ邦家の存亡を奈何に爲べきか。

臣史籍を歷覽するに、古來大亂の作る、未だ至盛大安の時に出でざるは有らざるなり。蓋し承平日久しく、網維紊亂す、諸を強健の人に譬ふ、生平閨房度を失ひ、脆美過慶情を傷り脾を戕ひ、然る後發して癆疽の屬と爲る、敗爛四潰して救ふ可からず

國手を俟ちて而して後始めて救ふ可し、先生も亦刀圭自負の人。

故に梁の武帝江南に雄據し、國家の全盛五十年なりしも、卒に侯景の禍を招げり。唐の明皇在位四十年、開元の治、蹤を貞觀に比ししも、而かも終に安史の亂を致せり。建中宣和亦趙宋郅隆の日たり、而して女直馬を汴河に飲へり。今國家治平の久しき宋に踰え、唐に踰ゆ臣の尤も寒心慟懼する所以なり。

所謂天下の憂に先ちて憂ふるもの、眞に之れ國士の慮なり。

其の所謂安史女直なる者は、特に邊鄙の一將塞外の小夷のみ、之れを制する宜しく易々たるべくして尙ほ猶ほ此の如し、今鄂羅斯土地の廣莫我れに三十倍し、人衆の夥夥我れに三倍す、此れ其の備禦憂々乎として難からずや。夫の賈生孝文の君に事へ、盛漢の隆に丁り、其の上る所の治安策を讀むに、今天下の勢方に病瘉又炎熱に苦む、又曰く、火を積薪の下に措く、火未だ燃るに及ばず、因て之れを安と謂ふ、天下の勢奚ぞ以て此れに異らんやと、卒に果して七國の亂有りき、賈生の言未だ過甚しと爲さず、智士の事を慮る當に此の如くなるべきなり。

謂ふ所一の奇あるなく、一の妙あるなくして、而して百の用自ら其の中に存す、至言の世に於ける、猶ほ粥の人に於けるが如きか。

今强虜陸梁、大邦讎を爲す、火已に燃ゆ、群下尸素百性離心病已に深し、賈生をして今の時に生れしめば、臣其の痛哭流涕長大息するに止らざるを恐る。

此の言を爲す人、亦當痛哭流涕長大息するに止らず、慷慨激切言々血書を見るが如し。

臣誠に憤懣の至、內心に切にして、自ら其の疎賤を揆らず、敢て策十事を以て言す。此れ皆書生の常談、未だ必ずしも用に適せず、惟殿下人を以て言を廢てず、且つ其の間に去取して行事に施すあらば則ち幸甚々々、臣激切に任へず、屏營戰惶罪の至るを待つ。

兒孫豚犬徒らに武將の重器を擁し、遊惰淫逸精悍の士氣を變じて輕佻の俗と爲す、有司狗鼠亦香餌を貪り倨然として內に望む、然れども一旦洋夷の睚眥に會ひては、狼狽慴伏手足の措く所を知らざるに至る、膽氣一世を曠ふするの士、身親ら其間に見其の間に聞く、奚ぞ晏如として閑庭に落梅を數ふるを學ばんや、沒奈何將軍營裡帷幕深く垂れ、滿腹の經綸以聞するに術なし、悶々禁せず、酒を呼びて豪語し、毫を嚙みて文を呵す、火の如き其の言、血の如き其の文、盛んに一世の士氣を鼓舞振作して、遂に維新復古の東道となれりき。先生もと朱子學派の人、而して尙ほ此の言を爲せりしを見れば、學もと志氣に裨ひありと雖も、志氣唯其の人にありて存するを知る、丕なるかな志氣や。吾が邦夙く既に已に半世紀の過渡に於て、其の能く現下の朝鮮とならざりし所以のもの、畢竟亦茲に負ふ所なり、再言す、嗚呼丕なるかな志氣や。

策十事（綱目のみを擧げ細註を省く）

一曰、開言路、以防壅蔽。
二曰、講武事、以振士氣。
三曰、備火器、以奮威長。
四曰、習水戰、以神武備。
五曰、殿軍法、以作暮氣。
六曰、省冗費、以贍國用。
七曰、愛百性、以絕怨萌。
八曰、封諸侯、以守北陸。
九曰、教蝦夷、以省戍卒。
十曰、論和親、以定猶豫。

海防策

安井息軒先生（一を省く）

戰士は田なり、器械は種なり、進退奇正は耕耘の術なり、三者既に具り、然る後戰得て言ふ可し。今我が特みて以て虜を輕ずる所のもの獨り戰士の精に非ずや。夫れ戰士既に二者の本たり、是れ誠に特む可きなり、然れども今の特む所、恐くは特むべき所に非ざるなり。

外患既に邊境に壓下し、王佐の才尚ほ未だ出でず、邦內擾々として統率の節制ゐるなく、將士俳徊礙聲震ひて肝膽落つ、何ぞ以て軍國の大事を托するに足らんや。

在昔平氏の諸源を誅しし、戰士嘗て精しかりき。奢侈驕惰二十餘年、源右府の東に起るに及びて其の兵既に用うべからず。駿河の役、齋藤實盛の東人の勁弓巨鏃を說くや、聽く者皆色を失ふ、怯氣の襲ふ所翩聲に驚きて敗走するに至りぬ。今日昇平の久しき平氏に十倍し、而して黠虜の大熾神礙特に勁弓巨鏃のみならむ、參伍して之れを考ふるに、未だ其の特む可きを見ざるなり。

其の特むべからざるもの亦特まざる可からず、邦家の前途夫れ危いかな。

方今海內國を稱するもの二百六十有五、大小を通じて之れを計れば、一國の兵二千五百を下らず、則ち諸侯の養ふ所固に已に六十六萬餘人なり、而して旗下の士は與らず、之れを增すに游俠鄉勇を以てすれば、兵足らざるに非ざる也。

土偶百萬一醮以て毀つ可し、師の銳は戰士の衆に非ざるなり、特に其の特む可き所のもの、唯夫の死族沖天の氣魄にあるのみ。

獨り憂ふ、此の六十六万の士、深仁渥澤の中に生長し、衣は其の美なるを衣、食は其の甘きを求め、起臥動止其の安佚を求め、廣祿の入以て自ら給するに足らず、即ち日夜の奔走する所、以て其の欲に適するを求むるに非ざるは莫し、是に於て偏強勇敢の氣變じて輕巧圓熟の俗と爲りぬ、而して我れ猶ほ之れを待つに慶元敢死の士を以てするは、是れ猶ほ秋を舊田に望みて、而して其の變じて滄海と爲りしを知らざるが如き也、故に今日の計士氣を勵ますより先なるは莫し。

二百餘年座して廩祿に食み、皷腹便々、昇平に謳歌す、而して其の一日の用に方り、周章錯愕其の爲すべき所を知らず、無端識者をして士氣の銷沈を慨かしむ、當時の班士にして、其の能く國家の鼠たらざりし者、眞に夫れ幾千人あり

しや。

今夫の山野の民朴にして淳、愚戇にして詐らず、其の材用うるに足らざるなり、然れども盜賊中に發すれば挺を執りて起ち、其の身を殺して顧みざる者あり、而して市人は即ち之れに反す、何となれば、則ち淳朴愚戇の氣其の發するや必す勁し、然れば則ち士氣を勵ますの術、亦彫琢反朴に在るのみ。

劍を作る必す鐵鑌に俟たざる可からず、鑌したがつて獲ば、劍亦したがつて得可し。

且つ我が祖宗の士に於ける、其の廩祿を重うし、其の禮數を厚うし、之れを養ふに廉恥を以てし、而して敢て細故を以て其の勇往の氣を撓めず、空鍛摩勵其の骨髓に淪せりき。今の俗衰へたりと雖も、忠信義勇の風、固より外蕃騙逐の卒の能く及ぶ所に非ざるなり、若し又其の弊を去り、其の衣食の欲をして外に誘はざらしめ、巧利の心をして內に動かざらしめ、奮發激昂爭ひて忠義の途に聘せ

しめば、夫れ人職に死するの思必ず油然として生ずべし、然れども是れ獨り能く其の氣を鼓するのみにして、未だ其の力を錬るに及ばざる也。

我れに劍あり、彼れに甲あり、劍を作して其の利ならんことを望まば、豫め先づ鍛冶の術宜しく其の奥秘を盡さゞるべからず。

乳猫の奮ふや、其の氣能く犬を走らす、而かも能く之れと久しきを持し能はざるもの、其の力固より敵せざれはなり、故に徒氣は以て勝を制するに足らざるなり。

茲に彼の堅甲に對す、機一髪、沒奈何、我が劍の鈍なる、沒奈何、嗚呼我が劍の鈍なる。

今刀槍演ずと雖も、其の技則ち華法に局し、騎射習ふと雖も、其の術則ち觀美に專らなり、肌膚脆弱にして以て寒暑を禦ぐに足らず、露宿一夕すれば則ち感冒して頓けん、此れを以て戎に就く乳猫の犬に敵すると一間ならんのみ、則ち亦豫め之れが所を爲さゞる可からざる也。

茲に堅甲を打つ、憂然として響あり、更に重打す、劍身折く、我れ蹉し、彼れ乘す、天地震撼、萬事休す。

故に巨躍以て其の足を健にし、石を投げ以て其の体を鍛え、武技の演其の名を捨て專ら其の實を責め、然る後之れに教ふるに座作進退の節を以てせば、目旌旗と眺れ、耳金鼓と貫き、万卒一心以て其の果を致すべし、是れ膏油の田にして又其の土化の術を盡すものなり、此の如くにして而して後始めて其の效を望む可きのみ。

我れに劍あり、其の劍利なり、飛躍一丈、颯然として腥風起り、電撃一閃、驟然として血雨降る、彼れの堅甲割きて瓜の如し、微笑顧望、天地爽颯。

今や其の弊を識らず、其の實を効さず、百戰陷登の功を以て驕惰優游の士に望み、南面其の下に號して曰く、我に百万貔貅の鋭有り、虜何をか能く爲んやと、嗚呼此れ黠虜の覬覦止まずして査冥の際に

抃舞する所以なり。

醒來蹶起して我れを顧れば、惟此れ寸刻の夢なるよ、嗚呼此れ寸刻の夢なるよ。立つ所は之れ搖撼の地なり、仰ぐ所は之れ氤氳の天なり、徘徊顧眄、惆然として悵み、喟然として嗟き、百方わづかに一路をひらきて、慨然疾呼、一涙一襟、交々困頓の背に加ふ、志士國を憂ふるの情夫れ切なるかな。

海防策 三

攻守は一なり、進みて以て攻む可くして、而して後以て其の守を全ふす可し。兩刃相撃つ利鈍有るに非ざるも撃たるゝもの必ず鋭く、何となれば、則ち撃つものは進みて撃たるゝ者は自ら守ればなり。故に善く國を守る者は、必ず進み戰ふの機を畜ひ、攻むる者をして警懼疑惑して、隙自ら救ふに遑あらざらしむ、故に兵鋒頓けずして常に万國の上に立つ。

一歩西するは一歩東に得るなり、守と攻と其の捘元一にして其の途異なる、常人意茲に到らず、願佇低回動もすれば其の守る所を失ふ、意はざるかな、今先生の此の辭を視るに取往の氣稜々として抑ふ可からざる、猶は顆脫の錐のごとし、眞に之れ陽明默契の意否な吾が士人特有の氣魄なり。

策士の言に曰く、虜海を用うるに巧にして陸を用うるに拙なり、我れ且つ之れと海に爭はず、之れを阻に扼して以て其の前を困しめ、之れを陰に陷れて以て其の後を斷たば、晝は即ち伏襲の便あり、夜は則ち掩襲の利あり、多方以て誤らば、我れは各自其の國に戰ひ、賊は未だ曾て經ざるの地に動く、糧運繼かず、救援便ならず、之れを敗る易易たらんのみと、是れ守の守たるを知りて、未だ守の攻に非ざるを知らざるもの、得て全かる可からざるなり。

善いかな策士の言や、若し敵をして傀儡なら

しめは、其の操縦の術些の遺算なく遺憾なく、挨拶手自ら隨ふ可し、但利害の實際に於て、果して能く其の用を爲す可きや否なや。想の巧にして慮の拙なる算に於て缺く、泛々たる策士の大事を誤るもの概ね此に因る。

源平両來、川を渉りて戰へるもの三たび、渉る者常に勝てり、蓋し渉る者は必死を期す、既に濟りて其の氣益す旺なり、而して我れの川を特みて以て阻ぐに方りて、川則ち既に濟らる、則ち獨り奔敗して以て其の鋭を避くるあるのみ。

渉るも可なり、渉らざるも亦可なり、畢竟惟時の勢其の宜しきを採るにあるなり。然れども、進む者は常に氣の鋭に乘じ、止る者多くは怯氣に襲はる。人同じうして勢同じからず、勝敗の數蓋し此の機微に係る、予亦寧ろ敢往の前者に與せん。

今廣大洋に航して万里の外に戰ふ、勝敗の係る所特に海岸尺寸の間のみ、則ち必ず死力を出して以て之れを爭はん、爭ひて之れを得なば、必ず砦を築き營を列ね、艦と相連りて以て其の根を固うし、取て深く入りて以て其の鋒を挫かざらん。既にして來る者益す衆うして、漸く以て其の境を斥くらば、則ち多方以て誤るもの、或は彼の爲めに用ねらるべし。

寸を得て而して後徐ろに尺に及ぶ、未だ始めより其の大を攫まざるもの、實に之れ黠廣蠶食の巧手段なり、知らず我れ、痛疽の發する其の根初め毛孔と擇ぶ所なきを、危いかな。

然れども、是れが策を爲す者蓋し亦說有り。

襟を正して先生の高說を聽かん。

廣艦山の如く、其の堅き鐵の如し、而して我が舟は則ち小にして脆し。今小舟を聚めて仰きて之れを攻めば、特に兵を堅城の下に頓くごときのみならず、我が士精なりと雖も彼れを如何せんや。管子曰く、器械は以て戰を助くる所なり、而して器械は天下に敵無しと、夫れ器械は竊者の以て天下

に敵無きを求むる所なり、則ち全勝の形を制せんと欲せば、器も亦修めざる可からざるなり。

氣は依りて以て志を展ぶべし、武を演ぶる宜しく器に依る可きなり、赤手猛虎を搏つもの予亦勇者の爲めに之れを惜む。

故に國を守るの策其の要海に在り、海戰の術其の功船に在り、船を用うるの道二有り、裡海は小船に利し、而して外洋は巨艦に非ざれば其の勝を全ふする能はず。

船の用我れ其の意を得たり、小大兼備ふ、守國の策庶くは遺憾なからんか、且く默して其の詳を聽かん。

夫れ裡海は、波恬かにして礁多く巨艦に便ならず、今我れ更に我が船を造る、其の大巨礮を發す可く、其の堅以て鳥銃を禦ぐに足り、槍刀十夫、礮兵を右にし左にす、此の如きもの數百千隻、賊船來らば星布して之れを彈たんに、其の艦既に大なり、發して虛丸無からん。而して我が船は進退飛ぶが如く、廣き丈尋丈の間に過ぎず、廣礮巧なりと雖も、發して命中する能はず、是れ我れに餘暇有りて、而して賊は自ら救ふに困むものなり、然る後槍刀亂れ破り、我れの長ずる所を以て彼れの短所に巧みにする、是れ百戰百勝の術なり。

謂ふが如き小船果して能く廣の大艦を凌ぎ得可きや否なや。先に策士の言を斥け、今將た自ら其の轍に駛す、畫する所の成算同じく亦數籌を誤るなきか。蓋し當時にありては、或は是れ究竟の策なりしならんが、未だ遽かに首肯し易からず。先生にして尙は此の言を爲す、以て當時の物情を察るべし、策士の言獨り笑ふ可きに非ざるなり。

然れども是れ特に之れを裡海に用う可きのみ、外洋に至りては、一碧万里、巨浪天を掠め、小船掀翻して葉の風に飄ふが如し、之れを追ふも及ぶ能はず、之れを圍むも合する能はず、而して賊は且つ大礮を列れて之れを連擊す、是れ敗を取るの道

なり。

茲に至りて先生も亦其の及ばざるを知る、其の算に於て一半之れを得たり。

且つ夫れ海鬪は陸戰の比に非ざるなり、林藪沮澤の以て我が兵を伏すべき無く、山川丘阜の以て賊衝を遏むべき無く、坦然洞達、前後咸く露はる、我左すれば則ち賊も左し、我れ右すれば則ち賊も右し、機變の策其の間に行ふ能はず、特む所獨り大艦のみ。

籌算到りて設備其の宜しきに伴ふ、大艦大に修めざる可からず。

或は曰く、王者の膚に於ける、諸れを境に驅出すれば則ち止む、必ずしも窮追して以て我が武を黷さんや、巨艦何をか爲さんと、此れ特に以て昔夷を論ず可きのみ。

虎を畜いて猫に類するもの、我れ既に之れを聞けり、借問す、君子を擬するもの、夫れ何に類せんか。只見る先王の風遐く我れに乖き、

夷蠻の俗還く臣妾に薄る、未だ其の貌の損々を扮ふに遑あらずして心既に憧々たるを。

咄、這箇の漢子、何ぞ昔夷をも論ずるに足らんや。

今や万里を踰えて以て人の國を盜まんとす、其の欲大にして、其の謀深し、固より小蚓の能く懲る所に非ざるなり。

いな、懲らさずして止む可きに非ず。沒奈何我が王赫として怒るあるも、我が師紛として振はず、嗚呼夫れ之れを奈何すべきか。

且つ我が地東西千里、若し賊をして、海を蔽うて來り、地を擇みて上らしめば、一諸侯の力或は以て之れを制するに足らず、則ち必ず將に隣邦をして相救援せしめんとするも、小艇未だ以て輻く往く可からず、陸行又兼日の程あり、則ち我が事去も乘ず可き所なり、憂國の壯念々茲を去らず、

先生亦是れに由りて以て此の編をなせり。

即ち此に至らざるも、數艦を近洋に泊め、運船を要して之れを擊たば、海内億兆の民坐して其の困を受くべし、故に曰く、全勝の形を制せんと欲さば、器も亦修めざる可からざるなり。

戰雲幕として敵艦邊海を壓す、而して我れ茲に戰艦を修むるを論議す、今日よりして之れを觀れば、悚然として寒心するに先たち、寧ろ其の滑稽なるに失笑する者あらん、然れども其の笑ふ者は、盜を見て繩を綯ふ者の、やがて何事をか爲さずして止まざるを知らず、倒顚踵を回らして、己れ人をして其の醜を笑はしむる無からば幸ひなり、國士の論策、夫れ其の神に於て察よ。

龜谷毅侯先生

算海私議

編中收むる所五章、審夷情上、審夷情下、修戰艦、七算、陸戰、中三章を省き、首尾二章を抽きて以て其の概を挙く

▲審夷情上

夷情は猶賈情のごときなり。

一句直截膚の心胸を披く、劍離剖解快刀手に應じて辨ぜん。

嘗て聞く、都賈の衣を鬻ぐ者、衣を肆に懸け以て客を延く、田舍兒あり價を問ふ、一二應答の後、其の色を怒らし、其の聲を勵まし、以て之に加へ之れをして氣怵れ、魄褫はれ、必ず買はざるを得ざらしむ。夫の脅肩諂色怡聲以て客に媚ぶるは商賈の常態なり、今は則ち之れに反す。彼れ固に卑うして順へば十にして或は五を失ふも、威して制すれば十にして九を失はず、當今英夷の情何ぞ此れに異らんや。

比するに商賈を以てする甚だ可なり、更に僞を賊兒に採らば、夫れ愈よ可ならんか。

夷既に滿清を刼かして其の志を得たり、其の我れ

此の編もと年代よりすれば、則ち息軒先生の海防策の前に出す可きなり、今は便宜の爲め後に錄せり。

を視る猶は田舍兒のごとし、曰く、悚すに清人の敗衂を以てし、而して互市を勸めなば、則ち必ず懼れて應はん、若し應はざらんには、則ち歲に三四次、游船を遣り、其の邊海を詗ひ、或は薪水を需め、或は人畜を掠め、或は山川を測量し、或は忽ち入りて忽ち出、勢將に邊釁を開かんとする如くせば、彼れ開釁の遂に亂を致すを懼れ、必ず之れを憂へん、憂へて後使を遣はし再び謀らしめば、彼れ必ず應はん、三五載を出ずして我れの欲獲つべしと、是れ固に威を以て制するの術なり。

賊兒の刀を他の心に擬する、其の意固に其の財を獲るにあり、强ち其の膽を剜らんと欲するに非ざるなり、則ち財にして獲るわらば、鬼面忽ち嘻々として夫の牙を露さん。

故に噭嘯に迫りて以て書を捧げ、琉球に過りて以て地を測り、朝鮮に軼りて以て物を掠め、浦河に入り、崎港に入り、蝦夷島に入り、以て陸梁の狀を示す、其の意掌を指して視る可し。

作色厲聲、擧手投足、暴騰して長身更に長きこと三寸、賊兒最も苦心の所。

且つ既に互市を許さば、則ち必ず地を借らん、既に地を借らば、則ち又城を築かん、夫の地を借り城を築きて、然る後禍鍾を旋らず。

既に財を獲て又膽を剜らんとす、何等の暴ぞ何等の惡ぞ。

伊斯把泥亞の呂宋を奪ふや、初め牛皮大の地を乞ひ、之れを許すに迨び、即ち牛皮を以て縷と爲し環して之れを經し、城を建て兵を置き、遂に以て之れを取れり。清の乾隆中、英夷珠山天津を借らんことを乞ふ、允さず、嘉慶中舟山を乞ふ、又允さず、道光の一揆に至り、遂に得て廣州、福州、寧波、厦門、上海に據れり、夫の其の辭令詭譎呂宋に於ける如き、志欲牽造滿清に施ける如き、皆慣用の策なり。

膽亦遂に合せ奪ふ、貪殘饜くなき醜の夷、其の情既に賊兒の暴を超ゑて、實に惡魔の虐に

入る、惡魔は我れ其の比す可き者を知らず、唯夫の人の子を殘賊し、人の祀に血食し、而して尙は陽に仁義を口に爲るを見る。

或人曰く、夷兵天上に强し、我れ互市を許さゞらば、則ち憤怒して來り寇すること、豐公の韓を征し如く、忽必烈の鎭西を侵し如くならば、所謂疾雷耳を掩ふに及ばざるものか、而して子獨り互市做地を患ふ、亦末ならずや。

其の言大に可なり、其の意は奈何。實に論者の言の如く、夷の强夫れ實に强きあらん、然れども且つ聽け、我れまづ兢々として彼れに對へば、唯見る威貌赫として神將の眉を軒るを。忽ちにして我れの弱き嬰兒の如く、骨拔け筋萎へ匍伏して曰く、降參、降參、固是れ强弱あるに非ず、哂ふ可きかな。所謂當時の開港論者概ね這箇の亞流なり。

予曰く然らず。

志士亦腕を扼して曰く、いな、いな、いな、

冥想半世紀

來れ夷賊、やれ舍利になるまで、礮丸我れを粉齏せば、利刀彼れを万段ならしめん。此の意氣有りて國家存す、賞す可きかな。

豐公忽必烈は誇大を喜ぶ者あり、英夷は算數に密なる者なり。

心鏡照し得て明かなり。

誇大を喜ぶ者、其の兵を擧くるや暴なり。算數に密なる者、其の師を出すや漸なり。

猛獅の驀然として搏つや、天地爲めに震憾す而かも一搏失りて復甚だ振はず。唯恐る獅子身中の虫、夫の牙なくして、亦爪なくして、而して遂に獅子を斃すに至るもの、唯夫の漸を以ての故なり。怖る可し、戒む可し。

夷の計必ず曰はん、兵を用うれば則ち日に千金を費し、通商すれば則ち歲に億万を得ん。戰捷名あるも、いかでか交易の利あるに若かんや。今日一を取る、豈でか明日十を取るに若かんや。

眞に之れ泰西策家の圖、茲に質實直情の學者

に依りて、巧智變通の術を聞く、照應甚だ妙ならずや。

鴉牙を市りて以て人命を戕ひ、金穀を竭して以て國精を涸らし、法教を勸めて以て民心を移し、釁を見て舉らば、易きこと籌を振るが如くならんと利を先にするが故に兵を後にす、兵を後にするが故に其の利必ず獲つ、其の兵を先にせんとする如きは形なり、情に非ざるなり。

意の趣く所刀之れに應じ、剖解自在、虜の眞情を露呈して遺憾なし、眞に之れ妙手無双。

慕容農符秦を滅すを謀りて曰く、果を未熟に取ると、自ら落るに取ると、晩るゝこと旬日の間に過ぎず、然れども其の難易美惡相去ること遠しと。英夷の人の國を簒ふ、亦其の自ら落るを竢つ晩るゝこと數十年なりと雖も悔なきなり。夫れ唯是の如し、故に互市の請許を可からず、而して邊備へざる可からず。

策士學者を喝りて曰く、學者甚だ時務に迂な

りと、而かも猶ほ此の言あり。特に夫の紛擾混亂邦内擧げて釜中に煮らるゝ如くなりし時に於て、獨り熱悶の群に離れ、冷眼西天を睥睨して醜虜の心胸を觀取し、諄々として之れに對するの策を說く、之れ夫の所謂迂なる者か。他の狂奔に奔らず、他の顚倒に倒れず、泰然己れを持して其の節を屈ぶる者、之れ實に迂なりとせば、天下迂を希はざる者、其の迂却て度す可からず。謂ふ勿れ、鎖港時勢に乖けりしを、當時を以て之れを察れば、鎖港實に時の勢なりしなり。謂ふ勿れ、西人簒奪に意なかりしを、當時我れの能く印度たり呂宋たるに至らざりしもの、一は列強の均衡互に相拘制する所ありしに依れりと雖も、抑も亦、一指を染めば一指を斷らん志士敢慨の氣外夷の心膽を寒からしむるなかりせば、夫れ或は辛うじて現下の朝鮮たるに過ぎざりしならんか。茲に於てか、夫の所謂學者の迂論な

る者、其の功却て千秋に沒す可からざるを見る、策士實に安んじて可なり。

▲陸　圍

明の諸葛聲我が用兵の狀を記し曰く、戰士埋伏を善くし、數ば〳〵遶りて我が軍の後に出、兩面夾攻毎に寡を以て衆に勝つ、華人輒ち其の術に墮る。其の來り戰ふや、圍結分散、三々五々、一人扇を揮れば伏者四に起る、之れを蝴蝶陣と謂ふ、尤も刀法に精し、刀の長さ五尺餘、双刀を用ふ、則ち丈餘の地に及ぶ、又手舞六尺を加へれば、開鋒凡そ一丈八尺、舞動すれば即ち上下四旁悉く白うして其の人を見ずと。

南北朝の末造、室町の初期の交に方り、吾が武夫の海に航して支那に到り、其の沿岸諸州を刼掠しし者ありき、明朝爲めに師を出して之れを討伐ししが、而かも戰ふ毎に勝つ能はず十万の大兵奈何とも爲べきなく、瞠目定身畏れて蝴蝶陣と稱し、扇旗の指す所死の如く

解けにき。然れども彼れ猶支那にありては其の天兵たるを失はず、蝴蝶陣我れにありては抑も如何なる者なりしぞ。固是れ亡命放浪の士、食を求めて得ず、武を用うるに地なかりしもの、一旦波を踏みて彼岸に到れば、威武煥發上下爲めに震駭す、而して夫の所謂天兵なるもの亦用うるに術なき夫れ此の如くなりき特に我が刀の利害に寒心せりし其の狀就きて見る可し、是れ我れの强さなるか、將た又彼れの弱さなるか、今茲に謂ふを須ゐず、彼の使臣幣を厚うし辭を卑うして來れる數次、之れが還召慰撫を吾が室町の府に請へりしに察れば、堂々たる明朝の鼎呂、無端泛々たる我が浮浪の手に翻弄せられしを見る、亦快心の事ならずや。

岩陰子曰く、嗚呼此れ明人の畏れし所、而して亦諸れを西洋戎虜に加ふ可きなり。

何者か一爆雲碧を劈く、輪實萬千の刃と化り

て、將に賊殺として戎虜の頭上に降らんとす吾れ嘗て古今兵馬器械の沿革を考ふるに縞に異なるあり。圖書の說く所を觀るに、上古槍稍俱に有りき、而して源平の戰南北の爭に及びては、弓馬劍法盛んに行はれて、槍獨り廢りて用ゐられず、永祿天正に至るに及びては、槍行はれて弓馬衰へしが如し、是れ何の故ぞや。

其の故如何、予亦聽くを希ふ所盖し上古槍有りしと雖も、諸れを鹵簿儀伏に用ね、衛士をして習はしめしのみ、輓近の陣制の如く、一隊の士をして悉く之れを執らしめしに非ざるなり。

木人稍を執らば、石女將た何をか爲さんとする、予試みに之れを洞山の師に質さん。

二源の康平文治に興るに及び、領する所の兵多く關東に在り、關東馬天下に多し、馬上弓刀俱に利ありて、槍獨り便ならず、故に二源最弓馬劍法を以て雄を稱せり。南北朝の時、楠中將嘗て一た

び槍を用ゐしか、未だ幾ならずして戰死せり。天文年間に至り、外蕃鳥銃を傳ふ、銃の馬を射る百發爽らず、是に於て、騎戰變じて步鬪となり、而して槍乃ち大に行はれぬ、理勢然りしなり。

叙來簡にして其の要を得たり。

夫れ我れと戎と技短長有り、而して我れ又古今の異有り、其の短長を審かにし、諸れを古今に參うるに、騎戰を復して而して益す刀法を練るに如くもの莫し。

外蕃鳥銃に巧なり、鳥銃騎戰に利ならず、而して茲に步鬪を謂はずして騎戰を謂ふ、夫れ鳥銃の利害を奈何せん、先生の所謂理勢に反く所なきか。但予が言は穿鑿の理屈なり、先生の言は理屈以外の理屈なり、穿鑿の細なるもの往々にして其の用を誤ると雖も、直心默契する所のもの、其の發するや金石亦貫くの力あり、刀法練る可し、騎戰復す可し、單に理を以て律す可からず。

夫の馬の始めて船を離るゝや、蹄痺へて走る能はざるもの數十刻、則ち或は馬有りと雖も遽かに用う可からざるなり。而して其の卒方庶く氣鈍く身に堅甲無し、接戰用うる所專ら劍首銃に在り。劍首銃刺す可くして斫る可からず、防ぐ可くして刺ふ可からず、即ち防も亦刀刃の便に及ばず

膽亦我れの斗大なるに及ばず

我が士は甲精にして身捷なり、加うるに銛刀を以てす、舞動一丈餘尺、刺す可く、斫る可く、防ぐ可く、刺ふ可し。

光銃陸離盤旋して面の向くべきなし。

其の馬を列ぶるや、一字直陣、分ちて數隊と爲し鞍頭短銃を置き、一發の下刀を揮ひて驚せなば、四當八突手に應じて人無からん、是れ陸鬪の長技なり。

亢龍角を擧げて雲際に躍る、忽ち見る翼羽の地に片々たるを。

或人曰く、騎戰を復するは善し、然れども、大坪道禪馭法を變じてより、今世の習ふ所皆禮御の法のみ、所謂軍馭は、其の潭奥を突く者に非ざれば肯て說かず、說くと雖も亦常に習はず。

世に謂ふ畑水練、久うして土に溺るゝものか否か。

且つ馬を養ふ者、鬣を截り、毛を蟠き、筋を斷ち爪を剝り、務めて外貌を華かにす、而して馬の天鑿く、則ち古に復せんとすとも、蓋し遽かに變じ易からざるべし。

繪馬盡出でて草を食む、金岡筆を投じて曰く後世恐る可し、恐る可し。

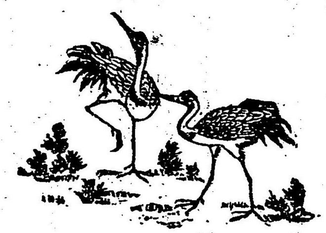
曰く、世に牧師といふ有り、一條の紐を把り、野馬を捕へて跨る、水を驀せ、石を蹴り、嶮を涉り阻を凌ぐ、坦途と異るなし。逐犬の戲といふ有り、犬を埒に放ち、驅迫して之れを射る。左欹、右側、嘆伏、狼顧、馬を使ふ身の如し、此の二者皆習と用と一なるもの、而して方今の諸侯亦之れを爲す者有り、推して諸れを天下に及ぼす、朝廷

一號令の力に在るのみ。

然り、一號令の力にあり、沒奈何、皇謨式徹朝令甚だ行はれず、茲に白屋の士臣をして、其の我れの言ふ可き所を言はむ、嘆す可きかな。

夫れ勝敗の決は、短兵戰を接するに在り、而して我れの戎に讓る所のもの惟炮のみ、炮は迫り近づけば則ち用を爲さず、我れの兵をして、死を鬼れず、傷を顧みず、一伍火に殪れ、數隊間を以て入らしめば、則ち炮巧なりと雖も患る、所なきなり故に騎戰を復して益す刀法を練るに如くものなきを曰ふなり。

一伍火に殪れ、數隊間を以て入る、其の粗、其の暴、理に反き、情に乖く、固より論なし然れども、之れ曾て我が戰國武士の平然として實踐し來れりし所、而して今復茲に我れの躬行を必する所、奮然眼を決つて虜艦を臨めば、脾肉頻りに動きて我れ我れを忘る、又何ぞ銃丸あらんや、唯此の百錬一團の氣魄、發して天雷の震ふが如く、數次洋夷の膽を拉ぎて其の貪殘の手を收めしめ、以て今日あるを致せり、嗚呼丕なるかな



干時露艘北海を荒すの報を聞き、特に上來三編數章を撰きて此の編を成せり、讀者其の意を諒せよ。

彌生

當選十篇

此の欄に掲ぐべき懸賞課題に對して應募原稿二百十餘編、例により其の中十編を選んで當選とし、其の作者に各、同樣の賞品を送ることにした。其の他に選外雅作、題外雅作各、數十編を掲げた。順序は必ずしも優劣によつて前後したのではない。

明治三十七年三月　　選者しるす

彌生　當選十篇

彌生

熊本縣　山田　憨

僕は春の彌生になると毎時も百感胸に湧いて來るが、今第一に浮び出でた感は即ち菊池神社（城山とも云ふ）に關することである。菊池神社は菊池公の一族を祭つた所で熊本城を北に去ること五里、隈府町東端の丘陵即ち菊池公の城跡に在る。

僕が

此の城山はまとに眺望絶佳の處で菊池の全郡眼中に集まり、又滿山の櫻樹が神社を守護して居る。故に櫻花爛熳の候になれば薫香空に滿ち花花を擁して風も通さぬ有樣である。

雲かとまがふ櫻の花の盛りに城山に登り行く人々を見上ぐれば、色ある雲に包まれて行く樣に見え、見下ろせば自分も亦其花の雲に乘つて居るかと疑はれる。

菊池川、迫間川は綠麥黃菜の間を長蛇の樣に蜒々と十里の沃野を流れて居る。近くは北に壯士の臂つた樣な八方が嶽が聳え、東には美人の眠つた樣な鞍岳が霞の衣に纏はれて居る。遠くは西の方に牟醒牟醉の金峯山が春色淡蕩の中になやんで居る。是れが城山の彌生の風光であるが、誰れも此の絶佳の景趣に見とれぬものはあるまい。

僕は此の城山の櫻花を以て天下第一となすのである。

楠公は日本最一の勤王家であるが其の子孫には兎角の評があるけれど我が菊池公は子々孫々に至るまで悉く勤王の士である。嗚呼是れ日本武士の典型ではないか。僕が嵐山、墨堤の櫻も城山の櫻に比較が出來ぬと言ふのは即ち艶麗なる櫻花に加へて菊池公の永遠不滅なる精忠があるからである。實に此の城山には忠勤なる菊池公の神社と婉麗なる櫻花とが佐保姫の祝福の中にある。これをしも天下隨一と言はずして何をか云はうぞ。僕は「敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻花」の歌は此の城山の櫻花の爲めに古人が謠つておいたのではなからうかと思ふのである。

評、菊池公と櫻花とを相對せしめたる所、佳。

花の蝶

岐阜縣　可兒淳一

「我が年の寄るとも知らず花盛り」など、詞人墨客ならぬ人々までうかれあるいた花の春も僅か一時で、はや形見に殘つた梢の花が珍くなつた頃、一日の暇を得たから日頃の積鬱を慰めようと思つて

平岡山の邊に散策した。麥の秀色を呈したる、柳の濃い陰をなしたるなど、暮春の野外にもなかなか眺めにおかぬ景色がある。殊に鶯の、音こそ老いたれ小鳥の囀る聲が階々として落花を浮べ去る小川の潺々たる響きに和して居る風情などは實に詩的で無限の趣味を有して居る。折しも東風が梢を吹き渡つて殘りの花の二三片がヒラ〳〵と散るのを、さも嬉しそうに蝶が飛んで來て戲れ舞うて居る。之れを見てフト古人の句を思ひ出した。

「うたゝねの夢とも知らず花の蝶」。アゝ蝶の汝は百紫千紅の眼を照らす春の色香に迷うて居るのだ。汝は一生いつまでも此のように樂しいと思つて居るのだ。アゝ不憫なる蝶よ汝は自身の生涯を知らないのである。春過ぎ夏去つて秋風の身にしむ頃に至つて汝は初めて思ひ知るであらう。其の美くしい毛、麗はしい羽は空しく滅して哀な醜い身體となり終には蟻の住處に這ひ込んで哀願するの止むを得ぬような境遇に陷るのである。アゝうたゝねの夢とも知らず花の蝶、汝は何時迄迷つて居るのか何時迄遊んで居るのか。併し此くの如きは獨り汝蝶のみでは無い、其の外にも之れに似たる者の有る事を忘れてはならぬなどゝ頻りに考へて居る間に憂鬱の氣は悉皆去つて光風霽月のような心地になつた。アゝ愉快實に愉快、時に曉鴉數點北の森を指して歸ると思ふと、行く春を惜しそうにつく禪臺寺の晩鐘が殷々と響き渡つた。

評、文も光風霽月の如し。

花だより

橫濱市　石上龍造

花のお江戸より謹啓。一昨朝、函館埠頭にて揚げし別杯の二日酔未だ醒めぬうち、身は帝都の客となり相成申候。早速御指定の旅館に行李を卸し候。同家至極丁寧なる待遇にて、誠に居心好く、諸事便利を得申候。安着御報旁御禮申上候。旅程の沿道、菜の花に、大根の花に、春の田園を彩り居り、北海の雪の中より出でたる目には、眺め飽かぬ景

色に御座候。都は梅桃は過ぎて、櫻も早や八重の眞盛の由、氣候の相違には、今更乍ら驚き入り候。素袷に伊達を競ふ都人士の中へ、綿入二枚重ねの迂生の服裝は、停車場にて、一見在京諸氏の目に判別致され、却つて好都合を得候も、可笑しく候。

折柄の日曜を幸ひ、本日諸子と觀櫻會相開き候。九段上野は早や、花吹雪と現じ、今日一日は、隅田に止めをさし候。咲きも殘らず。散りも始めぬ花盛り、今日見ずは三日見ぬ間の悔あらむと、申し合はせたる如く、花に醉ひたる滿都の人足を、此處に引き候へば、何とも申樣なき混雜にて、花雲千段、紅塵百丈、墨堤沈む事五寸、人を見るや花を見るやの、判別に苦しみ申候。併し、花より團子黨多きは、堤上堤下の茶店飮食店、皆客止めの好景氣にて、言問の名物は、兎ても口に入らず候、一年の生計を花に取り上ぐるとの噂も、虛言には無之樣思はれ候。此の人波の中を漸く、竹屋の渡しにて向岸に漕ぎ拔け、ホッと一息付き申候。

歸樓諸子と久々にての會飮、愉快の極を盡くし候。御承知の如く限り有る日數故、之れを別杯と致し、今夜終列車にて、故郷へ出立可仕心得に御座候。次便は故郷より御意を得可申候。在京諸兄に宜しく、御鳳聲奉願上候。花の一枝をとも存じ候へ共、遠方故思ふに任せず、せめてはと幾片を卷き込め置き候、御披見被下度候。落花の片々たるは、上野に九段に銅像の傍の物に候。又濃艶なる八重の幾房は、墨堤のに有之候。これにて優しき君が花心の一端をも、慰むるを得ば幸甚。

評、讀み得たり君が優しき花心。

彌生

名古屋市　大島孝恭

誘ふ風に姿をみだしては、ひそかに川の面を鏡となして綠の髮をくしけづる。柳や誰れに靡くらむ。

鶯は木々の枝を傳はりつゝ平和を謳ひ、空高く立ち登る雲雀は恰かも己が袖より出でたるかを疑はしむ。

綠の若草の上に紅、白のリボン付けたる七ツ八ツの少女三人四人、「春の彌生」を歌ひつゝあちらこちらと立ちさまよへるは菫をつむらむ、土筆をやぬくらむ。水車の音も今日は何となくゆるく、恰かも少女子の唱歌の調子に合すが如し。あゝ平和なる春の日。

行く水は絶えず何か低き聲を以て私語くが如くなれども聞こえず、行く雲は絶えざれども而かも風なし。月、霞、水は皆白う恰かも白衣の天使の降りたらむ如くいづくよりか馥郁たる香を送れども亂れ咲く梅も櫻も見えず。欵乃の聲ゆるく聞こゆれとやがて渡江のかなたに消にぬ。あゝ長閑なる春の夜。

評、長閑。

春の日影

兵庫縣　茶谷忠治

二輛の人力車がガラ〳〵と去ると其の家の娘の喜美ちやんが、美くしい着物にお化粧をして出て來て、紅梅の花の二つ三つ咲き初めた庭の椽先の柱にもたれかゝつて、微笑んで居る其顏の美しさ。此の娘は明けて十八歲、近いうちにお芽出たいことがあるので、今日が其お見合ひであつたとのこと。

「喜美ちやんお目出たう！」と鸚鵡が言つた。

此のお正月にから言つて大そう喜美ちやんにはめてもらつて、くるみを頂いたのを忘れないで、喜美ちやんを見さへするとかう叫ぶのである、喜美ちやんは顏を紅めて「おほゝゝお正月でもないのにお目出たうなんていけませんよ」と言ひ終はらぬ中に又もや、「喜美ちやんお目出たう！」

喜美ちやんの顏は一入紅くなつた。其所へ柴折戸を開いて、「姉ちやん」と入つて來たのが妹の花ちやんと隣りの美代ちやんとである。手には菫や、蓮花草や、蒲公英を摘んで持つて居る。花ちやんは喜

美ちやんの側に寄り添うて、「姉さん、今お歸りになつた御方はどなたなの？」と覗き込んで尋ねた。で喜美ちやんは、「あれは、よそのお人！」といつた。すると花ちやんは、「おほ……嘘！、姉さんはあの御人のお嫁さんに行くのよ、妾、母アちやんから、ちやんと聞いたわ」と言へば「おほ……花ちやんはお人がわるいよ、嘘ばかり！」と顏を紅らめて言つた。

「おほ……姉さんこそ嘘ばかり！、そんなに紅い顏して、おほ……可笑しいよ、姉さんお目出たう、おほ……」と言ひ放つた。喜美ちやんは又「花ちやんはほんとうに、お人がわるい」と言ふ折しも「喜美ちやんお目出でたう！」と鸚鵡が又もや大きな聲で叫んだ。喜美ちやんの顏は一入紅くなつた。紅梅よりも、もつと餘計に！。

喜美ちやんは、もう堪へられなくなつて、逃ぐる樣に、奥に行つてしまつた、後で花ちやん美代ちやんの二人は清い音で唱歌をうたひつゝ、菫や、蓮華草や、蒲公英をならべて、餘念なく椽先で遊んで居る。春の日影は、ぽか〳〵と此の二人の無邪氣な横顏を照らして居る。

評、鸚鵡の配合めでたし。

春のいろ〳〵

熊本縣　高田友一

梅　しろたへに降りつむ雪と見えつるは
　　梅咲く山の遠望なりけり。

の歌の意のように遠くから見れば丁度雪の降つた樣である。それに谷間を出でた鶯はいと〳〵長閑な春の曲を奏でて居る、一陣の春風は芳ばしい香を送つて來る。

霞　尾の上にたなびく霞は、佐保姫の脫ぎたる衣かとうたがはる。賤の男女が薪取りにと、頬冠りして流行歌唄つて行くのも、いつか霞の中にかくれて、只だ歌のみかすかに聞こえる。

　　春霞薪取る女のかくれけり。

とでもいはうか。

柳　池塘の柳は淋しく立ちて池の鏡に影をうつして居たが、春雨に眉を舒べ春風はたえずそれをしたうて吹き靡かして居る。

　なれて吹くなごりやをしき青柳の
　　たをりし枝をしたふ春風

櫻　敷島の大和心を人とはゞ
　　朝日に匂ふ山櫻ばな

とあるごとく先づ第一が山櫻である。此處の谷間、彼處の山邊に咲きそろつて居るさま實になが〳〵めがよい。折柄颯と吹きくる春風にひら〳〵と三つ四つ二つ袖のあたりにちりくるのは、恰も菜の花に狂へる胡蝶の如く、朧月夜に時ならぬ雪の降るのかと疑はれる。

春草　枯れ果てゝ居た野も山も、皆一陣の春風と共に綠の衣を纏ひ、蒲公英、菫などは黃色あるは紫と咲きみだれて居る。こゝかしこの菜の花の波をうつてそれに赤白黃色の蝶々が、ひら〳〵と飛びまはつて居る。

評、文にも一陣の春風吹きわたれり。

思ひ出

岐阜縣　小倉景傳

今日は日曜日なれど、我れは當市へ來てからまだ間もないことゝて、面白く話し合ふ友もなく、只だぼんやり何を讀むともなく机に對して居た。窓の障子を開け放ちて外を見やれば誠によい天氣である。此の頃の雨からめつきり暖くなつた、浪越公園の櫻もそろ〳〵咲きかけたであらう。あゝ故郷に居つたなら、今頃はどうしてこんな好天氣に、四疊半なんかに立籠つてをるものか。も一度もとの准教員になつて見たい樣な氣がする。人間と云ふものは可笑しなもんだ、家に居た時は名古屋などへ行つたらよほど面白い事があるであらう、どうが一日も早く行きたいものだと思うたのに、此處へから來て見れば、又もとの准教員がしたくなる、無邪氣な子供を相手にして、オヽ今頃はあの永平の櫻の下で、郊外運動やつとるのだ

に、花に戯れ蝶を追ひ而して腹がすけば又櫻の下で子供と一しよに、あのおいしい辨當を……、散りかゝる櫻の花を頭にうけて……。當時(あのとき)はさほどに感じなかつたが、今思へば吾は暫らく極樂園に遊んで居たのである。而して天は吾れに其の樂園を永らく貸さなかつたのである、あゝまゝならぬ世の中よ。

かく思ひつづけて居た所へ忽ち

「午飯が出來ました、どうぞ……」

と膳をはこんで來た、余はわれに歸つて「ハイハイ」と座を立つたが、櫻花の下の麥飯に梅干の御辨當よりはよほどまづかつた。

評、文も亦櫻下の麥飯の類か

春の野

千葉縣　宮本觀

しめやかに降る春雨の、一度々々に暖くなりて、櫻の花もポツ〳〵咲き初め、鳥の聲もことの外、春めける今日この頃、やつとの事で繁忙な家業を終へ蝶の如く羽をのばして、家を舞ひ出たのは九日の午后である。なま暖い風は輕い袖を吹いて何んとなく香ばしく、見渡せば野も畑も、森も林も皆一面、春の女神のめぐみを受けて、美しく、中にも菜の花と、麥の若穗とが、入亂れた所は恰も青波の上を、金蛇の走るようで一層麗はしい。遙か彼方には、當國一の高山國見山が、薄紫の霞の衣を腰に纏うて、莞繭と、余の來るのを待つて居るかのよう。其の姿の如何に尊く、美妙なるよ。

この山より源を發して、村の眞中を縫うて、末は彼の村端れの米摺の水車場の堰口に流れ行く、清い、深い、音無川は、誰れが捨てたのか、すみれの花を三ヒラ四ヒラ乘せて、悠々然と青柳の下を流れ、むせぶが如く微妙なる響を傳へて居る。

やがて國見山の麓近くまで行き、ちよつとした高い所へ上つて四方を見る、其の壯大なる眺望これは〳〵と歎稱するのみであとの言葉が出ぬ。折柄草籠を負うた、六十路ばかりの老母が、孫らしい

六七歳の、男子の手を引いて、嬉しそうに談りつゝ、今自分の來た、途を行くのである。見れば、老母の負うた籠の中より、何に驚いてか、蝶々が二ツ三ツこぼれ出た。頭上には雲雀が讃美の歌をうたうて居る。

あゝこの景色、畫の樣だといはうか、嗚呼形容するに辭がない。

評、畫の如し。

春の一日

滋賀縣　秋田喜三郎

今日も亦耕作すべく、吾れは朝まだきから田へ行つた。彌生の空は麗かに晴れ渡つて、恰も薄絹もて、琉璃盤上を拭つた樣。暖かな日光がポカ〳〵と照らして、何とも云へね好い心地である。これでは仕事も多分に出來るであらうと、それを樂みに勢出して働けば、汗かダラ〳〵と流れるので、どれ一と休せうと、鋤を杖に立ち上がれば、二三日前にはまだ咲かなかつた菜の花が一面に爛漫と咲き亂れて、そよ〳〵と和らかに吹いて來る春風に靡いて、黄金の波を起こして居る。雌雄の蝶であらう、一と本の菜の花の上に美しい羽袖を休めて、その甘い蜜を吸つて居たが、今しも何に驚いたか、ばた〳〵と飛び上つて上になり下になりつゝ青空高く舞ひあがつた。空には雲雀がピイ〳〵と囀つて、自分を慰めて呉れる樣である。

オヽ仕事がお留守になつたぞ、お日樣が高く昇つたぞ、いざもう一奮發と鋤を取つた。

軈て正午になつたので、辨當を開いて飯を食つて、四方の景色を眺めて居た。折しも鈴の樣な美しい、唱歌を歌ふ聲が聞こえた。さて誰れだらうと聲する方を見て居ると、愛らしい小女が二人、垂髮にリボンひらめかして、菫や紫雲英などを入れた花籠を持つて、此處へ來るのであつた。今しも其の中の一人が、紫雲英の花に夢みて居る黄蝶を見つけて、ぬき足、さし足、息を殺してつめ寄り、その白い小さい手を伸ばしてあはや蝶を捕へよう

とした刹那、蝶はくるりと小女の手をぬけて、ヒラ〳〵と虚空遙かに飛び去つた。後に二人はボンヤリと蝶の行へを眺めて居た。暫くすると、亦唱歌を樂しそうに歌つて、あちらへ行つて了つた。自分はそれより亦鋤を取つて、長い春の日もトップリと暮れて、四面模糊たる頃まで耕作した。固より慣れぬ仕事であるから甚く勞れたが、今日の仕事の多分に出來たのを見れば何となく嬉しい。あゝもう運命を恨むまい、唯だ自已の天職に忠實なれば、神は必ず汝に幸を授けるであらう、オヽお母樣がさぞお待ちであらうと、家路に就けば、遠寺の鐘夕靄を破つて響き渡つた。

評、何處までも無邪氣なり。

春の野

渡島國　木本功

我か北海の天地も佐保姫の御車を迎へてより野は淡みどりの新草に畫かれ山は木々の若芽に煙りて霞たなびきぬ。今日此頃は軒端なる梅の一輪二輪蕾破りて奇しき香の書齊に洩れ來るにぞ堪へ難くて或日詩集を懷にし春の日の暖き光浴びつゝ柏野とこゝろざして歩を進めぬ。辿り着きて眺よき丘の上に座を占むれば、あゝ既に鳥の聲！水の囁き！見渡せば彼方に若草を敷きて一群の男の子等、紙にて作れる赤き旗白き旗など押し立て〳〵わめくは此處等あたりの小供等にや、はや運動會の眞似ごとゝ覺ゆ。此方には花籠へ斑に咲けるリリー、たんぽゝ菫など色樣々の草花取り入るゝに急はしき小娘の一組あり、破れ草鞋の下にゆがみて生ひし菫の一つをも摘みて「マア！此處にも」と己が花束に加へし少女も有りしが、花に心あらば如何に感謝するならむ。雲雀を追うては喜びの聲を擧げ花にあぐがれては霞にかくる、彼等の、眼は輝き、頰は茜してにこやかに其の可笑しげなる擧動は、唯だこれエンゼル、噫！世の人なべて如此くば！との嘆は我一人にもあらざらめど。暫しは恍惚として夢の如く我有るを知らざりしがふと心づきて

詩集を繙き、草の褥に身を横へて心ゆく許り朗々と誦すれば聲は澄み渡れる大空に消え行きて、雲雀の聲水流の音これに和し茲に再び沒我の境に入りぬ。

涼風面を掠むるに驚きて眼を擧ぐれば、計らざりき夕燒の雲既に空をこめて夕陽野寺の塔に淡く照り添ふにぞ、見渡せば廣野に人の氣配もせでたゞ霞のどかに若草の香り高く、塒に歸る鳥の聲のみ聞こゆ。急ぎ歸途に付きて小川を渡れば春の光彩れる水の上を冬の名殘とめし枯葦の三ッ二ッ南に去るを認めぬ。

評、淡雅。

選外雅作

春野

群馬縣　蓮辨一郎

ふら〳〵と自宅（うち）を出たのは何時であつたらう、自分は知らぬまに蓮華草、菫、蒲公英など美くしく咲いて居る野に來て居た。いさゝ小川の流れは優（やさ）しい少女子の打つ皷の如く、彼方の松には靜かな風がそよ〳〵と訪づれて緒琴を遠く聞く樣に、幽かな音を立てゝ居る。春の女神の佐保姫が化したのが、黄色な胡蝶の翩翩と舞ふ愛らしさ、餘りの可愛さに、ひたすら追ひ廻せば、又一つ連れが出來たので、愈々面白くなつた。つと立ち止まつて蝶の上になり下になるのを見て、蝶はなぜ斯う樂しく出來るであらうかと、暫時考へて居た。山は未だ笑ひ初めた計りで綠も淺い。樹の間隱れの茅が軒端に、竈から烟の立ち昇る所を。南朝の忠臣新田中將義貞の兵をあげた所ぞと聞いて、そゞろに昔を偲べども、今は村翁も既に記せず。行人亦語らず、唯だ淋しげにふる宮の邊りに草茫々と生ひ繁れる生品（しな）の森。けに春や昔の春ならぬ。時に烏一羽ちよこ〳〵と歩むのを見て尙ぼ更に哀れを感じた。

ゆく行く渡良瀬川の畔に立つ。流れは滾々として漣は兩岸に碎けて居る。北に赤城山を眺め、西に榛名山を望む。對岸の小舟搖々として今にも浮き出しそう、此處は間島の渡船場である。

白の手拭を姐樣冠りにして、股引を着け、草鞋履きたる二九計りの少女、馬の手綱取りて、節而白く歌を唄ひ乍ら、がた〳〵と橋を渡つて、黄金浪打つ茶畑（ばたけ）に消え行くのが、惜しいのであつた。日は最う暮れかゝつて、練絹の樣な霞は堤防の上の並木の松に長く引き渡つた。空に飛べる雲、茜色に彩られたが其れも暫し。見返れば蝶も居ず、人もなし。有繋は山村。四面は寂寞として、夕

日は西に名殘りの色をとゞめ、忽ち鎭守の森のあなたに入つて、夜の黑幕はいよゝ廣ごりゆく。自分は此の景色の中をそぞろあるきして歸路に着いた。

春の色

愛知縣　土屋信二

この二三日めつきりと暖くなつたので、此の間までまだ蕾であつた櫻の花が、ぼつ〳〵咲き初めた。

見渡すかぎり黃金のような菜の花も長閑に、こちらの道端には蒲公英が咲いて、黃色な美くしい蝶々が其の上に來て、ひら〳〵と舞うて居る。つゞいて白い蝶も來て、組みつほぐれつ戯れて居る。東隣りの秀ちやんといふ今年六つになる子供が、そこゝにぶん〳〵うなつて居る紙鳶を餘念もなく見て居つたが、やがてかの蝶に目をつけて「アレ蝶々が」といひながら、ばら〳〵と駈けて行つて、それを捉へようとする、蝶は驚いて飄々と高く向かうの菜ばたけの方へ逃げて行つた。秀ちやんは口惜しそうに跡見送つて居るいぢらしさ。あゝ此の花のやうな淸らかな無邪氣な子供も、やがて浮世の風に吹かれ、遂に罪深き人となるのかと思ふと、實に感慨に堪へないのである。空には雲雀が或は高く或は低く人の稼れ多きを罵る如く囀つて居る。

雨天運動會

名古屋　小田郁治

明日迄に雨がやめばいゝがなア、こんなにやまずに降つて運動會が延びると困るなア、僕は二十四回の二百ヤードでは一等がとれそうだ、いやきつととれる、それはいゝが、雨はやまないかしらなどと思つて床についたが中々瞼が合はないので、いろ〳〵と此前の運動會の時の事などを考へながら、いつしか夢に入つたと思ふ内に早や夜があけた。乃ち蹶起一番、窓を開けば、アヽ昨夜の空想は水泡に歸し、細雨霏々として縷の如く、點滴檐を繞りて聲琴瑟のようである、コレデは運動會はないと悄然としていつもの如く學校へ行き、生徒控室で復習をやつて居ると、突然雨天運動會を開くとの掲示が出た。之れを見た時の嬉しさ、それから飛ぶように家に歸り用意して傘片手に運動場へ行つて見れば早や準備は調へられてゐて、一種の大パノラマの樣であつた。丁度此時第一回の二百ヤードは開かれ、雨にも屈せざる健兒は喝采の裡に、スタートラインに集まり、ズドンと放つ一發の銃聲を後に、驀然奔馬の如くかけだしたが、雨にぬれてゐる運動場のこととて、すべるのすべらないのぢやない、一番に走りでた白シヤツは、前の方へ二間位すべつた。忽ち歡乎の聲は四方に起こつたが折角のシヤツは泥にまみれ恰もポンチ繪を見る樣であつた、而して二番目も其の上へころび、都合四人泥中にすべり、おそく出た哲堂氏が一

等を得た。それから回を重ぬると共にすべつたもの無慮十數名、兎角する内二十四回の僕の番になつた。僕は平常鍛へた腕前を示すは此の時にありと、砲聲と共に一生懸命走りいで初めは中々よかつたが途中勢あまつて後へズドンとたぶれシヤツとヅボン下とを泥にけがし、一等ばおろか三等もとれず、すご〳〵と天幕の中へ逃げこんだのはイヤハヤ面目次第もなかつた。これでは、人のすべるのも笑はれた事ではない。此の時雨は愈〻降り出し、到底續けることができなくなつたから、二十四回を最後として、十年一劍を磨いて流星光底長蛇を逸した恨をのみて、萬歲の聲と共に、無事閉會した、いやあまり無事ではなかつた。

樂しき家

神奈川縣　瀧島欣一

ぼか〳〵と暖い春の日に誘はれて庭前の櫻も一二片蕾が開いた。雀や蝶は今こそ我が世界なれと、梢に囀り花に戯れ、長閑なる春の日を謳歌うて居る。

吾れは此の詩趣溢るゝ如き春の野をいづくともなく、足の行く儘ぶら〳〵花ある方へ赴いた。

菫、蒲公英など思ふ程採つたが、別段家へ持つて歸らうと云う風流心があるのではない唯だ花に接すると、何となくよい氣持になるからである。

長い堤を花に誘はれて我れともなく歩む内、いづしか或る家の垣根の傍へ出た、馬鹿な事をしたと思つて、ふと止まると其の家から優しい歌の聲が、梅が香に送られて來る。はて聲の主は誰れだらうと垣根からのぞいて見ると、風采のさまで立派でない十七八の娘が、盲目の老婆に青葉繁れるの唱歌を謠つて聞かせて居る、實に鄙には珍らしい家庭である。彼の女位の年齡になれば、俗歌を謠ひ、淫話に其耳を滿足させる者が多い世に、彼等は世の惡風に染まずして、純潔なる音樂を樂しみ、閑靜なる野に住み、山紫水明の美を友としてゐる彼等の精神は、實に見上げたものだ、かう考へると、何となく彼女が慕はしいような心地がした。

彼女は歌ひ終はるとやがて老婆に向かつて、『お母さん今日はね、生憎風を引いてゐるから上手に謠へないのよ、明日はね、上手にやりますから。』と言譯するのである。これから親子で睦しく四方山の話をして、長い春の日を樂しく暮すのであらうと、吾れは思ひながら。元來し道を辿つた。あゝ世の高利貸、暴利を貪る奸商、彼等の家庭は、とてもこんなに平和には行くまい、大方朝夕金錢の事から爭論を起こすのであらう。

吾は出來得る限り、彼女の家庭を此等奸商に知らしめて家庭の眞味を味はゝしめ、それと共に、愉快に一生を過させてやりたいものだ。さるにても美しきは彼等の家庭なるよ。

覺悟

上野國　星野茂